第二部　カジノ・ヘルマン・ゲーリングでの休暇

CamScannerでスキャン

きみの今度のお相手は、ハリウッドで一番のトールでダークな男優だ。
――『キング・コング』メリアン・C・クーパー監督が
主演女優のフェイ・レイに

□□□□□□□

今朝の通りは早くも市民の木底の靴[*1]が近くに遠くにカランコロン、見上げれば風の中に、残飯狙いのカモメたち、広げた翼を休めて右へ左へ軽々と滑空しながら時折わずかに肩をすくめるようにして浮力を保ち、白くスローに羽根を撓(しな)らせ、また戻す。まるで見えない親指がファローシャッフル[*2]しているかのようだ。…きのうの午後に遊歩道(エスプラナード)をぶらついたとき、モンテカルロの第一印象は陰鬱なものだった――灰色の雲の下、海はさまざまな灰色のグラデーション、カジノ・ヘルマン・ゲーリングの白一色の建物に、棕櫚の葉が黒いノコギリ歯となってそよともせず貼りついていた。…それが一転、けさは樹々が揚々と陽を浴びて緑を取りもどし、左手遠くには古代の水道橋の崩れかけたループの群れが、干からびた黄色い姿を岬沿いに並べている。岬に見える民家や貸別荘は暖かい錆色に焼(ベイクト)かれ、蒼白い生地の色から濃い照り輝きまで大地の色(アースカラー)の全領域の色彩を帯びている。

　陽はまだ低いが、やがて鳥の翼の先端をとらえ、きらめく羽毛にかき氷の感触を与えるだろう。スロースロップは自分の部屋のかわいいバルコニーに立ち、鳥の群れを見あげながらガチガチ歯を鳴らす。部屋の電熱器は遠すぎてふくらはぎに届かない。彼らはスロー

1　モナコは一九四四年九月には解放されたが、ナチスにゴム製品も革製品も取り上げられていた市民の間では木製の履き物での往来が普通に見られた。

2　半分に分けたトランプを両側から巧みに交互に差しこんで弓なりにするシャッフル法。

スロップに、白亜のファサードの上階のまるまる一室を与えたのだ――タンティヴィ・マッカ＝マフィックと彼の友人テディ・ブロートは、廊下を行った先の相部屋という処遇なのに。スウェットシャツの畝織りの袖口に両手を差しいれ腕を組み、この見事な異国の朝、大気の中へ吐きだされた自分の息の霊（ゴースト）と、朝一番の陽の暖かみに、煙草がほしくなった途端、やだなあ、もう身構えている、本日最初のロケットがドーンと一発、一日の開始を告げる号砲を打ち鳴らすのを。大戦は北へ行き、ここは跡地にすぎないことは充分承知しているのに。ここで炸裂するものといったら、シャンパンのコルク栓を抜く音と、手入れのいいイスパノ＝スイザ*3のエンジン音、あとは妙に色っぽい平手打ちぐらい（であってほしい）。…ロンドンじゃない、ロケットもこない。その現実に適応できるのかい？ できるさ、でも、そうなったらまたロンドン召還ってことだ。

「あいつ、起きてるよ」制服姿のブロート、煙のくすぶるパイプを噛みかみ、するりと部屋に入ってきた。後ろに続くタンティヴィはピンストライプの洒落たスーツ姿。「早いなあ、エスコートなしのかわい子ちゃんが浜辺に出てないかってかい…」

「眠れなくてさ」スロースロップが欠伸をしながら部屋に戻る。後景の日射しの中は凪のように舞うカモメたち。

「こっちもさ」とタンティヴィ。「ここに慣れるには何年かかるか」

「豪華（ゴージャス）だなあ」ブロートの反応は異様に大げさだ。舞台で演じているかのように、巨大なベッドを指さし、その上に倒れこんで思いきり跳ね上がる。「きみの到着をきっと前々から知らされていたのだろう。スロースロップ様、特別室！ おれたちなんか、使っていない物置小屋をあてがわれた」

3 かれら上層部が使う高級車。下巻172〜173ページ参照。

「おい、おい、何を言ってるんだ」スロースロップは煙草を探し回っている。「おれは、ヴァン・ジョンソン*4じゃないんだから」

「いやあ、女の子に関しては」タンティヴィがバルコニーからクレイヴンズの緑の箱を投げてよこした。「そっくりだろ――」

「イギリス男は、シャイだからね」ベッドを揺らしてブロートが強調した。

「正気とは思えん」ぼやきながらスロースロップは私用洗面室に向かう、「精神異常(セクション8)の連中に入ってこられた」だが悪い気はしない。手放しスタイルで放尿しながら煙草に火をつけ、このブロートという男のことを考える。タンティヴィの昔からの友達だというのだが――便器にはじき落としたマッチが一瞬ジュッ――あいつのおれへの対し方がどうも気になる。上から観察しているような、そわそわしたところがあって・・・

「女の子の斡旋を？　このおれに頼むだって？」迸る(ほとばし)トイレの水音に負けない大声で、「情けないなぁ。海峡わたってフランスに来れば、みなヴァレンティノに早変わり、っていうのがイギリス男児じゃなかったのか」

「戦前にはそんな伝統もあったらしいが」タンティヴィが戸口で切なそう、「ブロートと僕は新種のイギリス人で、ヤンキーの専門的な技量に頼らざるをえないのさ・・・」

ここでベッドからはね起きたブロートが、スロースロップを啓発すべく歌いだす。

《イングリッシュマンはとてもシャイ》〔フォックストロット〕*5

〔ブロート〕　イングリッシュマンは、とてもシャイ

4 戦時中のアメリカの代表的な二枚目スター。東京空襲を扱った最初の映画にもパイロット役で主演している。

5 「ウン・パ、ウン・パッ」の2拍子のダンス・リズム。第二部では三曲のフォックストロット曲が流れる。どれにもフレッド・アステアらのミュージカル映画の流麗な雰囲気が感じとれる。

カサノヴァの真似できません
レディーズ攻撃作戦も
先陣切るのはアメリカ人

（タンティヴィ）
イングリッシュマンは持ってない
大西洋の向こう（トランス・アトランティック）のがむしゃらさ
アメリカ的な無鉄砲の、どこがそんなに
ロマーンティック？

（ブロート）
ご婦人たちをたんまり連れた
一夫多妻のヤンキー見てると
英国的な酒乱と淫行に火がつきそう

（タンティヴィ）
それでも秘かに畏怖の念にうたれてる
エロティックなクラウゼヴィッツ*6か、さえないな・・・

（ふたり一緒に）
米国流のベッドの手管と
英国紳士が連合組んだら
あの子もこの子もイチコロだろう
わかっていても踏みだせない
イングリッシュマンは、とてもシャイ

「そうだな、ロケーションは抜群だ」スロースロップは自信ありげにうなずいて、「しかしおれにお膳立てを期待するなよ」

6 プロイセンの軍人カール・フォン・クラウゼヴィッツ（一七八〇～一八三一）は、『戦争論』を著して全面戦争を美化した。

「最初の一声だけでも頼むよ」とブロート。
「モワ」タンティヴィは早くもバルコニーから下に向かって声を掛けている。「モワ、タンティヴィ、わかりますか？　タンティヴィ」
「タンティヴィ」下から若い女のくぐもったコーラスが返ってきた。
「ジェ・ドゥ・ザミ・オスィ――[*7]ぼくにもツレがふたりいますよ、奇妙な偶然、えーと、ビザール・コーアンシダンス、ウィ？」
ひげ剃りの最中だったスロースロップが、どうしたとばかり、泡のついたタヌキ毛の刷毛を握って飛び出てきて、タンティヴィの左肩のエポレット越しに下を覗こうと駆けだしたブロートとごっつんこ。見れば、こちらを見上げるマドモアゼルたちの三つの顔は、それぞれが巨大な麦わらの光輪に囲まれている。眩しい笑顔だ。背後にひろがる海のような神秘をたたえる瞳たち。
「ウ・・・どこ」とブロートが訊ねる、「ウ・デジュネ？　あさごはん、どこ、しますか？」
「いや、お役に立てて光栄だ」タンティヴィの肩胛骨の間に泡をべっとり付けながら、スロースロップが言った。
「だったら一緒にいらっしゃいな」波音に乗った黄色い声がバルコニーに届く。三人のうち二人の娘がとても大きな籐のバスケットを差し上げた。その縁からは緑色の細身のワインボトルが飛び出ている。白いクロスの下には、ゴツゴツとしたフランスパン。まだ暖かくて、その栗色のつや塗りから、ひび割れたところから、白い小さな羽根のような湯気がクルリクルリ上がっている。「ご一緒しませんか？　浜辺で――スュ・ラ・プラージュ」[*8]
「おれ」すでにドアから一歩踏み出たブロート、「ちょっと相手してくるから。きみたち、

7　原文のフランス語部分は、J'ai deux amis, aussi, ...Par un bizarre coincidence, ...oui?。

8　sur la plage

後から・・・」

「スュ・ラ・プラージュ」夢見心地のタンティヴィは眩しそうに眼をしばたたき、朝一番に現れた夢のような現実をニンマリと見下ろしている。「まるで絵画の中にいるようだよ。印象派か。いや野獣派[9]か。光があふれて・・・」

スロースロップの両手からウィッチヘイゼルローションのハネが飛ぶ。この匂いには故郷バークシャーの土曜日の、床屋のひと時がこもっている——壜入りのプラム・トニック、アンバー・トニック、頭上でまわる扇風機、脇で揺れている捻れた蠅取り紙、ときどき痛い思いをした切れないハサミ。・・・くわえ煙草のまま苦労してスウェットシャツを脱ぐ。シャツの首から煙が出てきてまるで火山だ。「もう一本、恵んでくれ」

「何言ってんだ」タンティヴィが大声を張り上げた。「冗談よせよ、口にくわえてるのは何だよ」

「なんだって何がさ?」タンティヴィを仰天させたシャツの袖に腕を通し、ボタンをかけるスロースロップ、その顔はイノセントそのものだ。

「ふざけてる場合か。ヤング・レディーズを待たせているんだよ。なあ、スロースロップ、少しは人間らしい身なりをしてくれ、たのむよ」

「これでキマリ」スロースロップは鏡の前を横切りながら櫛を出して、いつものビング・クロスビー風、ポマードたっぷりのオールバックを掻き上げた。

「本気かい、こんな恰好した[10]やつと、僕が一緒に歩くの——」

「これはな、兄貴のホーガンが送ってきてくれたんだ。おれの誕生日に、はるばる太平洋からだぜ。裏を見ろや、アウトリガーの付いたカヌーに人が乗ってる、その下、ハイビス

9 タンティヴィが思い浮かべているのは、後期印象派のセザンヌや野獣派の代表アンリ・マチスか。

10 一九六〇年代のバークシャー（その架空の

カスの花のな、SOUVENIR OF HONOLULU って字が書いてあるだろ。ホノルルの真正な土産品だぞ、その辺のイミテーションとはわけが違う」

「なんと」タンティヴィは嘆き、スロースロップの後について行くのだが、廊下の薄暗がりでシャツがほんのり光るのを見て目を覆った。「裾をズボンにたくし込むくらいはしてくれ。上に何か羽織ればいい。ほら、このノーフォーク・ジャケットを貸してやろう……」痛手もいいところだ、それは本場セヴィル・ローの仕立屋で仕立てた高級品で、試着室の壁に羊のポートレイトがいっぱいで驚いた。断崖で上品にポーズをとっている羊や、物思いに耽る羊のソフトなクロースアップ写真――この背広は、その高貴な羊たちから直々にいただいた霧銀色の羊毛で仕立てたのである。

「これ、有刺鉄線で織ったんじゃないかい」とスロースロップ。「こんなの着てたら、寄りつく女も寄りつかなくなる」

「しかしだね、きみのそのケバケバしいシャツのまわりに寄りつく女性がいるだろうか。半径十マイル以内には誰も入るまい」

「おっと、そうだ」いつの間にかスロースロップが取りだしたのは、黄・緑・橙、三つの原色を配したハンカチーフ、タンティヴィから漏れる恐怖のうめき声を無視して、彼の背広の上着のポケットに三色の角が切り立つように折り入れた。「これだよ。シャープなスタイルってのはこういうのをいうんだ」

日射しの中へ。つんざくようなカモメの鳴き声。スロースロップのアロハが、俄然生気を帯びて輝きだした。タンティヴィが瞼を閉じる。薄目をあけると女たちはみなスロースロップに近寄り、フランス語でささやきながらシャツを撫で、その襟先を嚙っていた。

町ミンジバラ）を舞台にしたピンチョンの短篇「シークレット・インテグレーション」に登場したホーガン・スロースロップという子の父（医師）であろう。

CamScannerでスキャン

「そうなのだ」地面に落ちたバスケットを自分が拾いあげながらタンティヴィ、「いつもこうなる」

彼女たちは踊り子だった。解放軍がやってきてから日も浅いうちに、カジノ〈ヘルマン・ゲーリング〉の支配人、セザール・フレボトモはステージ一杯に並ぶコーラスラインを雇い入れたが、店の名前を変える余裕はなかった。屋根の上に、小さな完璧な貝殻で描かれたその名を気にする人もいそうになかった。古い屋根の一部をごっそり取りはずし(カジノの脇に今も瓦が積んである)漆喰の上に桃色、褐色、紫色の貝殻を数千個、モザイク模様にあしらって、空から名前が読めるほどの大きなドイツ語式の活字体で帝国元帥の名を描いたのは、二年前に滞在したメッサーシュミットの中隊である。この遊びの作業が彼らの「レクリエーション療法」だった。今まだ太陽は低く、屋根の上の単語たちは、モザイクの地とは分離しているものの、まだ単語として浮き立っておらず、いわば抑圧されて宙に浮かぶ。人間と関わりを、火ぶくれが化膿し流血して黒くなった男たちの手の痛みとの関わりはもはや持たず、通りすぎる――ホテルのシーツと枕カバーがビーチの坂に干してある(シーツの皺模様の縁の青みは日が高くなれば消えていくのだろう)その脇を過ぎる――一行の後景に退いていく。浜辺の乾いた砂を求めて散らばりながら進む六対の足が、誰も拾わぬ浜の貝殻を踏み散らす――なかば色が抜けおちたカジノのチップ、半透明化したカモメの骨、ドイツ国防軍の支給品の黄褐色のアンダーシャツはひき裂かれ、ベアリングのグリースがついている・・・

浜辺を進む。スロースロップのド派手なシャツも、タンティヴィのハンカチも、女たちのワンピースも、緑の帽も、みんな揺れて踊ってる。一斉にしゃべり出される男女の国際

女優陣、ミスユーロの男のほうにチラチラ目をやりながら、女同士、何を伝え合っているのか。これって朝一番の、ヘッ、ヘッ、パラノイアの目慣らしにはいいのかもしれない。今日もまた襲ってくるに違いない事態に心をセットする一服のカンフル剤には、しかし、ならないだろう。だって、この朝の光景、こいつはちょっと素晴らしすぎる。小さな波が寄せて崩れてくろい小石を打ちながらパイの皮のように広がり、遠くの岬では突き出た岩のまわりが白く泡立って、太陽と広大な距離に曳かれるように沖をゆくヨットの帆が銀色のウィンクをする。アンティーブ岬[*11]の方角へ向けて帆を操る手慣れた手がゆるやかなタッキングを繰り返している。低くうねる波の上をザバザバと不規則に揺られるヨットの気持ちが、けさのスロースロップには伝わってきた。戦争が始まる前のケープ・コッド[*12]の浜辺から見えたコメットやハンプトン[*13]が思いだされる。浜の匂い、打ち上げられて干からびつつある海藻の、古い揚げ物のオイルの匂い、日焼けした肌にジャリジャリする砂の感触、チクチクと素足をつつく砂丘の草。……岸に近いところでは、ペダルボートにびっしり乗りこんだ兵士と女――船尾の白と緑のラウンジチェアにもたれ、飛沫を跳ね上げ、寝そべる者たち。波打ち際では子供たちの追いかけっこと叫び声、くすぐられた子供が発する、あの無力にかすれた笑い声。遊歩道のベンチの、青・白・クリーム三色のパラソルの下に、一組の老夫婦がすわっている。一日の航海に出る前に錨を降ろして休んでいるのか。

六人の一行は最初の岩場まで歩いていって、ビーチからは見えず、彼方にそびえるカジノからも半ば隠れた小さな入り江を見つける。朝食はワインとパン、たっぷりの笑顔、太陽光が踊り子たちの長い髪の回折格子でスペクトルに分光し、その髪はヴァイオレットと栗色とサフランとエメラルド色に揺らめき跳ねて、けっして留まることがない。……まわ

11 ニースとカンヌの間に突き出た岬。

12 マサチューセッツ州東端に腕上に突き出た半島。

13 どちらも一本マストに大きなメインの帆をつけた、一九三〇年代に人気を博したヨット。

りの世界がすべて溶けだし、堅固なものはすべて崩れて、ほんわり温かいパンの内部がきみの指先で待つ——花のワインが、きみの舌根を春の小川のように流れていく・・・

ここでブロートが一声、「スロースロップは、あちらのお嬢さんともお友達なのかい」

ン？　なに・・・あちらのお嬢さん？　ブロートが得意顔で、近くの潮溜まりに注意をうながす・・・

「きみがご所望って目つきだよ、色男くん」

ふむ・・・彼女は海中から出てきたのか。膝丈の黒いボンバジーンのワンピースからすっくり長い素足を伸ばし、まばゆいショートの金髪の、内巻きにしたカールが頬にふれて顔を影に隠している。二〇メートルほど離れたこの位置からでは、それだけしかわからない。だが、ほんとだ、スロースロップのほうを見ている。彼はニコリとして、軽く腕を上げて振るが、彼女はただその場に立ちすくみ、袖を風になびかせるばかり。向き直ってワインの栓を抜いたときだった。そのポンという音を装飾音にして、踊り子のひとりから悲鳴が上がる。タンティヴィは中腰、ブロートはあんぐり開けた口を彼女に向け、踊り子たちは防衛の反射行動なのか、髪を浮かし、ねじれたフロックドレスの裾からはみ出た太腿を陽光に眩しくさらしたスナップショットの像になった。

なんてこった、あの、ほら、動いてるの——あれはタコかい？　そうさ、タコだよ、こんなデカいの、映画館でしか見たことないぜ、そのくらい巨大なタコが今、水面上に伸び上がって、黒い岩のひとつへにじり寄ってきたのだ。邪悪な目をして美女を睨みながら触腕を伸ばす。みんなが見ているその前で、イボイボだらけのそいつを首に巻きつけ、もう一巻きで腰をとらえてグイとばかりに水の中へ・・・

スロースロップは立ち上がり、ワインボトルを掴むや、タンティヴィ――この男、その場でおずおずダンスの足踏みをしながら、あるはずもない武器を求めてポケットをまさぐっている――の前を過ぎて駆けだした。近づくにつれ敵の全貌があらわになる。ベラボーめ、なんとデッカイやっちゃ。岩場で急ブレーキ。ハタと停まったスロースロップは片足を浅瀬につっこみ、手にした壜をタコめの頭へ打ちすえた。足のまわりをヤドカリが必死に逃げる。はやくも半分海に沈みかけた彼女は叫ぼうとしているのだが、ぬんめり動く冷たい触腕に締められた気管は息を通すのがやっとだ。子供のようにしなやかな指関節(ナックル)を持つ手が伸びてくる。手首に男物のスチールの名入りブレスレットが巻かれた手がスロースロップのアロハシャツを握りしめる。彼女の一生の最期に、漫画的原色のフラ・ガールズとウクレレと、波乗りのお兄さんが現われるとは、誰が想像しただろう。……おい、やめろ、たのむ。緑色のワインボトルがぬんめりとしたタコの皮膚に打ち下ろされる。しかしまったく効果はない。タコが勝ち誇ったようにスロースロップを見やった。スロースロップの目は、自分の胸をつかんだまま確実に迫り来る死を前にした女の手に釘づけだ。アロハの布地にピンと走った溝は彼女の恐怖の接線が。引っぱられ伸びた糸が一本、弾き飛ぶ寸前のボタンをかろうじて繋ぎとめている。ブレスレットにエッチングされた名前の、それぞれのアルファベットはくっきりと銀色に光っているが、意味ある単語として見えてこない。ネットリとした灰色の、液状的(リキッド)な締めつけが、二人掛かりの抵抗をものともせずにグイグイ強まる――ブレスレットが囲う哀れな手が、無残にも筋収縮を始めた、これで彼女は地上から――

「スロースロップ！」一〇フィート先のブロートが大きなカニを渡そうとしている。

「なんだよ、それは・・・」岩にぶつけて叩き割ったワインボトルをヤツの眉間に突き刺してやればいいのだ——

「腹が空いてる、カニをほしがる。タコを殺すな、スロースロップ。ほら、たのむぞ——」飛んできた、空中をクルクルと、遠心力で足がピンと張ったカニ。気持ちの揺らぐスロースロップはワインボトルを落とし、パチャンと手のひらでカニを受けた。ナイス・キャッチ。その瞬間、彼女の指と自分のシャツの変化から、タコの反射反応が感じられた。「よしよし」震えながらスロースロップは、カニをタコの前で振ってみせる。「うまうまの時間だよ」 別の触手が伸びてきて波状をなす粘液が彼の手首にふれる。ビーチの数フィート先にカニを放ると、わからんもんだ、そいつは実際、カニを追ったのだ。最初は彼女もスロースロップも引き連れて——途中で触手を離した。急いでカニを拾い上げ、タコの目の前でぶらぶらさせ、踊るようにしてタコを誘うと、タコは口から涎を垂らし、カニに視線を固定してビーチを下る。

会ってまもない相手だし、別に比較の対象があってのことではないが、スロースロップはこのタコが、精神に変調をきたしているのだろうと思った。こいつには狂った過剰さがある。テーブルの上の物体がこちらが音に対して神経質で、自分の無器用さもよくわかっていて、どうか落ちないでくれと強く願うときにかぎって、ガシャンと落ちるみたいな感じ。バシン、ハハハ、いまの聞いたか、もう一丁、バシン！——と、そいつの一挙手一投足がすべてそんな具合で、この八本足野郎とはこれで永遠のサヨナラだ、とスロースロップは手にしたカニを円盤のように海を目がけて投げ飛ばしたら、喜ばしいことにタコは大げさな水音を立てながらそれを追跡、たちまち目の前から消えてくれた。

CamScannerでスキャン

消耗した女は砂浜に倒れ、周囲をみんなに取り囲まれて、荒い呼吸をしている。踊り子のひとりが抱き起こして話しかけた。Rの音と鼻母音とはフランス語のままだが、話の聞こえる位置まで来ても、何語で話したのかはスロースロップにはわからない。

タンティヴィが、ほほえみながら軽く敬礼する。「お見事」と、テディ・ブロートが賛辞を送る。「ああいう真似は自分じゃやりたくないもんだ！」

「どうしてだよ。そもそもカニ持ってたのはきみだろ。で――そのカニ、どこから持ってきたんだ」

「見つけたんだよ」ブロートは真顔だ。その目をスロースロップは覗き込もうとしたが、目を逸らされた。はて、これはいったい。

「そのワイン、飲ましてくれよ」そうでもしないとやってられない気持ちだった。ボトルを握って口飲みする。緑のガラスのなか、傾いた球体をなして空気がのぼり、パシャッと跳ねた。助けた女がこちらを見ている。ボトルを離して息を継ぎ、ニコリほほえむ。

「ありがとう、中尉さん」わずかな震えもない、なめらかな声、ゲルマン風のアクセント。顔も今ははっきり見える。牝鹿系のソフトな鼻、金髪の睫毛の奥には酸緑色（きみどり）の瞳。ヨーロッパ的な細い唇。「本当に、呼吸が戻らなくなる一歩手前までいったんです」

「あなたのお国はドイツじゃないですよね」

強く頭を振って、「オランダよ」

「ここに来たのは――」

彼女は視線を外し、手を伸ばして彼の手からボトルをとった。海を見ている。タコの去っていった方を。「タコって、あんなに視覚的な生き物だって知らなかったわ。わたしを

見て、わたしと知って、襲ったの。わたし、カニには見えないでしょ？」

「いやあ、とびきり極上のヒト科の女性に見えますけど」「海の向こう(トランス・アトランティック)のがむしゃらさ」というやつを目の当たりにしたブロートが、後景でうれしそうに脇腹をつつく。スロースロップが彼女の手首を取った。ブレスレットに彫られた名前は、いまはスラスラ読める。KATJE BORGESIUS(カッチェ・ボルヘジアス)　彼女の脈が強く打つのが伝わる。スロースロップのことをすでにどこかで知っているのか。ふむ、なかなか微妙だ、この表情は。計算ずくのようすが半分、臨機応変のすばしこさが半分…

　というわけで、砂浜に集った見知らぬ、その会話の声に少々金属的なエッジが生じる。一語一語に打ちこむような響きが伴い、あたりの光も、明るさに変化はないものの、物事を照らしだす力が減退し…目に見える世界の背後に意味の秩序を求めるピューリタン的反射反応——別名パラノイアとして知られるもの——が、この場を仕切り始めたのか。海の空気に力線[*14]がほんのりと蒼白く浮かんで見える…密かな取り決めが結ばれた部屋が爆撃され白昼にさらされ、その内実が示唆される——それも戦争の偶然からでなく、ある意図によって。ウソだ、たまたまカニを見つけたんじゃない、あのタコも、この女も、出会ったのは偶然じゃない。構造とディテールは後からついてくるだろう。とにかく。スロースロップは即座に感じる、周囲になにやら陰謀が進行していることを。

　みんなして、もうしばらく浜辺に留まり朝食を終えたけれど、鳥と太陽、女とワインで始まった単純な一日はすでにスロースロップのもとにはなかった。タンティヴィは酔っ払い、ボトルが空いていくにつれ、どんどんリラックスして陽気になって、最初から目をつけていた娘だけじゃなく、スロースロップとへタコさえ出てこなかったらいい感じになれたな

14　力の作用を示す「磁力線」など。

っていたであろう娘まで引きこんだ。この男は陰謀に関係ない。スロースロップの、タコに先立つイノセントな過去からの使者である。一方のブロートは、まったくの素面、口髭一本乱さずに軍服姿でスロースロップを見張っている。彼のわきには小柄で細くてピンナップ・ガールの脚をしたギスレーヌが、耳の後ろを通した長い髪を腰の近くまで垂らし、砂の上の丸いお尻を動かしながら、ブロートが砂に書いたメッセージにコメントを書き添えている。スロースロップは彼女から目を離さない。女たちは火星人と同じで、男にはない触角を備えているから。一度だけ彼女はスロースロップを見た。その目は不思議そうに大きく見開いた。何か知ってる、と彼は確信した。カジノへの帰り道、手に持った空瓶と、朝食ピクニックのゴミでいっぱいになったバスケットをいじくりながら、一言彼女にぶつけてみる。

「とんだピクニック、ネスパ？」

その口のお隣りにえくぼを作って――「タコのこと、みなさん最初から知っていたの？　そう思えたわ、だってみんな振りつけられてるみたいに動くんですもの」

「いや、おれは知らなかったね。きみには計画された悪ふざけみたいに思えたの？」

「リトル・タイロン」突然彼女がささやいた。芝居っぽい笑顔をみんなに振りまいて彼の腕に手をまわす。「リトル」だ？　この子の二倍のサイズがあるんだぞ。「おねがい――気をつけてね」それだけ。もう一方の手はカッチェと繋がれていた。かわいい悪魔がふたり、対照的なのが左と右に一人ずつ。浜辺から人気が消え、舞い降りた灰色のカモメたちが五十羽ほど、じっと海を見つめている。海の彼方で積乱雲が白い背丈を増してきた。その堅そうな頬を、智天使のように膨らませて――遊歩道の遠い向こうまで、パームツリーの葉

15 小さな天使が口から吹く天からの風が、前ページで感じられた「力線」を作っているのか。

がそよいでいる。ギスレーヌが腕を外し、ビーチを駆け戻って堅物のブロートの手をとった。スロースロップの腕をとっていたカッチェに力がこもり、いま一番聞きたくない言葉が発せられる――「わたしたち、きっと出逢う運命だったのね」

□□□□□□□

海から見たこの時刻のカジノは、水平線上に燃え立つ宝石だ。薄れゆく光の中で、建物を包む棕櫚の葉は影と化す。すべてのものが影を増していく——小さな黄褐色のギザギザの山も、ブラックオリーヴの中味のような色をした海も、白いヴィラも、山上のシャトーも、その廃墟も、松の林や一本松の深緑色も。みなだんだんと色を深め、昼の光のヴェールの下に一日隠していた夜の姿をあらわにしていく。浜辺のそちこちで焚火が始まった。英語で話すかすかな声が、ときどきわき起こる歌とともに、沖合のデッキに立つポルキェヴィッチ博士のところまで聞こえてくる。階下では、カニの肉をたらふく頂いたタコのグリゴリが、特製の囲いの中でご満悦。岬の灯台から伸びる光線が一定の円周を描いてかすめてゆく。ポッポッポッと浮かんだ小さな漁船が沖をめざす。グリシャ[1]や、これでしばらくおまえの出番もないだろう。…〈ポルキェヴィッチと天才タコ君〉[2]の出番は終わった。今後ポインツマンからの支援は見込めない。

指令というものに対し、もはや彼は疑いを抱かない。みずからの国外追放に関しても、疑問に思うのはもうやめた。ブハーリン[3]の陰謀に自分が加担した証拠があるというのだ。

1 「グリゴリ」のロシア語の愛称。

2 ポルキェヴィッチ博士は103ページに、タコと一緒に登場していた。

3 ボリシェヴィキ革命を支えた中心的理論家。スターリンの粛清を受け、一九三八年銃殺。

CamScannerでスキャン

具体的な話は何ひとつないのだが、きっとその通りなのだろう。トロツキスト陣営がきっと自分の評判を聞いて、本人には永遠に知られざるところで利用していたのだろう…永遠に秘密のところで。そのことがどういう意味か理解できず、そんな理不尽な運命を受け入れるなどとんでもないと言う無垢な人間たちもいることは彼は知っていた。だが彼は受け入れていた。結局のところこれは、スターリンの見ている壮大で病的な夢の中の、些細な挿話にすぎないのかもしれないのだ。自分には少なくとも生理学がある…党以外の何かがある。党の上にのみ人生を築いてきた者たちは、追放されたときにほとんど死と変わらぬ経験をするのだろう…彼らは何ひとつ確実に知ることがないままに一生を終えるのだろう。実験室で得られる確実な知とは無縁なまま…その知を頼りに過去二十年間、彼は正気を保ってきたようなものだ。いくら彼らでもこれだけは——

まさか、そこまでは、そんなケースは聞いたことがない…もちろん隠蔽されたとすれば別だが。科学ジャーナルに載るはずもないし——

ポインツマンが——

あの男なら、やらかしかねない。やったのか。

グリシャ、グリシャ！　夢がかなったぞ。こんなに早く。外国の街を回るんだ——破れた帽子のコメディアン、カンカン・ガールズ、火の泉、楽団席で吹き鳴らすオーケストラ…グリシャ、おまえなら万国旗をぜんぶ一度に持てるかい…演し物の間に、採れたての貝と温かいピロシキ、夕方には温かいお茶のグラス…ロシアのことは忘れるようにしないとな。放浪の先々では割り切って、ウソっぽいロシア風で満足することにしよう。伸びやかな空に一番星が見えてきた。だがボルキェヴィッチは願を掛けない。ボリシー

なのだ。来るべき事態の徴し（サイン）に関心を示さない。去りゆくものの徴しにさえも。・・・エンジン全開。航跡に波が盛り上がる。夕焼けを反射したピンクの波。白亜のカジノがかすんでゆく。

今夜は電気が来ていた。フランスの配電網（グリッド）に、このカジノも復帰した。クリスタルのケバが立ったシャンデリアの針先が燃え立つ。戸外のガーデンには、より淡い灯火の光。タンティヴィや踊り子たちと食事に降りてきたスロースロップは、カッチェ・ボルヘジアスの姿を見て、文字通り目を丸くした。髪をエメラルドのティアラに収め、体のほうは海緑色の長いビロードのメディチ・ガウンに包んで、二つ星の少将と准将のふたりにエスコートされている。

「ＲＨＩＰ」[*4]タンティヴィが節をつけて言う。絨毯の上で当てつけがましくシャッフルダンスのステップを踏みながら、[*5]「オー、ＲＨＩＰにゃ、かっなわーないっ」

「おれのこと、怒らせるつもりかな」スロースロップが笑顔を振りまく。「だったら無駄だ」

「たしかにな」と言いながら、タンティヴィの笑顔が固まった。「ああ、スロースロップ、やめてくれ、頼む、僕たちこれからディナーに行くんだ」

「知ってるよ。これからディナーだ」

「そんなものを身につけて入れないだろ。外しなさいよ」

「気に入った？　本物の手書きだぜ、このお姉ちゃん、見ろよ、ナイスなボインだろ、ハ？」

「何だいそれは、ワームウッド・スクラブズ[*6]のネクタイか」

4　Rank has its privilege. ＝上官には特権がある。

5　原文は shuffling off sarcastic buffaloes。ミュージカル映画『42番街』の挿入歌で、新婚旅行をテーマにした「シャッフル・オフ・トゥ・バッファロー」の振付けを真似たということ。

6　69ページ註14参照。

メイン・ダイニングルームの中は、給仕と士官と淑女とがつくる巨大な往来の渦。踊り子の手をとって渦の中に入っていったスロースロップはやっとの思いで空いている二つの席にすべりこんだ。すると、なんということだ、左隣の席にカッチェがすわっている。彼は頬をふくらませ、寄り目をし、指で髪を忙しくかき上げる。じきにスープが運ばれてきた。爆弾を解体する慎重さでスープに向かうが、お隣りのカッチェはこっちのほうは見向きもせず、少将の向こう隣りにすわっている大佐の徽章をつけた将校が戦前にコーンウォールで経営していたゴルフ場の話で盛りあがっている、ホールのこと、ハザードのこと、地形の感覚は身につきました。しかし一番の楽しみは、夜のコースでね、穴から出てきたアナグマがプレイをしてるんです・・・

魚料理が出て、その皿が下げられた時からおかしな具合になりだした。カッチェの膝がスロースロップの膝にすりよってきた感じがする。テーブルの下でビロードの温かみがモワン。

さあて、とスロースロップは考えた、ここらで一発、奸計をめぐらそう。だってここは、ヨーロッパなのだからして。彼はワイングラスを高く挙げ、一言「タンティヴィ・マッカ＝マフィックのバラッド」をリクエストする。拍手歓声が巻き起こった。タンティヴィは謙虚に頬を赤らめて、笑顔を抑えつけている。みんな知ってる歌なのだ。スコットランド人のひとりがグランドピアノへひと走り、セザール・フレボトモはツルンとした口ひげをひねってサーベルの刃の先端を整え、鉢植えの棕櫚のかげに取りつけた調光器のつまみを一ひねりして光量アップ、頭だけ出してウィンクすると、給仕人頭に場内静粛の合図を送る。ワインで口をすすぐ音、咳払い、それに続いて、相当数の客による合唱が始まっ

《タンティヴィ・マッカ゠マフィックのバラッド》

オー、イタリアのジンは母の呪い
フランス・ビールはバイ菌だらけ
スペインでバーボン飲めば
聖人と癲癇病みの孤独が見える
濁酒造りの山奥じゃ
毒の甕に眠らせて
地獄の槌で香りをつけた！
〈白き稲妻〉[7]が霊柩車を走らせる！

［リフレイン］
オー――タンティヴィは世界中で酔っ払ったぞ
南仏でも酔ったぞ、北の果ての島でも
タンティヴィが酒を断つことあったらば
俺は死んでみせる、白眼剥いて、ニタリ笑って

百人の大合唱に聞こえるが、実際はたぶんウェールズ人二人で歌っているのだろう。南

7 「ホワイト・ライトニング」とは、アメリカ・テネシー州の山中などで非合法に作られる強烈なウィスキー。「ムーンシャイン」とも呼ばれるが、ここでは、稲妻のイメージから雷神トールのハンマーを歌い込んでいる。

部出身者がテノールで北部出身者がバスなのか、とにかくその音量は、スロースロップの狙いどおり、すべてのテーブルの秘密の会話もそうでない会話もみな押し流すに充分だ。カッチェのほうへ体を傾ける。

「わたしの部屋で会ってちょうだい」彼女がささやく。「306、深夜零時を過ぎてからね」

「がってん」スロースロップは立ちあがる。ちょうど二番の頭で合唱に加わるのに間にあった。

クジラも千鳥足になる
ラム酒の海で骨が透け
南アからドーバーまでの航海中
杯を傾けっぱなしだった
マストにかけた布が四枚
ぐでんぐでんに翻っていた
霧のロンドン、サハラの太陽
マッターホルンの氷壁でも
ぜったい酒ビン離さずに
かならずグイッとやっていた

タンティヴィ様に、節度は無用・・・（この先続く）

ディナーが済んだ。スロースロップがタンティヴィに合図を送る。同席の踊り子たちが腕を組んで大理石のラウンジへと――そこのトイレには各個室間に、真鍮製の音響管が張り巡らされ、腰掛けたまま他室にすわっている人と楽に話せる。スロースロップとタンティヴィは最寄りのバーへ。

「聞いてくれ」スロースロップはハイボールのグラスの中へ言葉を吐いた――氷に触れて戻ってくる言葉にしかるべき冷気を与えようというのか。「オレの頭がおかしくなったか、それとも現におかしなことが進行中か、どちらかだよな」

タンティヴィはリラックスした雰囲気を擬装して、「ユー・キャン・ドゥー・ア・ロット・オブ・シングズ・アット・ザ・シーサイド」[*8]のメロディをハミングしてからこう訊いた。「ああ、そうね。きみは本当にそう思うのかい」

「まじめに聞けよ、まず、あのタコだ」

「オクトパスはだね、地中海海域ではごく一般的に見られる。ふつうはあれほど大きくないがね。サイズが気に入らなかったのか。アメリカ人は何でも大きいのが――」

「タンティヴィ、こりゃ偶然じゃない。ブロートのやつ、たしかに言ったぞ、『そのタコ殺すな』って。都合よくカニが出てきたのは、あいつのミュゼット・バッグに最初から入れてあったんだ。タコをおびきだす道具としてさ。あいつ今夜、どこへ行ってるんだよ」

「ビーチなのではないだろうか。あちこちで飲み会をやってるし」

「あいつ、酒好きだったか?」

「いや」

8　「浜辺でなら、街じゃできないことがたくさんできる」という題の、第一次大戦期のヒット曲。

「プロートはきみの友達だろ——」
タンティヴィがウッと呻いた。「おいおい、スロースロップ、おれにはわからんよ。きみとだって友達だ、でもさ、いいか、ときどききみはこうやって、スロースロピアン・パラノイアってのに引っぱり込もうとするよね・・・」
「パラノイアなんかであるもんか。きっと何かある。企みがある。おまえだって知ってるくせに！」
タンティヴィは氷を噛み、かきまぜ棒を覗き、ちぎった紙ナプキンの吹雪を降らせ、バーで人が行うしぐさをひと通りやり終えたあと、声をひそめて——「あいつ、暗号を受信している」
「ほれみろ！」
「きょうの昼過ぎに、荷物の中に入っていたのがチラリと見えた。詮索はしなかった。彼も結局、最高司令部と関わりがあるわけだからさ——それだけのことだ、きっと」
「いや違うね、それですむ話じゃない。いいか——」今夜カッチェの部屋に呼ばれたことをスロースロップは漏らした。一瞬、ACHTUNGの仕切り部屋に戻った気がした。ロケットが着弾し、手にはペーパーカップのお茶、すべてふたたび・・・
「行くのかい」
「行ったらマズイか、彼女、危険だと思うか?」
「女としたら最高だろ。僕だって、フランソワーズのことを、いやもちろんイヴォンヌもだが、気にしなくていいのなら、彼女のドアまできみと競走をするね」
「だけどどう?」

だけど、カウンターの上に掛かった時計が、一度カチッと動いて止まる。そしておもむろに、分針が過去に向かってカチカチと動きだす。

「きみの病気というのは、伝染性のものなのか」タンティヴィが始める。「それとも実際、僕も監視されているのか」

顔を見合わせるふたり。今夜タンティヴィ以外に頼れる相手はいない。スロースロップは改めてそのことを思った。「話してみてよ」

「話せたらいいんだが。あいつ、変わったよ——といってもその証拠はひとつも挙げられない…秋だったかな。急に政治の話をしなくなった。それまでは侃々諤々（かんかんがくがく）やっていたのに。除隊したら何をするという話もしなくなった。以前はその話ばっかりだったんだよ。飛来する爆弾にすっかり竦んでしまったのかと思ってたんだが…きのうのことがあってから、それだけじゃないんだとわかった。ちくしょう、悲しくなる」

「きのう何があったんだ」

「ああ、まあね、脅迫ではないな。まともな脅し、とはいえない。僕が冗談を言ったのさ、きみのカッチェのことでね。いい女だ、惚れちまったよって。そしたらあいつの目が急に冷たくなった。『邪魔な割り込みはしないほうがいい』と言って、すぐに笑ってごまかして、まるで自分自身が手を出したがってるかのように取り繕ったが、違うね。あれは演技だ。話せないことがあるんだよ。僕はもう、あいつにとって〝使えるやつ〟でしかないんだ。どんな目的かわからんけど、使い物になるかぎりは、友達としていられるってわけさ。昔ながらの大学のコネクションって。きみはハーバードか。この感覚、通じるかな…たまにオックスフォードの街に戻ってみると、誰も口にはしないんだが、なんか奇妙な

CamScannerでスキャン

構造（ストラクチャー）が伸びているのを感じるんだよ。タール・ストリートを遥かに超え、コーンマーケット・ストリートも超えて・・・結局それは契約という構造になっていて、面倒は見てもらえる、しかし請求もくる・・・誰がいつ、どんな形で徴収にくるかはわからない・・・僕も知ってはいたんだが、まじめに考えていなかった。大学に行く本来の目的とは別の話だと思っていた。わかるか・・・」

「わかるさ。アメリカじゃ、入学のときに、ちゃんと言われる。ハーバードが存在するのは別の理由のためだとね。〝教育機関〟ってのは表向きの看板にすぎない」

「イギリス人は世の中を知らない阿呆ってことか」

「残念ながら、ブロートは違うみたいだ」

「まだ信じていたいという気持ちはあるんだが」

「だろうな。で、これからどうする?」

「そうだな、デート相手を手放さず、油断せず、ようすを知らせてくれ。明日は僕も冒険して、たまにはきみに報告ができるようにするよ。助けが要るなら」白い歯がキラリ、ちょっと顔を赤らめて、「僕を頼れ」

「サンクス、タンティヴィ」いやはや、米英同盟だぜ。戸口でイヴォンヌとフランソワーズが覗いている。出ていらっしゃいと手招きしている。ヒムラー遊戯室（シュピールザール）*9で深夜零時まで賭けトランプ（シュマン・ドゥ・フェール）に興じよう。スロースロップはイーブンで終え、タンティヴィは一人負け。勝ったのは彼女たちだ。遊戯室には何十人もの士官が、ひっきりなしに出たり入ったりを繰り返している。遠景に茶色い輪転グラビア印刷のように見えるその人影に、ブロートの姿はない。彼とくっついたギスレーヌも見えない。スロースロップがたずねる。イヴォン

9 ドイツ警察のトップとして、全欧のユダヤ人虐殺に最も直接的な責任を負う人物の名をつけた賭博ルーム。

ヌは肩をすくめ、「しらない。あなたのお友達と一緒じゃないの?」ギスレーヌの長い髪、日に焼けた腕、六歳の女児のほほえみ。……何か知っているとバレたら、彼女の身は安全か?

十一時五十九分、スロースロップはタンティヴィの方を向き、ふたりの女の子にうなずくと、わざとスケベそうに笑って、友の右肩に素早く一発、好意のパンチをくらわした。昔マサチューセッツのプレップスクールで、フットボールのコーチがこんな一発とともに、高校生のスロースロップをグラウンドに押しだしたことがある。そのときもらった勇気は五十秒しか続かなかった。レッドドッグ[10]で押し寄せてきた殺人犀(キラー・ライノ)の本能と重量をもったチョート高校[11]の選手らに、体もろとも押しつぶされた。

「グッド・ラック」気持ちのこもった励ましを返した次の瞬間、タンティヴィの手は早くもイヴォンヌの、甘美なシフォンに包まれたお尻に伸びている。数分の躊躇が事を……わかった、わかった、スロースロップは赤の絨毯をしきつめた階段を上る(ウェルカム・ミスター・スロースロップ、私どもの建物(ストラクチャー)へようこそ、どうぞ快適なご滞在を)ひっそりとした踊り場で、マラカイト製のサテュロス[12]とニンフたちが常緑の追いかけっこの時の中で固まっている。階段の上を見たら、灯りがひとつ、こちらを睨み返した……

部屋の前で立ち止まり、髪に櫛を入れる。今見る彼女は、白のペリース[13]を羽織っている——一面のスパンコール、肩パッド、ネックラインと手首のところにダチョウの羽根。ティアラをとった彼女の髪は、電灯の下で見ると新雪のよう。だがスイートルームの奥の間のライティングは、流れこむ月光と、香料入りの蠟燭一本。古い石英ガラスのスニフターにブランデーが注がれる。スロースロップが伸ばす指先が彼女にふれた。「あなたがゴル

10 敵軍のディフェンス全員がクォーターバックをめがけて突進する作戦。

11 コネティカット州にあるジョン・F・ケネディの母校。

12 森に住む、ギリシャ神話の好色のキャラクター。山羊の下半身を持ち、牧神パンやローマ神話のフォーン(ファウヌス)とも、しばしば同一視される。

13 十九世紀前半(ナポレオン時代もその後も)、ヨーロッパの婦人たちの間で流行した、ミリタリーなイメージのガウン。

CamScannerでスキャン

フ狂いだったとは驚きです」もの柔らかな、すっかりロマンティックなスロースロップ。
「感じのいい方でしたもの、失礼なことはできませんわ」片目を吊り上げ、額に微かにシワが寄るのを見て、スロースロップは一瞬、ズボンの前が空いているのかと焦った。
「僕のほうは無視なんだ。どうしてかな？」巧みな一突き、と思ったけれど、そこに彼女はいなかった。部屋の別の場所に、別な姿勢で出現する・・・
「あなたのこと、無視してます？」窓辺に立つカッチェの向こう、下のほうに海が拡がる。真夜中の海、寄せる波のそれぞれを追うことはこの距離からでは不可能だ、すべてはひとつにまとめあげられ古い絵画の大いなる静けさをつくる――その絵を打ち捨てられた画廊越しに見るきみは影で待つ、なぜここに立っているのかも忘れて、ただ明かりのあまりの白さが怖い、夜の海を照らす月と同じ、空の白い掻き傷からこぼれる光の白さが・・・
「どうだろう、でも、遊び相手は多そうだね」
「そういう役柄なのかも」
「で、僕に出会うのも、役柄として？」
「そんな。わたしのこと、少し買いかぶりですわ」滑るようにカウチに腰かけ、足を組む。
「ほお、きみはただのオランダの農家の娘さん？ 毎朝乳搾りをして、そのクローゼットの中は糊の利いたエプロンと木靴がならんでるって？」
「覗いてみたらいいわ」キャンドルの香料の匂いが部屋を横切って神経繊維のようにのびてくる。
「ようし、それでは」クローゼットを開く。月光のなか、鏡に反射したのはぎっしりつまった衣装の迷路だった。繻子に琥珀織、寒冷紗に絹紬、ダークな毛皮の色、装飾品類、ポ

CamScannerでスキャン

タン類、脊椎類、モール類、柔らかな、頭をくらくらさせる、女性的な網のトンネル。それがきっとこの先、数マイルも伸びていて、おれなんか三十秒で完全に迷子だろう・・・レースが淡く光り、鳩目金がウィンクする、クレープのスカーフが頬をなでる・・・待てよ、わかったぞ・・・ここの条件づけの匂いは、四塩炭*14ってわけか。このワードローブの中も大部分はプロの小道具ってわけだしね。「ほー、スナジーだね*15」

「褒めているの？　ありがとう」

ベイビー、感謝の言葉は〈かれら〉に言わせなさいって。「そう、アメリカ英語なのさ」

「アメリカ人と話したのは、あなたが初めてなのよ」

「ってことは・・・きみはあのアーネムを通って逃げて来たの？*16」

「頭の回転、速いのね、驚いたわ」その話題はもうよしましょ、という口調だ。スロースロップはため息をつき、爪の先でスニフターを叩いてリズムをとって、暗い部屋のなか、無音の麻痺した海をバックに、自慢のノドを披露する。

《トゥー・スーン・トゥ・ノウ》〔フォックストロット〕

トゥー・スーン
まだわからない
口づけもまだのふたり
踊り明かす月下の芝生
露にぬれた秘め事も

14 CCl_4＝わずかに甘い特異臭をもち、かつてドライクリーニングの溶剤として利用された。

15 snazzy は「モダンでイカした」という意味の、一九四〇年代の流行語。

16 ノルマンディ上陸後、ドイツ国内への進撃をもくろむ連合国が、オランダの複数の河川の橋の奪取を試みたがアーネムで壊滅（一九四四年九月）。スロースロップは、なおもナチスの支配するライン河を渡って、カッチェが南へ逃げてきたのかと想像した。

CamScannerでスキャン

まーだ・・・これから

だから、トゥー・スーン
まだわからない
ため息まじりのカンバセーション
あれはただの恋のお遊び（フラーテーション）？
朝露の中に消えてくだけなの？
それを知るのは・・・トゥー・スーン

わからない
まだなにも、みえてない
愛の魔法は影ではたらく
ふたりの自由になるものじゃない

これは楽しい恋のはじまり？
それとも地球が回るように
まぶしさ転じて闇に変わった？
ダーリン、いったいどっちだろう
まだわからない――
トゥー・スーン・トゥ・ノウ

CamScannerでスキャン

役の心得にぬかりはないカッチェ、スロースロップが歌い終えるまで興ざめしたような顔で待ち、メローな木管楽器の密集和音の余韻を空中にただよわせてから、片手を伸ばし、彼女の唇めがけてスロー・モーションで倒れこむスロースロップの腕に包まれ溶けていく。羽根飾りは抜けおち、袖がまくられ出てきた月光の肌理の腕が彼の背中を這う。彼女のぬれた舌は蛾のように飛び回り、衣服をさする彼の手がスパンコールをカチカチ鳴らす・・・彼女の両手が彼から離れるや、胸が押しつけられ、張られた肘の向こうで指先が背中をまさぐる。アグレッシブな音とともに背中のジッパーが、吠える野獣の口のように開く。

白い衣の中から、さらに白いカッチェの肌が立ちあらわれる。**生まれかわって・・・**けさタコの魔物が襲撃をかけた岩場が、窓の外にほとんど浮かんで見える気がする。カッチェはトゥ・シューズで爪先立ったバレリーナのように歩く。長い彎曲した太腿。スロースロップはベルトを緩めボタンを外し靴紐を解いて、片足ずつホップしながら脱ぎおとす。オー、オー、なんと、なんと。だが月光は彼女の背中を白くするばかり。光の届かぬ暗部、腹のダークサイドの方はもはや見えず、顔も隠れた。影の中でその顔は野獣になるのか。頑強な鼻筋が伸びて下顎が変化し、黒い瞳が拡大して白眼を覆い尽くすのか。光が当たったその時にアニマルな赤い眼光がギラリとするのか、**わからない、光のもとで——**

彼を引き込み深くベッドに沈みこむ。ダウンとサテン、天使と花柄刺繍の中へ。そしてすばやく向きなおると彼の硬直をすっくり伸びた叉（フォーク）の間へ導き入れ・・・単一の振動に、夜のすべてはそれを軸にめぐるところのヴァイブレーションにゆだねる・・・交わるほどに彼女の震えは激しく、まるでストロボのよう。自分の体の何マイルも奥でクリーム色とナイ

トブルーが明滅する。すべての音は遮蔽された。金の睫毛、奥には三日月の目、長い黒玉の人面体のイヤリングが無音のまま頬を打つ。路面を打つ黒い雹のように。彼女の上で彼の表情は動かない。次のテクニックを冷静に繰り出すだけ——彼女のために？ それとも〈かれら〉がカッチェに仕込んであったスロースロップ相手のプログラムと一体化したためか——彼女が彼を動かす、プラスチックの殻（シェル）になど乗っかられるものですかと・・・彼女の息が激しさを増し、閾を乗り越え発声にたどりついた・・・絶頂までもうすぐと見たスロースロップは片手をカッチェの髪に差しいれ頭を抑えにかかる。顔を見ずにはいられない。だが突然の抵抗、敵意もリアルな闘争——彼女は顔を許さない——揉み合ったまま、どこからともなく、彼女が震えだした、スロースロップも一緒だ。

なぜだか知らないが、ふだん笑ったことのないカッチェが、今や立ち上る笑いの風船だ。深みからこみ上げるおかしみの頂点で笑い転げている。眠る段になって、かすれた声で「笑ってる」とささやいてまた笑うだろう。

すると自分は「大丈夫、誰も咎めない」と言いたくなって、それから、待てよ、〈かれら〉は咎めるかもしれないと思うだろう。だがカッチェはすでに眠りの中。やがて彼の目も閉じた。

ロケットのバルブのうちには、遠隔操作で、あらかじめ設定された瞬間に開いたり閉じたり操作できるものがあるが、スロースロップの鼻もそれと同じだ。眠りに入るある段階で、鼻からの呼吸をやめて口呼吸に移行する。口からでる息はまもなくいびきに成長する。いびきといっても、ありきたりのものではない。雨戸をガタガタ、シャッターをゆらゆら、シャンデリアを狂った鈴のように鳴らすスロースロップ級の大いびき。冗談ぬきで、これ

はやバい？・・・その第一声が始まるや、目をさましたカッチェが枕で頭をパチンと叩いた。

「それ禁止」

「フムム」

「わたし、眠り浅いの。いびきかいたら、一回ごとに、また叩くわよ」と、枕を振って威嚇する。

カッチェは本気だった。いびきと枕と目覚めと睡眠、ガーゴー↓ベシン↓ムニャムニャ↓バタンのサイクルは夜が白んでからも続いた。「いいかげんに」堪忍しかねたスロースロップ、「しろ！」と大声。

「口呼吸する蛮人め！」こう罵られては、こちらも枕を振り回すしかない。彼女はヒョイと首を引っこめ、ゴロリと向こうへ回転し、枕をぶつける構えをみせてベッドを抜けだし、後ずさりでサイドボードに行きついた。何を企んでいるのかいぶかしがるスロースロップに、カッチェはいきなり枕を投げつけ、炭酸水（セルツァー）の壜を手にとる。

え・・・何を？ セルツァーの壜？ なんてものを繰りだしてくるんだ。他に〈かれら〉はどんな小道具を用意してるの。どんなアメリカ的反応ってのを期待してるんだ。かのバナナ・クリーム・パイってやつか、そいつはどこにある、え？

両手から枕をぶらさげ、彼女を見つめる。「一歩でも近づいてごらんなさい」と言ってクスクス笑いするカッチェに向かって突進をかけたスロースロップが、お尻に枕を打ち据えれば、待ってましたとばかりセルツァー壜の反撃だ。大理石の尻を打った枕が砕け散る、部屋にさしこむ月光が羽根と羽毛でむせかえる、加えてセルツァー壜からジェット・スプレーが噴出する。躍起になって壜を奪いとろうとする男を、ぬれた女はつるり身をよじっ

て逃れ、椅子の向こうに身構えた。サイドボードからブランデーのデカンターを取りだしたスロースロップ、栓を外して思いきり中身をぶちまける。透明な、琥珀色の、原生動物の偽足のように伸びていく濃い液の飛跡が一本、また一本、差しこむ月光の束を突きぬけ、女の首にはね掛かる。首のまわりに飛びちって、ブランデーが黒い乳首の間をつたう。横腹をたれ落ちる。「やってくれたわね」セルツァー壜の攻撃再開。寝室を駆けまわるふたりの肌にゆっくりと舞いちる羽毛がまとわりつく。斑になった彼女の体がじりじりと後ずさり。だがこの光量では、ときどきまったく見えなくなる。スロースロップも家具につまずいてばかりだ。「いいか、捕まえたらひどいからな!」とそのとき、カッチェが居間に通じるドアを開けてそこからすり抜けバタンとしめたものだからスロースロップはもろにぶつかり跳ねかえった。チッ、舌打ちしてドアを開ける。カッチェは赤い大きなダマスク織りのテーブルクロスを振り回している。

「なんだよ、それは」

「マジック!」そう叫ぶと、テーブルクロスがふわりとこちらに飛んできた。折り目正しいシワが、結晶の活断層のように空間を赤く伝播する。「よーくご覧あれ。アメリカの中尉さんをひとり消してご覧にいれまーす」

「よせって」布に包まれたスロースロップは手をバタバタ、外に出そうともがくのだが、

「ご覧になんかなれるかよ、このザマで」手がテーブルクロスの端に届かず、スロースロップはいささかパニック気味だ。

「狙い通りよ」だしぬけに布の内側、すぐお隣りから声がして、彼の乳首に女の舌がいきなりふれた。うなじの髪の生えぎわを両手がまさぐり、長い絨毯のケバの上にそろりそろ

りと引きこんでゆく、「わたしのキャンディーちゃん」
「その映画、どこで見たの？ 覚えてるかい、ナギとベッドインしちゃうシーン」
「シーッ…」お次は、息の合った仲睦まじいクイックな交わり、ふたりとも体に羽毛をまとわりつかせ、半ばうとうと…達した後は寄りそって、完全にとろけてしまった。もう動けない、ダマスク織りと絨毯のケバの間、うーん、なんて気持ちいいんだ、赤い感じが胎内みたい。…足と足をからめあい、お尻の半球の窪地に突き出た尖点の中にペニスを宿して、精一杯の鼻呼吸を心がけようとする間にふたりとも眠りに落ちていた。
朝の光。海面を反射し、窓の外の棕櫚の葉に濾され、テーブルクロスの赤を抜けてきた地中海の陽光にスロースロップは目をさました。鳥の声。階上の水管の音。横たわったまま意識の戻りを待つ、酔いはない。意識が消えかかりまた戻ってくるそのサイクルに彼は〝無スロースロップ状態〟のまま留まっている。目の前にソフトでセンシティブなカッチェがある。彼のS字とカーブを合わせたS字になって寝ている彼女の体が、今もぞもぞと動きだした。
お隣りの部屋で音がした。間違いない、軍用ベルトのバックルの音だ。「誰かが」そうだよ、そういうことだ、「おれのズボンの中身を盗んでるぞ」絨毯を踏む足音。ポケットの小銭がジャラジャラ鳴る。「どろぼう！」と叫んだらカッチェが眼をさまして両腕を巻きつけた。昨夜はまるでつかめなかった布端をなんとか手探りで探しあて、テーブルクロスをはねのけた瞬間、大きな足が視界に入った。珈琲色と藍のツートンカラーの靴を履いて、今まさに、ドアの外へ消えるところだ。寝室に駆けこんで見ると、靴も下着も、自分の衣服はすべて持ち去られている。

[illegible]
四二。

「おれの服!」駆けだして、ダマスク模様から這いだしてきたカッチェのタックルをフットボールのランニングバックの動きでかわし、ドアを開けて勢いよく廊下に飛びでてから自分がスッパダカなのに気がついた。近くに洗濯物のカートがあったので、紫色のサテンのシーツを失敬し、古代ローマのトーガみたいにそれを羽織る。階段のほうから笑い声。ゴム靴のペタペタ音も。「いたな!」と叫んでダッシュするが、サテンのシーツがすべり落ちてままならない。はためきズリ落ち足下に絡むシーツもろとも、階段を一段おきに駆け上がりなんとか上までのぼりつめて廊下を見わたす。誰もいない。みんなどこへ消えたんだ?

廊下の向こう端、曲り角から小さな頭がのぞいた。小さな手も現われた。こちらに向けて小さな中指を突き立てている。次の瞬間、不快な笑い声が耳を突いたが、すでにそいつ目がけて全力疾走のスロースロップは、階段を駆け下りる足音をとらえた。ののしりながら、巨大な紫色の凧と化し、階段三つ一気に下り、ドアを開けて小さなテラスへ出た瞬間に、人影は石の手すりをとびこえて緑の繁みの中へ消えた。繁みというのは、地面から伸び上がっている太い木の高みだ。「へへ、木に追いつめたぞ!」とスロースロップ。とにかく木の中に入りこむのが先決だ。そうすれば、あとは梯子を上がっていくのと同じ。だが入ってみると木の中は、葉の照り返しが強烈で、二つ先の枝を見るのがやっと。それでも木が揺れているからには、泥棒はこの中にいるはずである。スロースロップは一途に枝を登る。引っかかったシーツが裂ける。とげが刺さり、樹皮で手足がすりむける。足の裏もヒリヒリして、だんだん息も切れてきた。緑の光の円錐が先細ってくるにつれて眩しさも増す。幹を上っている途中、下からノコギリを引くような音が聞こえてきたが、

それが意味する事態に考えが及ばぬうちに木の頂に登りつめていた。揺れる梢にしがみついて眼下を見下ろせば、まさに目を奪わんばかりの絶景だ。港が見える、岬が見える、青の絵具で塗りこめた海面、白い波頭、遠く水平線にモクモクと湧いた雷雲、はるか下にうごめく人の頭。おい、なんだこりゃ、下からメキメキ裂け目の走る音が聞こえる。震動は彼がつかまっている枝に到着した。

「そりゃないぜ……」すばしこいヤツめ。登るとばかり思っていたのに！　このおれを、上下から見上げてやがったのか。彼らは知っていたんだ。スロースロップが下ではなく、上に向かうのを——アメリカ人の反射反応を見越していた。追いかけられた悪者は必ず上に逃げていくって——まったく、どうして上なんだ。おまけに彼らはこの木の幹をほとんど切り倒そうと、してる、じゃ、ないか——

　彼ら？〈かれら〉？

「えーと」スロースロップは考えた、「いまなすべきことは……」木の裂け目の突端が天辺を走りぬけたのがその時だった。猛烈な勢いで葉が擦れ枝が風を切り、ザザザーという大音響とともに濃緑の枝々と針葉とが旋回し、何千もの尖った落下物体が渦を巻き、そのただ中に放り出されて旋回しながら落ちてゆくスロースロップは、枝にぶつかり跳ねかえりながら、落下傘代わりの紫色のシーツを必死に頭上にかかげた。ウーフ、ムムム、地面まであと半分というところ、テラスの高さあたりまできたとき、ひょいと下を見たら——なんたること、軍服姿の高級将校と、白いバティストのワンピースに花飾りのハットを被った小太りのご婦人方が、みんなしてクロッケーに興じているまっただ中へ着陸するのか。

　彼は眼をつぶる。そして熱帯の小島とか、安心な部屋の中とか、こんな悲惨なことが起こ

CamScannerでスキャン

るはずもない場所を思いうかべてみようとする。地面にたたきつけられる頃合いに眼を開けた。静まりかえったなか、激痛のパルスが彼の脳に届く前に木と木がパキパキぶつかる音がして、彼の鼻先一インチのところを真っ黄色の縞入りボールが転がっていった。次の瞬間、まわりから祝福の拍手歓声がわき上がった。熱狂するご婦人方。駆けつける足音。どうやら、イテテ、背筋をすこし痛めたようだが、それよりも起き上がろうという気になれない。見上げた空にぼんやりとふたつの顔が現れた。不思議そうに自分を覗きこんでいるのは、どこぞの大将と、もう一人、テディ・ブロートじゃないか。

「これはスロースロップであります」ブロートのやつが言った。「紫のシーツをまとっております」

「何なんだ、これは」大将が訊ねる。「仮装大会でもやっとるのか、え？」そこに二人のレディーズが加わり、スロースロップに笑顔をむけた。いや、彼を通り越した向こうへほほえみかけているかのようだ。

「あら、閣下、どなたとお話しですの？」

「このトーガ姿の大馬鹿者だ」大将が答える。「わしと次の柱門の間に、ころがっとるのだよ」

「まあなんてことでしょ」連れのレディーをふりかえり、「ロウィーナには、〝トーガ姿の大馬鹿者〟が見えまして？」

「いいえー、ジューエル、見えませんわ」いかにも嬉しそうにロウィーナが応える。「閣下、きっと酔ってらっしゃるのよ」といって、くすりと笑う。

「こんな大将が、戦争を指揮されたら大変だわね」——笑いで息をつまらせながら「スト

ランド街がザワークラウトでいっぱいになってしまいますわ[18]」ふたりの喉から壮烈な金切声が上がり、それがウンザリするほど長く続いた。

「そしたらあなたの名前、ブリュンヒルデ[19]になるのかしら」その顔は、まるで喉を締め上げられたバラの花のよう、「ジューエルって呼べなくなるわ！」ふたりは息も絶えそうなようすで互いの腕にすがっている。スロースロップが見上げるこの一大パフォーマンス、キャストはいまや何ダースにもふくれあがった。

「あのですね、誰かがぼくの服をぜんぶかっぱらっていってしまったんです。そこでホテルに苦情を言いにでかけたところが——」

「気が変わって紫のシーツを羽織って、木に登ることにしたわけだな」大将はうなずいて、「ならば何かをあてがわんといかん。ブロート、きみはこの男とサイズがほぼ等しいだろ[20]」

「はい」クロッケーの木槌を肩にかついだポーズは、さながらキルガーかカーティスの宣伝写真といったところ。ニタリとスロースロップを見下ろしながら、「おれの制服のスペアがある。来いよ、スロースロップ、大丈夫だろ、きみは、どこもケガしてないよな」

「アオオッ」ずたずたのシーツに包まれたスロースロップ、心配そうに手を貸すクロッケーの競技者たちに支えられて立ちあがると、びっこを引きひきブロートの後に続いて芝生を抜け、カジノの建物に入る。最初立ち寄ったのはスロースロップの部屋。中はきれいさっぱり、スッカラカンだ。次のゲストがいつでも入れる。「まいったぜ・・・」箪笥の引き出しを引っぱりだしても、中は太鼓のようにカラッポだ。自慢のアロハを含めて、着る物を一切合切持っていかれた。なんてこった。呻き声を上げながら机の引き出しの中をまさぐる、何もない、クローゼットにも何もない。軍の外出許可証も、ＩＤも、何からなにま

18 ロンドンの中心がドイツだらけになることの喩え。

19 『ニーベルンゲン』の王妃の名。原意は「胸甲をつけた女戦士」。

20 キルガーはセヴィル・ローのスーツ専門店。（ホーズ＆）カーティスはジャーミン・ストリートのシャツの老舗。

「盗られてしまった」背中の筋肉がズキズキする。「どういうことだい、えっ」一応は部屋番号をチェックしに廊下に出てみる。だが、何者かが意図的に自分を狙ってやったことだと、すでに彼は確信している。ホーガンにもらったシャツを取られたのが何より悲しい。

「まともな服を着るのが先だな」規律にうるさい校長のような、嫌みたっぷりの声でブロートが言う。下級士官が二人、バッグを手にして部屋になだれ込んできて、スロースロップの姿を見るなり、口を開けて立ち止まった。「おい、相棒、間違った戦線に来ちまったんじゃないか」ひとりが叫ぶ。「口をつつしめ」もうひとりが笑いながら、「こちら、アラビアのロレンス様だぞ！」

「うるさい」とスロースロップ。だが腕を振り上げるのも辛い状態で、振り回すなどとても無理だ。とにかくも、ブロートの部屋まで行って一揃いの制服を工面してもらう。

「おい」ふと気がついたスロースロップ、「マッカ＝マフィックのやつはどこだい？」

「わからんな。女と出かけたか、さもなきゃ女たちと出かけたか。そういうきみこそどこにいたんだ？」

スロースロップは答えずにあたりをうかがう。直腸をしめつけるような恐怖が今になって襲ってきた。吹き出た汗が顎と額面にビーズ玉のように連なっている。この部屋はタンティヴィとブロートの二人部屋だ。やつの痕跡が何か残っているだろう。剛毛のノーフォーク・ジャケット、ピンストライプのスーツ、なんでもいい・・・

何もない。「タンティヴィは、別の部屋に移ったのか？」

「あの、ツタンツワーズっていったかな、彼女のところに入り浸ってるんじゃないだろうか。いや、早々とロンドンに帰っちまったかな。別におれはファイルをつけてはいないか

ら。尋ね人の係じゃないし」

「しかし友達だろう・・・」するとブロートは今までスロースロップに見せたことのない横柄な態度を見せた。肩をすくめ、こちらの眼を覗きこんで、「きみは違うのか？　きみはなんなんだ？」

ブロートの眼差しがその答えを告げている。この薄暗い部屋が、合理の権化のような場に変化した。もはや休暇の雰囲気はない、セヴィル・ローの高級店で仕立てた軍服と、直角に並べられた銀のヘアブラシと剃刀、パステルのカーボン紙が八角形の台の上、きらり光る釘に刺さった半インチの厚さは、きちんと角がそろっている・・・この部屋は在リヴィエラの英国政庁（ホワイトホール）の一角だ。

うつむいて視線を逸らすスロースロップ。「探してみる」部屋を出ながらつぶやいた。しばらくは制服は尻のあたりが風船のようにプワッとふくらみ、ウエストもきつきつだ。しばらくはこれを着てろって、その窮屈を感じろってか。

まずは昨夜彼と話したバーに行ってみると、帽子を被り、たっぷりした口髭をくるりとカールさせた大佐がひとり、大きな泡立つ不透明の、白い菊の花を添えたグラスを前に、身を硬くしてすわっていた。「サンドハースト[21]じゃ敬礼のしかたも教えんのか」と怒鳴られたスロースロップは、一瞬ためらった後、敬礼する。「英国軍の士官見習いの養成は、今はナチスがやっとるのか、バカモノ」バーテンダーの姿はない。思いだそうとしても——「何の用だ？」

「実をいうと自分は、えーと、アメリカ人でして、この制服は借り物であります。それで中尉（ルーテナント）、もとい中尉（レフティナント）[22]のマッカ＝マフィックを探して・・・」

21　ロンドンの南にある王立陸軍士官学校。

22　同じ綴りの単語をアメリカとイギリスで別様に発音する。

「きさま何者だとう？」大佐は歯で菊の葉をちぎって吼えた。「何なんだ、そのナチの戯言はいったい、えぇ？」

「ども、ありがとうございます」後ずさりしながら再度敬礼。

「信じられん！」反響がスロースロップの後を追ってヒムラー遊戯室へ向かう。「ナチめが！」

白昼の時の弛みの中に放棄された響き渡る空間――マホガニーと緑のベイズ地、[23] マロン色のビロードを吊した掛け輪。賭け金を集める長柄の木の熊手が卓の上に扇の掌を拡げている。黒檀の柄の銀のベルは口を下にして朽葉色の化粧板の上。卓のまわりにはカラの帝国椅子が精確に並んでいる。だが中には背の高い椅子が混ざっている。ここに見える図は、ゲームの偶然性を外的に可視化していたものではもはやなかった。ここでは別な企てが、もっとリアルで、もっと熾烈な営みが、スロースロップなどには見えないレベルで進行している。高いほうの椅子にすわるのは誰か。〈かれら〉に名前はあるのか。その滑らかな、彼らのベイズ地の上に何が置かれるのか。

真鍮色の光が頭上から舞い降りてくる。その大部屋を囲っている壁画には、軽やかなる男女の神々、パステルで描いた羊飼いの青年と娘たち、霧が包んだ茂み、風にはためくスカーフ。…刳形にもシャンデリアにも柱にも窓枠にも、金メッキの花綵のようなものが渦をなして垂れさがって…寄木張りの床の傷が天窓の光にきらめく…天井から卓面の上、数フィートまで垂れた長い鎖の端に鉤。これに何を懸けるのか？[24]

英軍の制服を着たスロースロップはひとり、彼らの調度品たちとともにある。自分らとは異なる等級にて結託した彼らの物が、ありきたりの目覚めた世界に紛れこんでいるんだ

23 賭博テーブルに張るフェルト状の生地。

24 「ヒムラー」の名をつけた部屋で「鉤に掛ける」といえば、残忍な処刑のイメージが避けがた

とは、つい最近まで気づかなかった。
きっとここに、金色をした、動物の形とも人の形ともつかぬ存在（フィギュア）がその褐色と明るいクリームの影と光の中に、ふっと姿をあらわしたこともあるのだろう。だがいつまでも夢想に終るスリーストリップではない。まもなく、不快な考えが浮かぶだろう――この部屋にあるものはすべて、何か別の目的に使われているのではないか。〈かれら〉にはこれ全体が意味をなしているのに、その意味をわれわれが知ることはない。けっしてない。存在にふたつの等級がある。見かけは同じでも、ここでも背後に……

おお、彼方なる世界
なんとも説明しがたい世界！
脳の迷路をさまよう夢か！
禁断の魅惑をプールのように踏み進むと、
灯りがチラチラみえ出す
向こうへ行くなと、誰か言ったか？
試してみたっていいだろう
痛い思いをさせられたのなら
またあらためて出直せばいい
さよならの日は永遠に来ないのだから

なぜここなのか？ 彼の上にのしかかってきた世界の。その虹の端が。暗号に充ちたこ

く浮かぶだろう。

25 このフィギュアは、下巻435ページに登場。

の部屋で、とりわけ強くさざ波だっているのだ？　ここを歩くと、まさに〈禁断の翼棟（ウィング）〉を進んでいるような気持ちになるのはなぜなのだ？——いつも変わらぬ長い部屋、古きが固まり悪が蒸溜され、忘れ去られた過去の腐敗の匂いがただよう恐ろしい凝結と残滓の部屋。グレイの羽毛の翼を拡げて直立する彫像であふれかえる、ほこりだらけの部屋。ほこりは隅や内奥を曇らせ、黒の礼服の折り襟に降り積もり、白い顔の彫りを埋めて表情を柔和にし、白いシャツの胸元にも宝石やガウンにも降りかかる。この空間を、あまりに速く飛び交っている不可視の白い手（ホワイト・ハンズ）の上にも…〈かれら〉がカードを配る、これはどんなゲームなのだ？　この、あまりにぼやけた、あまりに古びた、あまりに完璧なパスはなんなのだ？

「ファッキュー」と、小さな声でスロースロップ。彼の知っている唯一の、あらゆる用途に使う呪文がこれだ。吐き捨てられたその呪文が何千もの小さなロココ様式の模様にぶつかる。今夜ひっそり忍び込もうか——いや夜はまずい——だがいつかはきっと、バケツとブラシを持ってきて、あそこのピンクの女羊飼いの口から出てくる吹き出し（バルーン）に「ファッキュー」と書きこんでやろう…

逃げだすように部屋を出る。ドアの外に出てからも、まるで腹部側の半身が、王の威光（レイディアンス）にうたれたみたいな感覚が続いている。恐怖しつつも求める〈プレゼンス〉に顔を向けたまま退却する。

外へ。ビーチに遊ぶ人たちと、飛ぶカモメ、降り止まぬカメモの糞の間を通って埠頭に向かう。ブワドゥブーロンを歩こうよ、ララ、アンデパンダンな風を吹かせ[26]…制服姿にはとにかく敬礼しておこう、反射的にふるまうのが一番だ、よけいなトラブルは避けて、

26 モンテカルロで大勝ちして帰ってきたパリ

なるたけ透明人間のようになって・・・敬礼のたび、肘がだんだらしなく垂れて脇に近づく。雲がみるみるうちに海からこちらに近づいてくる。ここにもタンティヴィの気配はない。

過去の亡霊――漁師の、ガラス職人と毛皮商人の、背教伝道師の、丘の上の長(おさ)と谷あいの政治屋の亡霊。それらが、今ここに在るスロースロップから、なだれを打って背後へ飛んでいく。一六三〇年へ。総督ウィンスロップが偉大なるピューリタン船隊の旗艦〈アーベラ号〉でアメリカに渡ってきた年だ。その艦上では、アメリカでの初代スロースロップがコックか何かの仕事をしていた。[*27] だがその〈アーベラ〉率いる船隊も後ろへ飛んでいく。風は船隊を東へ吸いこむ。世界の果てから身を乗りだした風神の子らが頬をへこませ、懸命な寄り目の顔をして息を吸いこむ黒く深い空洞は、もはやミルク色の天使の臼歯ではない、鋭利な歯の思うままだ。ふるき船隊はボストン港から引き剝がされ、またたく間に大西洋を後戻り。潮も波も逆回しに流れてうねる・・・デッキがガクンと動いた拍子に転(こ)けたコック全員、ピコンと起ち上がる。その夜のシチューはこぼれた床の上から、または、怒りにまかせてそれを踏みつけた、より〈選ばれし者〉の靴の下から飛び上がって皿に戻り、くねった噴水となって白錫(ピューター)のケトルに逆戻り。床に倒れた給仕もシャッキリ立ち上がり、足をすべらせたゲロ溜まりは噴きあがって口の中へスポンとはまる・・・素早いチェンジだ！　タイロン・スロースロップは先祖の故国英国へ！　しかしここの〈かれら〉が思い描いている救済とは、そういうのとは違うようだ・・・

玉石を敷きつめた広い遊歩道を進んでいく。雲が太陽を隠すにつれて、脇に並ぶ棕櫚の並木が粗目の黒に変わってゆく。タンティヴィは浜にもいない、女の子たちも見あたらな

男を歌った懐メロソング "The Man Who Broke the Bank at Monte Carlo" を口ずさんでいる。「ブワドゥブーロン」は、「ブローニュの森」の英語訛り。

27 初代スロースロップの名はウィリアム。ピンチョン家のアメリカでの初代ウィリアムはコックではなかったが、アーベラ号を旗艦とする一隻で、イギリスから渡ってきた。

CamScannerでスキャン

い。スロースロップは低い防壁に腰をおろし、足をぶらぶらさせながら前を見つめる。鼠色や泥紫のシーツとなって、雲が海から流れこんでくる。空気も冷えてきた。彼は震える。〈かれら〉は何を仕掛けてるんだ？

スロースロップがカジノの前に戻ってきた丁度そのとき、蜂蜜が降ってきたかと思うほど濃密な雨玉が、ペチャリペチャリと舗道に大きな星印をつけ始めた。雨粒が彼を誘う――ほら、見ろよ、今日一日のことを書き並べたテクストの最後を見てごらん、そこに脚註があって全部説明されてるから、と。だが彼に覗く気はない。一日の雑多な出来事が最後にきちんと意味を形作らなくてはいけないなんて話は誰からも聞いたことがなかったから。雨に降られりゃ走るだけだ。雨脚が強さを増す。降りかかる水のクレッシェンド。着地するたびに、ハネの花弁が開き、宙を飛んでる彼の後ろの中空に一秒間だけ、水の花が姿を留める。いや、これはまさに飛翔である。館内に跳びこんだ彼は、斑点やパイのサイズのシミをいっぱいつけて、生気のない広いカジノを狂ったように探しはじめた。まずは今も変わらず煙たく酒臭いバー、お次は小劇場へ――今夜は『無駄な見張り（イヌーティル・プレカウツィオーネ）』[28]（『セビリアの理髪師』の中でロジーナが後見人を欺こうとして利用するあの架空のオペラだな）の簡略版をやっている。ホール脇の緑の部屋は女たちと絹の衣装で充ちているが、スロースロップの求める三人はいなかった。ガーターをなおし、睫毛をつけ、スロースロップにほほえみかける女たちの中に、ギスレーヌかフランソワーズかイヴォンヌを見かけた者もいない。別の部屋ではオーケストラがロッシーニの軽快なタランテラ[29]を練習している。リード楽器から鳴る音はどれもみんな半音フラットしている感じ。彼はすぐに理解した。ここの女たちはみな、人生のかなりの部分を戦争と占領の中で生きてきて、周囲の人間が

28 ロッシーニのオペラ『セビリアの理髪師』（一八一六）、第二幕で演じられる劇中オペラ。

29 速いテンポの$\frac{6}{8}$拍子でクルクル回って踊る曲。

日に日に消えていくのに慣れっこになっているんだと…ほら、この女、二つの瞳に、古来からのヨーロッパ的憐憫があふれている。こんな表情に彼もそのうち慣れていくのか。自分自身がイノセンスを失って同じ目になるのはまだ先だとしても…

流れにまかせて進んでいく。客のひしめくいくつもの賭博ルームの照明の下を通り、ダイニングホールを抜け、サテライトの小部屋では密談中の男たちに睨まれ、ウェイターとは鉢合わせ。どこを見ても知らない人間ばかり。助けが要るなら、僕を頼れ。[30]…話し声と音楽とカードのシャッフルがだんだん大きくなって耳を圧迫する。もう一度ヒムラー遊戯室を覗きこんでみると、かなりの混雑ぶりだ。宝石がきらめき、レザー地が光り、回転するルーレットのスポークが互いに溶け合っている――ここでスロースロップが過飽和状態の圧力に屈した。まわり中がゲームだらけ、あまりに濃密で、耐えきれない。目に見えないクルピエの、鼻に掛かった執拗な「メシュー、メダーム、ル・ジュー・ソン・フェ」[31]という声が、突如〈禁断の翼棟〉から直接彼の耳に届いた。スロースロップに宛てたそのメッセージは、きみは今朝から目にも見えない〈ハウス〉に敵対しようとしているようだが、それはすなわち手前の命を賭けて動いていることなんだぞという意味か――怖くなって目を背けると、そこにはただ雨に濡れた舗道があるだけ。ガラスを刷いたような丸い敷石が、エレクトリックなカジノの灯りを反射して、ホロコーストのように全面がギラッいている。襟を上げ、ブロートの帽子を耳に引き下げ、数分に一度「クソ！」と毒づくスロースロップ。だが震えは止まらない。背中の打撲は疼きつづける。雨の舗道をつまずきながら進んでゆくうち、泣きたい気持ちに襲われた。この足早の変化は何だ。どうして世界は自分に敵対するようになってしまったのか。友達も――旧友から最近知り合ったのま

30 タンティヴィのセリフ。370ページ参照。

31 フランス語で「レディーズ&ジェントルメン、賭けは成立しました」。クルピエがルーレットを回すに先立って唱える決まり文句。

CamScannerでスキャン

で──消えちまった。自分にかかわる書類も衣服も、なにもかもが消えちまった。こんな目に遭わされて、紳士然としてられるか。彼がカッチェのことに思いを馳せたのは、それからかなりの時間を経てから。ズブぬれになったウールの軍服の中で、疲れきって鼻を啜りながら、寒さと惨めさにじっくり身をひたしてからのことである。

カジノに戻ったのは真夜中近く、「カッチェの時間」が迫っている。バシンバシンと洗濯機のような音を立て、ぬれた足跡をつけながら階段をのぼっていって彼女のドアの前で止まる。水滴をボタボタ敷物の上に垂らしながら。ノックするのが今夜は怖い。彼女もまた敵の側にまわっているのか。ドアの向こうでどんな野郎が待ち伏せているのか。〈かれら〉はどんな装置を持ちこんできたのか。だが彼女に気づかれた。にわかにドアが開いて現れた顔に、グショぬれの彼を叱るような笑窪が浮かぶ。「タイローン、心配したわー」

彼は肩をすくめる──どうしようもなく痙攣的に肩が動いて、ふたりの上に飛沫がかかる。「ここ以外、どこに行っていいのかわからなくてさ」。彼女の顔に微笑のさざ波が拡がった。奥深い部屋への閾（しきい）を、慎重にスロースロップは跨ぐ──これはドアなのか、それとも高い窓なのか。どちらだかもうよくわからない。

CamScannerでスキャン

□□□□□□□

なつかしき情欲の朝。早朝の雨戸は海に開き、棕櫚の葉をザワザワこする風が部屋に吹きこみ、港では海面を突き破るイルカたちの鳴き声。その飛びはねる体が日射しを跳ねかえす。

「オーッ」バティストとブロケードの二つの布地の間のどこかからカッチェがうめいた。

「スロースロップのブタめ」

「ブーブーブー」楽しげにスロースロップが鳴く。海からの光が天井を舞い、闇市のタバコの煙がカールする。朝の光のふるまいの厳密さが、立ちのぼり、蛇行し、巻き込み、繊細に散って透明さの中へ消えていく紫煙の優美さを際立たせる・・・

やがて漆喰の白が港の青を反射して、高背の窓の鎧戸がふたたび閉じられるだろう。光の網目模様の中に波のイメージがきらめくだろう。その頃にはスロースロップも起きだし、英軍の制服を着込み、クロワッサンをほおばりコーヒーを飲みこんで、技術系のドイツ語の復習をしているか、矢羽根つき飛行物体の弾道理論に頭を悩ませているか。図面に鼻先をくっつけんばかりにして、抵抗器のように見えるコイルとコイルのように見える抵抗器

CamScannerでスキャン

だらけの回路をなぞっているところだろう。[*1]「なんてヘンテコリンな回路図なんだ」やっと理解が及んだスロースロップ、「これ、カモフラージュのつもりかい、何なんだよ」。
「きみもゲルマン人の子孫じゃないか。古代ルーン文字を思いだしてみたまえ」とサー・スティーヴン・ドズスン＝トラック。PID[*2]から派遣されてきたこの紳士は、強烈なオックスフォード・スタイルの英語を含め、三十三ヶ国語を話す。
「古代の何だって？」
唇をギュッとすぼめて出したOhの音は、脳のもよおす嗚咽だろうか。「そのコイルの記号は、古代スカンジナヴィア語のルーン文字のS[*3]と酷似しているんだ。Sはsôlすなわち太陽のこと。高地古独語のsigilに相当する[*4]」
「ヘンなかっこうの太陽だな」とスロースロップ。
「まったくだ。古くは、ゴート族が円の中心に点を打った形象を用いていた。この破線は明らかに不連続が生じた時期にさかのぼるな。一族の分裂というか疎外というか、要するに、幼い精神における独立した自我の形成過程と類比されうる社会的現象だよ」
といわれてもスロースロップにはサッパリである。ドズスン＝トラックのとなりにすわると、必ずといっていいほどそんな話を聞かせられる。この男、ある日突然、どこからともなく、ビーチにいた彼の前に姿を現したのだった。ニンジン色の、薄くなった髪の毛から落ちたフケを、その黒い服の肩に、星のようにちりばめて。ダークな服が近づいてくる背景では、カジノの白い建物がゆらめいていた。スロースロップの手にはプラスチックマンの漫画[*5]。顔を空に向けて居眠りしていたカッチェは、彼のステップが耳に入ると、肩肘をついて手をふった。「サー」の爵位をもつ男は全身を投げだした。態度（アティテュード）、分類項8―11、

1 ドイツ式の回路図では、コイルはギザギザ、抵抗は丸みのある記号が使われた。

2 Political Information Division＝英国の外務省政治情報部。

3 く

4 出典はヤーコプ・グリム著『ドイツ神話学』。ストーリーブラスの英訳 *Teutonic Mythology* をネットで読むことができる。

5 ジャック・コール作。雑誌連載の始まりは一九四一年。一九四三年には単行本化。

6 ドイツ国防軍少将ヴァルター・ドルンベルガーが戦後著した『V

無気力な学生風」「これがスロースロップ中尉ですか」

カラー刷りのプラスチックマンが鍵穴から抜けでて、角をまわり、ナチのマッド・サイエンティストの実験室の流し台に通じている管の中をのぼってゆく。蛇口からプラスチックマンの頭が、白線で覆われたブランクな眼と非プラスチックな顎が、ちょうど現われたところで、「当たりだ。そういうあんたは？」

サー・スティーヴンの自己紹介。日射しの中でソバカスが映える。もの珍しそうにマンガ本をじろじろ眺めて、「今は研修時間ではないようですね・・・」

「こいつ、承認ずみかい？」

「大丈夫、パスしてるわ」ドズスン＝トラックに対して肩をすくめながらスマイルする。

「さっきまで、テレフンケン[6]の無線電波制御の学習をしていたところだ。〝ハワイＩ〟ってのはご存じかい？」

「名前の由来を考えてみたくらいですけどね」

「ナマエ？」

「なかなか詩的な名前じゃないですか・・・Hawaii（ハワイ）という語はHaverie（ハヴェリ）、すなわち英語の〝アヴェレージ〟の響きがある——平均（アヴェレージ）というのは、もちろん、進路に対して左右対称に出っ張った左右対称なロケットの形状への言及になっているわけですが・・・hauen（ハウエン）の響きもありましょうね、hoe（くい）または棍棒で打つ、叩きつけるという意味の・・・」その先はすっかり一人旅だ。誰に向けるわけでもない笑みを浮かべて。戦時に多用されるabhauen[8]という、ドイツ語も、もとはといえば、六尺棒の棒術から来たものであって、その農夫的ユーモアは古代ギリシャの喜劇に見られるファルスのモチーフに遡るとか。・・・はじめのうち

[illegible]、テレフンケン社の誘導ビームは、実戦用には間に合わなかったものの、一五〇マイルの距離を飛ぶロケットを、一〇〇ヤード以下の誤差で命中させる性能があった。

7 hauen は「打つ」「切る」「たたき割る」の意味で、Haue（つるはし、まさかり）と同根語。同じ根から古仏語のhoue を介して中英語howe が生まれ、現代英語の hoe になった。

8 「切り落とす」を原意とするこの語は、「出ていけ」「失せろ」という意味のスラングにも、また飛行機の「離陸」やロケットの「発射」に対しても、使われる。

9 下巻665ページ参照。

スロースロップは、プラスチックマンの漫画に早く戻りたいと思ったけれど、この男、彼らの企みと繋がっていることは明白なのに、ついつい話に誘いこまれてしまう・・・ある純粋なひたむきさというか、自分が入りこんでいる世界がいかに喜びあふれるものであるかを、〈言葉〉への愛情を、相手と分かち合おうとする以外に人と親しくする方法を知らないようなところがあるのだ。

「ただの枢軸国側のプロパガンダだとも言えないかい。ハワイといえば、真珠湾の線も考えられるだろ」

サー・スティーヴンはその可能性を考える。表情がうれしげだ。〈かれら〉がこの男を運んだのは、スロースロップ家の家系樹からコトバにいかれた面々がぶら下がっているからだろうか。〈かれら〉は他人の脳や、文字を読む目も、誘惑しようというのだろうか。〈かれら〉から自分まで、いかなる力の連鎖があるのかは知らない。その形態や造形を思い描くことはスロースロップはできないが、しかしときどき、そこにクラッチのメカニズムを見いだすことはできた。それを踏んで、はるか上方にある鉄製のエンジンから、切り離されたあとの、惰性で回りつづける無力感を実感する・・・いや、不快ではない。それも変だ。〈かれら〉の望みが何であるにせよ、自分の命が危険にさらされるわけでも、生活に難が生じるわけでもないと、ほぼ確信できるのだ。ただ全体がうまくひとつに噛みあわない。ドズスン＝トラックのような男が、どうしてカッチェのような女と結びつくのよ・・・

誘惑女とお人好しかい。いいだろう、このゲーム、悪くはない。無理を装う必要もないし、彼女を恨むこともない。真の敵はロンドンのどこかにいるわけで、彼女は雇われ仕事

をしているだけだ。自由自在にどうとでも変われる女で、このまま陽気でやさしいままでいてくれるのなら、爆弾の降るロンドンで凍えているより、そりゃあ彼女とふたりで温々やってられるほうがいいにきまってるのだが・・・しかし彼女の顔にときどき、制御しきれずに立ちあらわれる翳りのようなものが気になる。一瞬の仄かな表情で、うまくは捉えられないのだが、それがスローストップを滅入らせる。夢にも出てきた。その顔がぐっとズームして、心底恐怖を感じさせた。彼女もまた、彼らにいいように使われているだけなのか。自分と同じ犠牲者なのか——不運にも、理不尽にも、未来を奪われた顔・・・

ある灰色の午後、ヒムラー遊戯室で。そうさ、そこに決まってる、ひとりでルーレット盤の前に立っていたカッチェをふと見かけた。頭を垂れ、片方のヒップを引き上げた優雅なポーズで、クルピエ役を演じている。〈ハウス〉の従業員かよ。村の娘らしい白いブラウス、虹のストライプ入りのサテンのダーンドル・スカートが、天窓から差す光にゆらめいている。ルーレットの玉がスポークを打つカラカラとした長い引っ掻き音が、壁画で囲まれた空間に響きわたる。隣りに立つまで、スローストップのほうを見なかった。彼女の息遣いには、ゆっくり重々しいビートを伴う震えがあって、それがスローストップの心の鎧戸(シャッター)を叩く。その一瞬、田園のきらめく秋の光景が差した。スローストップの不安が高まる。この光景は自分の外から、彼女の内から差してきたものに違いない・・・

「ヘイ、カッチェ・・・」すらっとした腕が伸びて指先がスポークにかかる。盤は回転を止め、玉が落ちる。どの数字に落ちたのか、ふたりとも見ていない。数字を見なきゃゲームにならないが、しかしゲームの背後で続いていくゲーム[*10]では、そんな数字に意味はない。

彼女は首を振る。彼にはわかる、アーネム以前の、オランダでの出来事だろう——ふた

10 373ページ註16参照。

CamScannerでスキャン

りの電気回路にあらかじめ組み入れられたインピーダンス。[*11] スロースロップにしても、パームオリーヴやキャメイの香りのするいくつの耳に、どれだけの甘い歌を吹き込んだだろう——ボーリング・アレーの脇でも歌った、道路脇のモクシー・ドリンクの看板の後ろの歌でも、サタデー・ナイトの、もう一本クォート壜を開けてくれって歌も、みんな意味するところは同じだった——ハニー、過去なんか問題じゃないぜ、いまこの瞬間がすべてじゃないか……

故郷じゃそれでよかったが、ここでは無理だ。カッチェの素肌の肩を指でタップしても、その目の中にヨーロッパ的な暗がりが見えたとたんにストップがかかる。困惑。やっと櫛の通る直毛に、皺ひとつないひげ剃り跡もつるんとした顔をひっさげて、このヒムラー遊戯室のゲルマン＝バロック的に紛糾した形の中へ入っていこうという自分の童貞ぶりに困惑する（ゲームの最後の一回りで、それぞれが差しだす手はみんな過去の刻印（サクラメント）なのだ——なぜなら、その手はすでにそうであったのだし、そうならざるを得なかった、まさにこのように収まる以外になかったから……すべての凍えと、トラウマと、過去に自分に触れ、いま離れていく肉のすべて……）　そのねじ曲がった金ピカの遊戯室では隠された自分の秘密も、いくぶんか、明瞭になる。〈かれら〉のオッズは過去に、過去だけに属するのだ。オッズといっても、これは確率的なものではなく、すでに観察された頻度を意味する。ここで要求をつきつけるのは過去なのだ。過去がささやく。後ろから、不愉快そうにニタリと迫ってきて、犠牲者のケツに、過去が、突きを入れる。

〈かれら〉は番号を、赤や黒を、奇数や偶数を選ぶことで、何を意味したのか？　どんな運命の〈輪〉を〈かれら〉は始動させたのか？

11　導線の抵抗に交流回路のリアクタンスを加えた、実質的抵抗の全体値。

ある部屋で、生まれてまもないスロースロップに、もはや戻ることを許されないその部屋で、何かとてもわるいことが起きた。そこで何かが彼になされた。それが何か、カッチェが知っているかもしれない。彼女の「未来のない顔」に、自分の過去とのリンクを見いだせなかったか、ふたりを恋人のように結びつける何かが見えなかったか？　生の進行の端っこに、次の一歩を失ったまま立っているカッチェの姿が彼には見える——賭けるべきものはすべてを賭けてしまい、あとはただルーレットの上をカラカラ回るだけの倦怠な現在があるだけ。番号のついた仕切り部屋を次から次へ跳ねていくけど、その番号は関係ない。ただ惰性の回転がやんで、どこかの仕切りにはまるだけ。それだけ。

ナイーブなスロースロップは、そんなふうに終わる人生があるなどとは考えてもみなかった。そんな殺伐とした世界とは無縁だった。だが今はもう、あまり奇妙な気持ちもわかない。まさしく同じ〈制御〉の手が、すでに自分の上にも置かれているという、やりきれない可能性に、自分から、恐れつつ、昂ぶりつつ、自慰にふけるかのごとく、すり寄っていく。

〈禁断の翼棟〉。ああ、おれの夢の袖を引っぱる手は、そこを仕切る恐ろしきクルピエの手だったのか。なんてことだ、自由なランダムなものと信じてきたもののすべてが、〈制御〉のもとにあったとは。おれの人生、これまでずっとそうだったとは。仕掛けのあるルーレット・ホイールとまるで同じに。個々のゲームで勝とうが負けようが関係なく、長期にわたる確率と最終的な結末だけが重要なのであって、結局いつも〈ハウス〉が確実に利益を上げていくだけなんだ・・・

「ロンドンにいたのね、あなた」と、まもなくカッチェがささやくだろう。クルリと後ろ

を向いて彼女のルーレットをもう一度回しながら。そして顔をそむけたまま、夜を織りこんだ彼女の過去を、女性っぽいひねりを加えて紡ぎ出すだろう。「ロケットの降るロンドンに。あたしがいたのは、スフラーフェンハーへ[12]よ。その地名には、いかにも亡命者らしいためらいが。摩擦音に充ちたため息が、伴う——「スフラーフェンハーへから飛んでいくのを見ていたのよ。あなたとあたしをロケットの軌道がつないでいた、いいえ軌道だけじゃない、ロケットの〈生〉がわたしたちをつないでいたのよ。きっとあなたもそう思うようになるわ、一点の間で、ロケットは与えられた五分間の一生を生きる。あたしたちが握ってる飛行曲線（フライト・プロファイル）のデータさえあなたは知らないのよね、ロケットの、目に見える、跡を追える部分さえわかっていない。それ以外にもいっぱいあるのよ。わたしたちの誰一人として知りえないことが限りなくあるの」

だがふたりが感じるのは曲線だ、間違いなく。それは放物弧（パラボラ）。きっと一度か二度、そのことに気づいたのではなかったか（気づきながらも信じるのは拒絶した）——すべては、そのつねに、全体として、空に潜む純粋化された形へ収斂していたということを。何の偶発性（おどろき）もない、やりなおしも引きかえしも受けつけない弧[13]の形へ。それなのにふたりとも、その下を動き回るだけなのだ。そのブラック&ホワイトの凶報に確実にやられるべく、弧の下を、それがあたかも虹の弧であるかのように勘違いして……まるでふたりがその虹の子どもたちであるかのように……

戦争の前線が遠のき、カジノがしだいに後衛に退くにつれて、水質汚染と物価上昇が顕著になり、休暇で来る軍人一行の騒々しさと痴呆の度合も高まってきた——タンティヴィの優雅なスタイルを、そいつらに期待するのはハナから無理。酔ったときに見せるあのソ

12 通称「ハーグ」の正式名称。

13 V2ロケットは多く白と黒に塗り分けられていた。小説全体を通じて白黒世界とカラフルネスとの対照が明確である。

CamScannerでスキャン

フトステップのタップダンスも、ハイカラを気取ったポーズも、照れつつも真っ当な反抗をせずにはいられないところも、そう、権力を（あるいは無関心を）目にしたときは、どんな些細なものであっても、どうにかして反抗を企まずにはいられない男。……どこへ行ったのだ。誰も知らない。仲間をひとり失ったというより、ひとつの存在が、あるやさしさが、ごっそり持っていかれたように感じられる。スロースロップときたら今も信じているのだ。南仏でのんびり羽を伸ばしながら、この干渉は一時的なもの、書類上のものにすぎないと思ってる。メッセージが組織をまわり、指令が下されただけのことで、〈戦争〉さえ終わればこの不都合は消えるんだ、と。〈かれら〉はなんと巧妙に、徹底的に、スロースロップの頭の中の大平原を掘り返し、鍬を入れて種播きし、彼自身の思考が芽を出さぬよう計らったことか……

ロンドンからの便りは皆無、ACHTUNGからの知らせもない。すべてが消えた。テディ・ブロートもある日プイといなくなり、カッチェとサー・スティーヴンの背後に、ときおり別の荷担者たちが、コーラスラインのようにどんどん姿を見せては、規格品の企業風スマイルを浮かべる。舞台上でニコリとして、その白い歯にスロースロップの意識を向け、その間にこっそり、彼のID、軍用書類、そして彼の過去までも奪いとっていこうという寸法なのか。知ったことか。好きなようにさせておけ。これがどこまで進むのか、興味深く（ときどきちょっぴり不安な顔して）なりゆきを見守っている。あるとき彼は、気まぐれに——いや、確信は持てないが、これは仕組まれたのではないだろう——口ひげを伸ばすことにした。そんなことを考えたのは十三歳のとき以来だ。あのときはジョンソン・スミス社のカタログ通販で、口ひげキットを注文した。怪人フー・マンチューからグ

ルーチョ・マルクス風まで、二十種類入り、黒い厚紙製のその口ひげは、鼻の穴に差しこむフックが付いていたが、しばらくするとフックに鼻水がしみてフニャリとし、そしてポロンと落ちてしまった。

「なんなの、それ?」スロースロップの鼻の下に黒いものを見た瞬間、カッチェがたずねる。

「バッド・ガイだ」とスロースロップ。刈りこんだ、細い口ひげは悪漢風、と説明する。

「だめよ、それは。ワルの態度は許さない。善人のひげを生やしてよ」

「善人は、そもそもひげなんか生やさない」

「うそ、ワイアット・アープはどうなの」

これに対しては、はたしてワイアットが善人なのかどうか議論をふっかける手もあるわけだが、これはまだスチュアート・レイクの解釈によるイメージ[14]が幅をきかしていた時代の話で、西部の英雄保安官というイメージに変更が加わるのは後のこと。スロースロップにしてもグッド・ガイのワイアットを信じていたのだ。ある日、SHAEFの技術班のワイヴァーン大将がやってきて、その口ひげに目を留める。「両端が垂れ下がっとる」

「ワイアットもそうでした」と釈明すると、

「ジョン・ウィルクス・ブース[15]はどうなのだね」と切り返された。「えっ?」

スロースロップは考えてから、「ブースはバッド・ガイでした」

「その通りだ。端っこをひねってピンと上に向けなさい」

「英国スタイルですよね。やってはみたんですが。気候が合わないのか、すぐダランと垂れちまうんです。なんていうか、ハタキみたいで。で、あんまり厄介なもんで、つい両端

14 「OK牧場の決闘」で有名なアープについて最初の伝記(一九三一)を出版したスチュアート・レイクは、一部事実を曲げて、正義を守る保安官という側面を強調した。

15 リンカーンの暗殺者。

を歯で嚙み切ってしまう」
「きたない話をするな」とワイヴァーン。「次回の見回りのとき、ワックスを持ってきてやる。それをつけておけば、苦い味がするから端っこを嚙む気にならんだろうからな」
というわけで、スロースロップのひげが寸法を伸ばすと、スロースロップがひげにワックスをつけるという寸法。[16] そんな新しいことが、毎日何か起こる。〈かれら〉は毎日カッチェを送りこんできた。枕もとにコインを置くみたいにカッチェを忍ばせる。そのうちに彼のアメリカン・イノセンスが——歯の生えかわる子供の腔内の門歯と臼歯のように——揺らいできて、このごろカジノを歩いているとカタカタ音を立てるようになった。そして、まことに不思議ながら、学習の時間が終わるとスロースロップはなぜか必ず勃起している。なぜだろう、ドイツ語から拙速に英訳された文献に、特別エロティックなところなどあるはずもない。切れ切れのガリ版印刷だし、その情報のうちにはブリズナのロケット打ち上[17]げ実験場の便所からポーランドの地下組織がさらってきたものもあるというのに、そんな、マジにナチス親衛隊(SS)の糞尿にまみれたもののどこがセクシーだというのだ……授業でやってることといえば、インチとセンチの換算や、ホースパワーからプフェアデシュテルケへの換算率[18]を覚えたり、オクシダイザーとスチームと過酸化水素と過マンガン酸塩用の管にバルブと通気孔と各種チェンバーをつなぐ複雑な回路をそらで描かされたり——そんなことのどこがセクシーだというの？ 訳がわからんまんま、とにかく授業が済むたび、激しく勃起した腰をもち上げ、そのすごい圧迫とともに席を立つはめになる……端から見たら狂ったみたいに思えるだろう、ヘンな恰好で身を引きずり、カッチェを求めて学習室を出ていく——両手を後ろにあてがってカニ歩きだ、シルクのストッキングを骨盤で軋らせな

16 原文は as the mustache waxes, Slothrop waxes the mustache. という、きれいな洒落になっている。

17 一九四四年九月に実際にあった話。ポーランド南東部ブリズナの屋外便所の糞尿の中から、V2の燃料に関する重要情報を記した書類が救出され、連合国側にもたらされた。

18 英米の一馬力（ホースパワー）がフィートとパウンドで決められたのに対して、ドイツでは一キロの重量を一秒に七五メートル運ぶパワーを一PS（プフェアデシュテルケ）と規定。両者の間にはごくわずかな違いがある。

CamScannerでスキャン

から……

授業中、周囲を見まわすと、サー・スティーヴン・ドズスン＝トラックがストップウォッチを睨みながらノートをとっているのをよく見かける。何だ、それ。何してんだ。彼には読めない。その観察行動が、自分の不思議な勃起と関係しているかもしれないことに思いいたらない。疑惑が走り出さないよう、疑念を脳に逸らすよう、ああいうキャラクターが選ばれた（か、造形企画（デザイン）された）わけなのだ。見ればその横顔を、冬の陽光が偏頭痛のように染めている。毎朝六時起きして浜辺を散歩するという彼のズボンの裾は、折り返しがヨレヨレで湿った砂利がついている。サー・スティーヴンが扮装しても見破るのはやさしいが、彼が陰謀全体の中で果たす機能はなんなのか、よくわからない。スロースロップの知るかぎり、彼は作物学者かつ脳外科医にして、オーケストラのオーボエ奏者だ。ロンドンにはこういった多レベルにわたる才能を駆使する多次元的天才ってのがいる。しかし、博識に裏打ちされたドズスン＝トラックの一徹な動作の影にもやはり、カッチェと同じ、独特の香気（アウラ）がある——使われ、捨てられていく者の……

ある日、スロースロップにそのことを確かめる機会がめぐってくる。ドズスン＝トラックはどうやらチェスに目がないらしく、とある午後のバーで、一局やるかと誘ってきた。

「ダメダメ、おれって、チェッカーもできないから」とウソを言う。

「じっくりゲームを楽しむ時間がようやくできたというのに、それは残念だ」

「ゲームなら、いいのを知ってる——」タンティヴィ譲りの何かが、心にしかと宿っていたのか、「酒飲みゲームで、プリンスってんだ。[19] きっとイギリスが本家だろ、プリンスのいるお国柄だし、アメリカにゃそんなのはいない、いや、いて悪いとは言ってない、だが

19 このゲームの起源は不明ながら、……

CamScannerでスキャン

番号をつける、スタートだ、最初のやつが、プリンス・オブ・ウェールズ、なくした尻尾——ごめんよ、悪気はない——時計回りの順番に回っていって、ナンバー2がその尻尾をみっける、プリンスから時計回りの次のやつ。あ、そいつでなくてもプリンスが番号を呼んだやつならいい、そいつが次のプリンスになる、ナンバー6って言われたらそいつがプリンス、まずプリンスを選ぶんでそいつから始めてナンバー2にいくかプリンスが指名した番号のやつにいくか、とにかくスタートはプリンスだ、ウェールズ、テールズときて、2、サー、と言ったら、テールズどうして失くしたの、と聞く、次のやつがそれに答えて、ノット・アイ・サー——」

「それはわかるが」スロースロップに向けられた表情の異様なこと、「ひとつ解せない、つまり皆でそれをやるポイントがわからない。つまり、どうなったら勝ちなんだい？」

ハ！　どうなると勝ちかって。「勝ちはない」リラックスして、タンティヴィのことを考えて、さあ、これからささやかな即興の〈対抗陰謀〉を始めるぞ、「負けていくだけなんだ。ひとりずつ負けていって、最後にひとり残ったのが勝ちさ」

「後ろ向きなゲームのように思えるが」

「ギャルソン！」ここの店の飲み代はいつも無料だろう——〈かれら〉のツケになるんじゃないかとスロースロップは踏んでいる。「いつものシャンパンな！　ジャカスカ持ってきてくれ。なくなったらすぐに補給だぞ。補給、コンプロンデ？」[20]これがマジック・ワードとなった。下っ端の士官が涎を垂らして集まってきて、スロースロップがルールを説明している近くに席を占める。

「僕もやるのか」ドズスン゠トラックが蒸しかえす。

末、エドワード八世（プリンス・オブ・ウェールズ）の退位とともに実際に流行した。

20 フランス語の活用を間違えている。正しくは「コンプルネーヴ？」。

「やるんだよ、チェスばっかやってたら体によくない」
「そうだ、そうだ」と、まわりも騒ぐ。
ドズスン＝トラックは腰をおろしたまま、緊張気味だ。
「グラスが小さすぎるなあ」スロースロップが大声を張りあげた。「あそこのジョッキ、あれにしてくれ！　そう、そう、そうこなくっちゃ」ウェイターがヴーヴ・クリコの大辛(ブリュット)のジェロボアム[21]の栓をシュパッと威勢良く。そして全員にたっぷり注ぐ。
「よし、プリンス・オブ・ウェールズ」スロースロップがゲーム開始、「なくした尻尾(テールズ)、ナンバー3が見つけたと。ウェールズ、テールズ、スリー、サー！」
「ノット・アイ・サー」ドズスン＝トラックが警戒気味に応答する。
「フー・サー？」
「ファイブ・サー」
「え、何ていうんだ？」ナンバー5が助けを求める。パレード用のタータンズボンをはいたスコットランド高地民(ハイランダー)、狡猾そうな顔つき。
「よし、キミは負け」プリンス然としたスロースロップの指示、「飲み干せよ、一滴のこらず、イッキだぞ、途中の息継ぎは禁止だ」
ゲームは続く。スロースロップがプリンス役をナンバー4に取られ、それぞれのナンバーが変わった。最初の脱落者はスコットランド——最初のミスはわざとだが、じきに避けがたいミスをした。ジェロボアムが来ては消える。どっしりした太い緑のボトルの首にはシワになったグレイのホイル、それがギラギラ照明を反射する。キノコ型のコルク栓がやがて真っすぐの型に変わり、酔いが回るほどに、シャンパンの澱引き(デゴルジュマン)の年もしだいに大戦

21　三リットル入りのワインの大瓶。

期の内側へ侵攻。スコットランドの男は椅子から笑い転げ、一〇フィートほど歩行したと思ったら、鉢植えの棕櫚の樹にへたり込んで眠ってしまった。その空いた席に喜色満面とした下級士官がただちに滑りこむ。ゲームのうわさはたちまちカジノ中を駆けめぐり、テーブルの周りはやじ馬が群れ、早く次の犠牲者が出ないかと期待の目つき。どでかい氷塊が運びこまれてきた。内にシダの筋、四面からは白い蒸気を発している。それをハンマーで叩き割り、砕いて大きな桶に入れ、ワインセラーからリレー式に運ばれてくるボトルの行列に備える。ウェイターたちは大忙しだ。空の大ジョッキをピラミッド型に積みあげ、その頂上からシャンパンの噴水を注ぎこまなくちゃならない。泡立つ滝。ジョッキの段々をしたたり落ちる。群衆の歓声が上がる。となれば、きっとどこかの悪戯者が、底のジョッキに手を伸ばす、ひとつ抜きとる、ピラミッド全体がグラリと揺れる、まわりを囲んだ群衆が押し寄せる、床に流れてしまう前にちょっとでも御相伴に、おっと崩れる、わ、軍服も靴もびしょぬれ——で、始めからピラミッドを積みなおす。ゲームは変わって「回るプリンス」が始まった。こちらは番号を呼ばれた者が即座にプリンスになるというルールで、それにしたがって各自のナンバーがシフトする。もはや誰がミスを犯したのか区別がつかず、言い争いも収拾がつかない。遊戯室の半数は卑猥な歌を歌っている。

《ヒワイ・ソング》

昨夜のクイーン・クイーンは　トランシルヴァーニャ
今夜のクイーン・クイーンは　バーガンディー

22　より最近の、ありふれた品に替わったということ。

CamScannerでスキャン

これじゃ朕が　スキゾフレーニャ
女王陛下と　イイことします
女王陛下は　やさしいな
朝っぱらからシャンパン、キャヴィア
紅茶はシャトーブリアンつきで
煙草は十シリングのパナテラ葉巻
ワッハッハッハ、世界はジョークだ
下がれ、下がれ、我が輩は
トランシルヴァーニャのクイーン・クイーンと
チンチンカモカモの仲なるぞ

スロースロップの頭が風船となり、それが垂直でなく水平に上がる。同じところにいるはずなのに、のべつ部屋中を行き来する。脳細胞のひとつひとつが泡粒となる。自分がエペルネ産の黒ぶどう[23]に、冷たい影に、そして高貴なシャンパンに変身する。サー・スティーヴン・ドズスン＝トラックのほうを見やると、彼の背筋は（奇跡だ）ピンと伸びている、ただし目の焦点は定まっていない。やった、チャンスだ、ここで一丁、彼らに対抗する陰謀を企んでやろう、そう、ってことは…ここでスロースロップの視線の先に、ふたたびピラミッド噴水が現れた。こんどのはラベルに年の記載がない。ただの甘口のスパークリング・ワイン。ウェイターとオフになったディーラーがカウンターの上に鳥のように一列に並んで眺めている。騒音レベルがまたすごい。テーブルの上に立ったウェールズ人がア

23　パリの東、マルヌ河沿いの町エペルネで産する葡萄。最高級のブラン・ドゥ・ノワール（黒葡萄の白シャンパン）ができる。

コーディオンの蛇腹を狂ったように伸縮させながら、ハ長調の「レディー・オブ・スペイン」＊24を弾いている。酒場には煙が濃密に渦巻き、その濁りを通してパイプが点々と赤く光る。少なくとも三ヶ所で殴り合いが続く。プリンスのゲームはどこでやっているのか、もうわからない。ドアのあたりに群れた女たちが、指を差して笑っている。制服が群れをなして酒場の光も飴のような褐色だ。スロースロップは自分の大ジョッキを引っつかんでヨロリ立ち上がったが、世界がグルリ一回りして、クラウン&アンカー＊25をやっている真ん中に音を立てて倒れこんだ。優美にやれ、とスロースロップは言い聞かせる、もっと優美に。……周りの連中がわいわいと彼の腋の下と尻ポケットをつかんで、ドズスン＝トラックの方向へほうり投げた。テーブルの下を這っていくと、スロースロップの上に、中尉らしい男が一人ふたり蹴つまずいて倒れてきた。こぼれたシャンパンの泡を過ぎ、ゲロのぬかるみを通っていくと、砂だらけのズボンの裾が目に入った。これはドズスン＝トラックだな。「ヘイ」椅子の脚の間を縫って首をもたげ、顔はどこかと捜すと、あった、あった、房飾りのシェードがついたランプの光輪にドズスン＝トラックの頭が包まれている。「おい、歩けるか」

注意深くスイングした視線がスロースロップの顔面で止まる、「どうでしょう、自分で立てるか……」スロースロップ自身、絡まった椅子から身を解きほぐすのが一苦労、立ちあがらせるのもまた一筋縄ではいかなかったが、ふたりはなんとか、めざすドアを見つけて歩きだした。……よろけ合い、支え合い、暴徒の群れをかきわけて。ボトルを振りまわす、白眼を剥く、ボタンのはずれた、呼び吼える、蒼白な顔をして吐きもどした胃をひくひくさせている連中。彼らを抜けて出口に着いたら今度は香水の匂うしなやかな、麗し

24 一九三一年以来、諸々のレコードが出ている情熱的なナンバー。アコーディオン曲として人々の記憶に定着するのは、戦後のテレビ番組「ロレンス・ウェルク・ショー」の定番曲となってから。

25 67ページの註10。

いほろ酔いの若い女の群れにもみくちゃにされた。中にふたりを挟みこんだ彼女らは、まるで減圧締具、ふたりを外へ送り出す装置のようだ。

「すげえ、なんちゅう景色だ」これはこれは、今日（こんにち）なおこんな日没の景色があったとは。まるで十九世紀、アメリカ西部の「荒野のサンセット」だ——そう、かつて無名の画家たちが数枚のキャンバスに描きとめた入り日、まだ土地に値段がなく、人びとの眼も純粋で、創造主の存在もずっと身近に感じられていたころの日の入りだ。ここ地中海では上空に雷鳴が高く寂しく轟いている。いまどきこんな色が存在したのかと思わせる鮮やかな赤と、もはや誰も見ることができないかと思われたピュアーな黄色は、汚して下さいといわんばかりに純粋だ……もちろん〈帝国〉は西進した。あのヴァージンの日没を見て、突っこまずにいられるか。犯しまくらずに。

だが水平線の彼方、つややかに光る世界の果ての近くに立つ、あの訪問者たちは何者だ……ローブをまとった人影、その身の丈は、この距離からするとおそらく数百マイルはあるだろう——表情は穏やか、解脱したような風情をたたえ、まるで大仏が海を覗きこんでいるかのよう。あるいは、そうだ、あの棕櫚の主日（パーム・サンデー）の爆撃の日、リューベックの上空に立ち、破壊に加担する街を守護するでもなく、ただそこに立ち会って誘惑と爆撃の性的遊戯を眺めていた天使のようでもある。[*26] あの密通（リエゾン）が呼び水になったのだ——ロンドンの街がついに消耗性の疱瘡をあらわにし、ロジャーの地図に切傷と吹出物の跡を見せるようになったことの。夜をかきむしる熊手の死の神（ロード・デス）との情事を始めたとき、すでに決まっていたことなんだ……リューベックの非武装市民にイギリス空軍を差し向けて恐怖の爆撃を敢行したというのはだな、死神さんに、色気たっぷりの流し目を送るのと同じだぜ、もたもたしな

26 リューベックの爆撃と〝天使〟の出現、それに対する報復としてのV兵器開発の経緯については290〜291ページの本文と注36参照。

いてはやくだいて。案の定やってきた。ピンピンに硬いロケットが金切声あげて襲ってきた。もちろんA4はどのみち飛んできたさ。だがリューベックで流した色目がロンドンの陵辱を早めたのは間違いない・・・

世界の縁を見て回る聖者の一行は、今夜は何を見にきたのか？　しだいに色の深まる、モニュメント的サイズの、ストイックな表情の一行が、鉱滓と灰の山へ向かってゆく。その色を最終的に夜が塗りつぶす・・・彼らが立ち会うべき巨いなる何かがどこかにあるのだ？　いまここにいるのはスロースロップと・・・サー・スティーヴン。ふたりで戯言を言い合いながら、遊歩道に並ぶ高い棕櫚の影がつくる牢獄の鉄格子に、おのれの影を交わらせている。影と影の間は、とても暖かい落陽の赤色だ。それがザラザラしたチョコレート色の砂浜にかかっている。この光景から、恐ろしい進行は何も予感できない。環状のドライヴウェイをささやくように走る車もなく、カジノのテーブルで——女をめぐって、国家間の協約をめぐって——何億フランもの金が賭けられているわけでもない。ただこの遊歩道に、ちょっぴりかしこまったサー・スティーヴンのすすり泣きが聞こえている。日中の熱の残った砂上に片膝をついた彼の、押し殺した喉からソフトな嗚咽の声が漏れている。それが、これまで受けてきた抑圧をあまりにリアルに表していて、スロースロップの喉にさえ同じ苦しみがこみあげてきそうだ。だってコイツ、胸のうちをさらしちまったらどんなに痛いツケがくるのか・・・

「そうですよ。ぼ、ぼ、僕はできない。それは、きみもわかってるね——だ、だけど、だったらどうして彼らはきみに教える？　彼らはみんな知ってるんだよ、僕は職場の笑いものだ。みんな知ってる。ノラは心霊世界のスイートハートだと。まさにゴシップ誌が喜び

勇んで買いつけにくるネタじゃないですか——」
「あ！　そうなんだ！　ノラって——あのときアイツ、ほら肌の色を自在に変えられるアイツとの現場をおさえられた…そうか！　へえー、あのノラ・ドズスン＝トラックの！　どっかで聞いた名前だと思ったら——」
　しかしサー・スティーヴンはお構いなしに「…息子がいたんですよ。すごいでしょ、僕ら夫婦にプラスして神経質な子供とくりゃ、完璧なセットだ。ちょうどきみぐらいの年齢か、フランクは、インドシナに送られたのだと思う。…僕は問い合わせましたよ。当局は慇懃に応対するばかりで居所は知らせるまいという腹なんだ。…いや、フィッツモーリス・ハウス[27]の連中は悪党じゃない、スロースロップ君、みんな悪意などこれっぽっちもない。たいていは自分の落ち度なんです。…ノラのことは愛していた、本当だ。しかし他のことが…それは重要だった、重要だと思ったし、今でもそう思っている。そうするしかないじゃないか。ノラが連中と仲良くなる…わかるよね、連中のふるまい。きみも知ってる通り、高圧的で、ベッドにだって、力ずく、連れこもうとする。ああ、ボ、僕は」夕暮れのオレンジ色に染まった髪を振って…「無理だった。上りすぎていた。別の枝で、もはやノラのところへ降りていくわけにいかなかった。いや、ノラは、〈あちら〉とのセ、セ、接触を得ることを歓びにすら感じていたのかもしれない。…スロースロップ君、きみの力、カッチェ、あの女性はすこぶる美人だ」
「知ってるよ」
「彼らはもう僕がド、どうでも構わないと思って、『きみなら熱くならずに監視できるだろう』って、コノヤロウ…おっと、今のは取り消そう。…スロースロップ君、僕らは

27 外務省政治諜報部。

みんなこーと機械的な存在なんだよな。教養み言葉して与えられた仕事を見ていても。それだけだ。なあ、スロースロップ　僕がどういう気持ちでいるか、きみにわかるか？　授業のあと、きみはあの娘と寝ている。なのに僕は男としてフノウなのだよ　書物に向かうしか能がない。報告書をまとめるだけ…」

「おい、おい――」

「怒らんでくれ。僕は無害な男だ。殴るなら殴りなさい、デンと倒れてヒョコンと起きあがってみせるから、ほうら」といってほんとにそれを演じてみせる。「ほんとに心配なのだよ、きみたちのこと、きみの行く末、カッチェの行く末、気になって仕方がない、ほんとうだ、スロースロップ君」

「わかった。何がどう動いてるのか教えてくれ」

「僕は構うぞ。構わないと思うな！」

「わかった、いいから…」

「僕の〝機能〟はだね、きみを監視すること。それが僕のキノウ。どうだ、気にいったか？　どうなんだ？　きみのキノウは…ロケットについて学ぶことだろ、ロケットの機構を順番に一インチずつ学んでいくだろ。僕は…きみの日々の進展を記録して報告書を提出する。それだけだ、僕が知っているのはそれだけだ」

しかしそれは違うだろう。この男は何か隠している、何か深い真実を。だがスロースロップはトンマなことに、酔いがまわって、それをきちんと礼儀にかなったやりかたで聞きだすことができない。こんな下品な質問しかできない――「おれだけじゃなく、カッチェのことも観察してるの？　鍵穴から覗くとか？」

鼻をすすりながら、「どっちにしろ鍵穴から覗いているみたいなもんじゃないかね、どこか違う。僕はこの手のことには非の打ちどころがない男だ。過ちを犯しようがない。マスターベーションさえマトモにできないのだし……提出した報告書にザーメンが飛び散ってたなんてことになりようがない。彼らからすりゃそんなのゴメンだからね。余分な要素がついていない、単なる記録媒体を彼らは望む。……残酷無比、ひどいもんだ。残酷という意識もない。……加虐の歓びを感じてもいない。……そもそも感情(パッション)っていうものをまるで持っていないんだ。

スロースロップはサー・スティーヴンの肩に手をかける。温かみのある鎖骨の上でスーツの肩パッドがコブをつくった。何を言ってあげたらいいのか、どうしたらいいのかわからない。頭はカラッポだし、眠たいし。……だがサー・スティーヴンはなおも膝をついたまま、スロースロップに恐るべき秘密をいままさに告げようとして、その瀬戸際で震えている。決定的な秘密の漏洩、その秘密とは——

《自分のもんじゃなかったチンコ》

(リードテナー):そのチンコ、自分のもんだと思ってた——
　そそり立ってるおチャメなキノコ
　笠は見事なパープルで
　ベッドに集まるオナゴらは
　いつもそいつで、テレフォンごっこ——

（バス）：グリグリまわして、リンチンチン
（中間声部）：身中にカンツな婦人し
（バリ）：隣の言葉を吹きかけた
オッタチンコはひゅるんと消えた
（中間声部）：きれいさっぱり、そのコカン
（テノール）：ひとりになって男はうめく
ハートはつぶれ、ペッチンコ
自分のもんだと思ってたんに
（中間声部）：もんじゃなかった、オッチンコ

扉の向こうから訪問団は見ていたが、光が寒々と細った今、その姿は風と距離に紛れてしまう。……彼らに接近しその正体を把握するのはとてもむずかしい。キャロル・イヴェンターは、リューベックの天使の調査の任を負いながらも、その困難ぶりに頭を抱える。支配霊（コントロール）ペーター・ザクサにしても同じだ。霊界と地上に挟まれたぬかるみで両者とも難儀を余儀なくされている。後日、所はロンドンに。神出鬼没の二重スパイ、サミー・ヒルバート＝スペースが現れた。[28] 誰もがストックホルムにいるものと思っていたのに――いや、パラグアイだったかな。

「よお」人のよいサカナ風（サバの類だろうか）の顔が、イヴェンターを見回する。その顔の動きの緩慢なこと。艦上の射撃管制用パラボラアンテナを思わせるが、それ以上に執拗だ。「ちょっとだけ――」

28 天界は地上を視察し、地上では降霊会を通して天界からの情報収集が続けられる。PISCESの心霊セクションの活動も〈ファーム〉によって統括される。この男も〈ファーム〉の諜報員。

CamScannerでスキャン

「様子うかがいですか？」

「ほう、テレパシーもできるのか。驚くべき男だ」と相変わらずサカナのように虚ろな目をして言い放つ。ガランとしたこの部屋は、ギャラホー厩舎小路の裏手にあり、[29]ふだんは現金取引のために使われる。彼らは〝ホワイト・ヴィジテーション〟からイヴェンターをここへ呼びだした。ロンドンにあっても、魔除けのペンタクルの描き方、呪文の唱え方、望みどおりの人物を連れてくる術、みな知っている連中である…テーブルの上は汚れたり白っぽくなったグラスがいっぱい。それらカラッポの、または焦げ茶や赤の飲み残し液の入ったグラスとともに、灰皿やら造花の切れ端やらも散らかっている。造花を毟ったり、元にもどしたり、謎めいた曲面や結ぼれをつくっていたのがサミーだった。半開きになった窓から汽車の煙が吹きこんでくるこの部屋の、壁面の一つはブランクで、長年映った影によって蝕まれている。食堂の鏡がときどき客の鏡像に蝕まれるのと同じだ。独特の性格を煮つめてきた面、老人の面と同じだ。

「だが、あんた、彼らとしゃべることはしないんだよな」ああ、サミーは実に巧妙だ、ソフトにソフトに迫ってくる——「真夜中に電信技師が、カチャカチャおしゃべりするみたいなのとは違うんだろ…」

「はい、そういうのとは」イヴェンターには事情がわかった。ペーター・ザクサを通して得た交信の書き起こしに、彼らはすべて眼を通している——のみならず、イヴェンター自身が読むことができるものには、すでに彼らの検閲が入っているのだ。それは別に、いまに始まったことではないのかも。…だったらここはじっくりと、受身になって、サミーの話からどんな形が浮かび上がるのか見ていこう。結局それは、アクロスティック[30]ができ

29 この厩舎小路はピンチョンのフィクション。525ページに出てくる〈第十二宮〉はここにあることになっている。

30 各行頭の文字を並

あがるのを見ているようなもので、何が浮かんでくるのか、最初からわかっていた——自分をロンドンに呼びだしても、天界の誰々と接触を図れという要求はない、ということは、彼らの関心はザクサ自身にあるのであって、自分を呼びだしたのは任務ではなく警告を与えるためだったか。自分の、陰に隠れた人生など曝すなと、抑えるべきは抑え込めと。情報(ビッツ)に、声のトーンと、選択されたフレーズが絡みあった全体が飛んできた。「……気がついたらアノ世だったというんじゃあの男もショックだったろう……ワタシもザクサの手合いには一人ふたり手を焼いた……少なくともキミを街頭(ストリート)に出さずに……きみがうまくやってくれるのを見ていよう、もちろんザクサもだがね、データに個性(パーソナリティ)が混じりこんでくると具合がよろしくないのでな、そこはうまく遮断してほしいのだよ……」

街頭(ストリート)に出さずに、か。ザクサがどのようにして命を落としたのかはみんな知っている。だが、なぜ彼がそこにいたのか、それまでどんな経緯があったのかを知るものはいない。しかも、サミーはイヴェンターに明白に告げている——それを訊いてはならない、と。

とすると、彼らはノラとも接触を図っているのか？　仮に類比(アナロジー)が成りたって、イヴェンターが何らかの意味でペーター・ザクサと同位に置かれるなら、ノラ・ドズスン＝トラックは、ザクサの愛した女、すなわちレニ・ペクラーと重なりあうということか？　ノラの煙ったい声も、あの手遣いも、みな遮断せよという指示なのか？　そしてイヴェンターは、これが続く間もしかしたら一生の間、きわめて洗練された軟禁状態に置かれるということか。自分が何を犯したか、その罪状も告げられないままに？

　ノラは今も〈冒険〉を続けている。石像のように髪をまとめた、最後の白き守護神の一人として、その〈ゼロのイデオロギー〉をしっかりと携え、あるいは暗黒の中、あるいは

べると、ちゃんと単語になっている詩文。

光輝の中へと最後の一歩を踏み出そうと。・・・だがレニは今どこにいる？　赤ん坊と、成熟することのない夢を抱えた放浪はレニをどこへみちびいた？　われわれがうっかり彼女を見失ってしまったのか——精一杯のケアをしていた（「愛していた」と言い張るものもいるだろう）にもかかわらず？　さもなくば誰かがある秘密の意図をもって——ザクサの死もその一部だ——連行（テイク）していったのか。彼女はみずからの翼でもうひとつの命も掃きだしたのか——夫のフランツではなく（フランツはまさにこのような連行を夢みて祈っていたわけだが、全然違う目的のために徴用されている）ペーター・ザクサ。この男はまた違った意味で受動的だった・・・どこかに手違いがあったのだろうか？〈かれら〉にも間違うことがありえるのか、そうでなければ・・・どうしてザクサがここでレニの終着点に飛びこんでいくのか（まさに、イヴェンターがノラの激烈な航跡に引きこまれてきたのと同じだ）、彼女が前に立つと、前方の視界が完全にふさがれてしまう。あれほどほっそりとした身体なのに、まるで樫の木のような恰幅と母性を獲得したかのよう・・・ふたりの時間の残骸だけが脇を流れ、背後で渦をまきながら、長い螺旋を描いて、ほこりのわき立つ不可視の世界へ落ちていく、最後の光粉が路上の石の上に降り掛かるところへ。・・・そうなのだ。ばからしくも、彼はフランツ・ペクラーの幻想を再現している。彼女の背中で丸くなって、とても小さくなって、連行される、エーテル[31]の風の中へ。その匂いは・・・いや、違う、生まれる直前に嗅いだあの匂いとは違う・・・その呼吸を彼が憶えてなどいようはずはない・・・ということは、それが今また匂うのであれば・・・それが意味するのは・・・ひょっとして・・・

警官隊の列に押しもどされていくデモ隊の中にあって、ペーター・ザクサは、もみくち

31　65ページにも出てきたが、天界の上層空間を満たす霊気を言う。

ゃにされながら地面を踏みしめようと足掻いている。もう抜けだすのは不可能だ…レニの表情がひっきりなしに動く、ハンブルク・フライヤー[32]の窓に押しつけられて——コンクリートの道路が、台座が、メルク博物館の塔が時速一〇〇マイル超のスピードで飛びさっていく。背景は完璧だ、褐色の霞み。これだけの速さになると、ポイントや路盤のほんのささいなミスが文字通りの命取りになる…レニのスカートの後ろがたくしあげられ、列車の座席のせいで赤くなったむきだしの腿の裏側が彼のほうに向けられる…そうなのだ…惨事が切迫している、誰が見ていようが、イエス。…「レニ、どこだ？」彼のすぐ脇にいたときから、まだ十秒もたっていない。前もって決めていた、できるだけ離れないようにしていようと。だがいまここは二種類の異なる動きが同時に進行している——見知らぬ人たちの偶然の入れ替えが、治安部隊との間にある明確な押し合いのラインを横切って、一定時間この状態のまま居つづけようとする人たちを、抑圧の力をも挫折させかねない愛に引き入れる動きが一方にある。と同時に、その愛の力を遠心方向へ引きちぎらんとする動きがある。これが見納めとなる顔々、肩越しに聞こえる無駄口、彼女が当然そこにいると思って気楽に吐いた、今となっては最後の言葉——「ヴァルターが今夜ワインを持ってくるかな？　僕は忘れてしまって——」個人的なジョークだ。忘れたのは、自分が青春期のような愛の混乱にあるから。幼いイルゼのことをどうしようもなく愛してしまった。社会から党派から顧客たちからの避難場所にイルゼをしてしまった…彼の正気の拠り所にすら。幼女のベッド脇にしばらくすわって、その寝姿を眺める。それが毎晩夜が更けてからの習慣になった。尻を突きだし、顔を枕にうずめた寝姿…なんと純粋で、正しいのだろう…ところが母親のほうは、このごろは夜中に歯ぎしりをする、顔をしかめ、

32　ベルリンとハンブルクを結ぶ、一九三三年開業の、当時世界最速の二両電車。

意味不明な寄言を発する――自分が、いつかどこかで、こんな言葉を流暢にしゃべるようになるとは考えたくもない。最近一週間ほどのことだ……政治のことは自分にわかるはずもないが、それでもレニがある閾値を越えたのはわかる。時の分岐点が来た、この先はもうついていけないかもしれない――

「きみは母親なのに……逮捕されたらあの子はどうなるんだ？」

「それこそ彼らの――ペーター、わからないの、彼らが欲しがってるのは、まさに、お乳の張ってる女なのよ。人間性なんかすっかり萎縮して、その陰でメエメエいってるような女がご所望なんです。どうしたらあの子に対して人間的になれるかが問題でしょ。母親じゃないでしょ、〝母親〟っていうのは政府の役職のカテゴリーよ。〈かれら〉のために仕える存在。〈かれら〉は魂を取り締まる官憲なんだから」彼女の顔が黒ずむ。口にした言葉が彼女をユダヤ化したのか。強く言ったからではなく、本心を口にしたせいで。真実を。彼女に信念をぶつけられると、ザクサには自分の人生の浅さが見えた。例の夜会の澱み、水を替えないバスタブのように何年たっても同じ顔ぶれ……ぬるま湯の歳月がどこまで続くのか……

「でもあなたを愛してる……」ザクサの汗ばんだ額に垂れた髪を、彼女はブラシで掻き上げる。窓際に体を横たえたふたり。ガラスを通してコンスタントに流れこむ街灯とネオンサインの光が、ふたりの肌に打ち寄せ、その丸みと陰影とを際立たせる――占星術師が描く月のスペクトルよりさらに冷たいスペクトル。……「無理して変わろうとしないで、ペーター。いまのあなたを愛してないなら、ここに来たりしないんだから」

彼女は彼をデモへ押しやったのか。彼女が彼の死神となったのか？　いま天界から聞か

CamScannerでスキャン

れるザクサの答えはノーだ。愛の中で、言葉の持ちうる意味など定めようがないと言って一蹴する。それでも彼が、ある具体的な理由のために、ストリートへ送り出されたという印象はぬぐえない・・・

イルゼはといえば、黒い瞳ですっかり彼を虜にしている。彼の名は言えるのだが、言わずに彼をじらしたり、わざと「ママ」と呼んでみたり。

「ノーノー。ママはあっち。ペーター、忘れた？　ペーターだよ」

「ママ」

レニは見ているだけだ。口元に、ほとんど「得意満面」な微笑を浮かべて——名前を混同される男が、どんな気持になり、どんな反応に駆り立てられるか彼女も知らないはずはない。もし彼に街頭デモに参加してほしくないのだったら、こういうとき、どうして何も言わずにいたのか？

「わたしのこと、ママと呼ばれなくてよかったわ」と、彼女は説明したかもしれない。だがその言い方はあまりにイデオロギー的であって、そう言われても彼の心は落ちつきようもない。そういう、スローガンをつなぎ合わせたような話をどうやって聞いていいのか彼にはわからなかった。革命者のハートで話を聞く術を学んではいなかったし、この先も、鬱々とした同志愛をかき集めて革命家の心を自分の中に起ちあげていくのは端的に言って無理だった。そんな時間は今はない。実のところ、息をひとつ吐くだけの時間しかない。

街頭デモの中で、恐怖に襲われた男の、荒々しい息をひとつだけ。昔ながらの勇敢なやり方で恐怖を克服する時間すらないのだ。だって、ほら、来た来た、警官のユッへ。はやくも警棒を頭の後ろに振りかざしている。自分の存在、自分の権力に、まるで気づいていな

い一人のノロマな共産主義者の頭の一角を彼の視界にとらえている・・・くっきりと曝された打ちごろの頭、今日初めてのビッグ・チャンス。タイミングもばっちりだ。腕にもその先の棍棒にもいい手応えを感じた、打ち下ろされた棍棒は、警官の脇に垂れる暇もなくふたたび張りつめた筋肉のカーブを描いて振り上げられ、最高点に、ポテンシャル・エネルギーの最大地点に達していた・・・はるか下方で、男のこめかみの灰色の静脈は、羊皮紙のようにペラペラになって、あまりにくっきり浮きたっている。それがピクリと動いた。これは最期から二つ目の脈拍・・・SHIT! おお――これはまた、なんと――

なんという美しさ!

夜の間に、サー・スティーヴンがカジノから消えた。

だがその前にスロースロップに告げていった――彼の勃起はフィッツモーリス・ハウスで非常な関心を呼んでいる、と。

朝になって、カッチェが駆けこんでくる。たいへんな形相だ。濡れた雌鶏以上の騒がしさで、サー・スティーヴンが消えたわ、いなくなったわとわめき立てる。なんだろう、みんな突然、おれに何かを言いまくってる、まだよく目も醒めていないのに。鎧戸と窓を打つ雨音、数々の月曜の朝、ムカムカする胃袋、さよならの言葉・・・雨にけぶる海に向けた目をしばたたく。灰色のマントにくるまれた水平線、雨が濡らした重々しい棕櫚の葉は、光を含んでグリーンがあざやかだ。シャンパンの酔いがまだ残っているせいだろうか――異様な十秒間、かれの視野には、目に見える世界に対する素朴な愛しか存在しない。

それから、思いとはうらはらに、景色に背を向け、カッチェとのプレイタイムに戻っていく・・・

CamScannerでスキャン

カッチェの顔の、髪の毛に劣らぬ白さ。雨の魔女。[33] 帽子の縁が、顔のまわりにシックなクリーム・グリーンの光輪を添えている。
「あの男、消えちゃったのか」。ここで鋭く反応して彼女を刺激する？　「そりゃ残念だが、しかし――どうだろ、ラッキーとも言えそうだ」
「彼のことはもう忘れて。スロースロップ、あなた、どこまで知ってるの？」
「〝忘れて〟ってどういうことだよ。きみはそうやって人をポイ捨てするのか？　それがきみの役目か」
「知りたい？」
彼は突っ立って口ひげをひねっている。「教えてくれ」
「あなたのせいよ。ほんとにもう、あの泥酔学生のゲームで、何から何まで台無しにしてくれたんだから」
「実際、何から、何まで、なんだい。教えてくれよ、カッチェ」
「彼から聞きだしたことを言いなさい」彼女が一歩近づいた。その両手の位置を見てスロースロップは、軍専属の柔道インストラクターを思いうかべた。ふと気がつくと、自分は裸だ。それに、ほらほら、スロースロップ、なにやら勃起も始まっているぞ。この勃起をノートに書き留め、理由を詮索する者はもういない……
「きみにジュードーの心得があるとは聞いてなかったな。オ、オ、オランダで活動していたときに教えられたのかな。ほうら、こういうささいなことから」子供っぽく三度ずつ音程を下げながら「化けの、皮が、はがれる……」
「ああああ――」激したカッチェが突っこんできた。頭をめがけて飛んできたチョップを

33　原文は rain-witch。グリムの語るゲルマンの神話伝承の世界では、天気の急変は魔女のせいとされ、ゆえに魔女は「天気猫」（Wetterkatze）などと呼ばれた（『GRC』）。

CamScannerでスキャン

かわしたスロースロップは、カッチェの腋の下に両腕を差しいれ（まるで人命救助の消防士）、ベッドの上に放り投げ、その上にのしかかろうとするところ、カッチェは足を上げスパイク・ヒールの先をかれの急所に向ける——のだが、だったらどうして最初から急所蹴りでこなかったのだ、このキック、タイミングもハズしてるし、さっきからずっとそんな感じじゃないか、こいつがもし本気で急所をとらえたら、スロースロップの股間の一部がそぎ落とされるに違いない……股間じゃなくて、スロースロップの脚をヒールでかすめることに狙いをつけたのか。彼は向き直って、カッチェの髪をつかみ腕を後ろにひねり上げ、ベッドに顔を押しつけた。スカートが尻のところまでめくれ上がり、スロースロップの目の下で太腿がくねって彼のペニスをビンビンにする。

「いいか、あま（カント）、おれを怒らせる真似するなよ。オンナ叩くくらい屁でもねえんだ。リヴィエラ海岸のジェイムズ・キャグニーとはオレのことだ[34]」

「殺してやる——」

「何を——何から、何まで、台無しにしたのか、ちゃんと聞かせてもらおう」

カッチェの首が伸びてスロースロップの上腕の肘に近いところにガブリ、歯が食いこんだ。ペントタール[35]の注射をさんざ打たれたところ。「オー、クソーッ」ひねり上げていた腕を離して下着をずりおろし、片方の尻肉をつかみ、後背位から刺しつらぬく。そうして下から指を這わせて乳首をはさみ、クリトリスを押しつけ、腿の内側に爪先を熊手のように走らせる。ミスター・テクニック参上——などと粋がるまもなくふたりともすでにイッちゃう寸前だ。最初にカッチェが枕に顔をうめて叫び出す。一、二秒後にスロースロップが続く。彼女の上に倒れ伏し、汗はタラタラ、息ハアハア。目の前のカッチェの顔が四分

34 キャグニーが女を虐待するシーンのひとつに、『民衆の敵』（一九三一）の朝食シーンがあって、そこではメイ・クラークの顔面にグレープフルーツを押しつけた。

35 麻酔および自白剤

ろうだけ働いている。機、機ってわけでもない。この顔には顔がない。恐るべき〈ノーフェイス〉、抽象の彼方にあって手が届かない。眼窩の凹みはあっても、そこに変化する眼はなく、頬の曲線、凸状の口のラインも匿名的。これは〈存在の別の様式〉に属する無鼻のマスクだ。カッチェという存在の、生命に欠けたノンフェイス、この顔をしたカッチェしかスロースロップは本当には知らない、この先も記憶に残るのはこの顔だけだろう。

「おい、カッチェ」とぶっきらぼうに。

「シン」彼女の口から漏れ聞こえるのは、さっきの憎しみの残響だけ。所詮ふたりは恋人ではない。陽光の降り注ぐなか、ボイル地[36]のパラシュートでゆるやかに流され、手に手をとって牧草地に降り立つなんてことにはならないのだ、驚いた？

カッチェが向こうへ動いた。押しだされたペニスがブラリ、部屋の冷気にさらされる。

「ねえ、スロースロップ、ロンドンってどんなようす？　ロケットが落ちてくるとき」

「ああん？」射精後はゴロリ横になって煙草をふかし、食べたい物を考えるのがスロースロップは好きだ。「ああ、ロケットは、落ちてきてから、そうなんだ、落ちたあとになって初めて落ちたとわかるんだ。当たってなけりゃ大丈夫、次の一発まではね。爆音が聞こえたら、生きのびたんだとわかる」

「爆音で、生きていることを確かめるの」

「そんなところさ」カッチェは立ちあがり、下着を引きあげスカートを下ろし、鏡のそばで髪の乱れを直しながら、「境界層温度について質問します。服を着ながら答えなさい」

「境界層温度がT_e、なんだよ急に、燃焼終了まで指数関数的に上昇、それが水平距離七〇マイル付近、そこから急上昇し一二〇〇度のところで尖点をなし、その点から若干下降、

36　木綿の柔かい生地としてカーテン地などに使われる。

一〇五〇度まで落ちて、これが大気圏脱出まで続く。さらに一〇八〇度の尖点ができて、再突入まではほぼ一定」云々かんぬん。このシーンをつないで流れるBGMとしては、木琴の音が弾む懐メロ・ナンバーがふさわしい。ちょっと斜に構えた、でも穏やかにコメントするような曲想の、たとえば「スクール・デイズ、スクール・デイズ」でもいいし、「乗りなよジョセフィン、僕の空飛ぶ機械に」でも「オールド・タウンはホット・タイム」[*37]でも合うだろう――だがその音楽もスローになってしぼんでいき、場面は階下のガラス張りポーチの中。スロースロップとカッチェが差し向かいにすわり、隅に数人の楽器弾きが、首を振って文句たらたら、こんな具合じゃオーナーのセザール・フレボトモにまた演奏料を踏み倒されてしまう、どうしたらいいんだと画策している。ひどいギグもあったもんだ。……雨はガラスをたたき、戸外のレモンとマートルの木が風に揺れる。クロワッサン、ストロベリー・ジャム、本物バター、本物コーヒー。カッチェの出した課題は――壁温とヌセルトの熱情伝導係数[*38]からおよその飛行曲線を割りだしなさい。ヒントとして与えてもらったレイノルズ数[*39]をもとに、頭の中で計算する……運動方程式、減衰の瞬間、復元の瞬間……燃焼終結（ブレンシュルッス）の計算法にはIG方式と無線方式があって……この方程式で、これを変換すると……

「こんどは噴射拡散角度ね。わたしが高度を言いますから、角度を答えて」

「なあ、カッチェ、ついでに角度も言ってみてよ」

以前カッチェは、発射台を離れるロケットの炎を見て、求愛中の孔雀を思った。炎の中に緋色、オレンジ、玉虫色の変化を見せるグリーンが、孔雀の羽をひろげた姿に見えてうれしくなった……その場にいたドイツ人――SSも混じっていた――もロケットのことを

37 どれも二十世紀初頭にヒットした軽快な流行歌。

38 熱伝導の「ヌセルト数」とは、流体の熱移動を対流を含めて考えるときに使われる。ただし、ヴァイキングとバンタムとペンギンのすべての版で、「熱伝導 *heat transfer*」ではなく、*heart transfer* となっているので、「熱情伝導」と訳した。

「孔雀」と呼んだ。「孔雀2号」[40]と。愛の儀式をプログラムされた「孔雀」の上昇。だが〈ブレンシュルッス〉でそれは終える。ロケットの〈男〉に対応する純然たる〈女〉——標的の中央をなす「ポイント・ゼロ」——が屈服したのだ。残りの部分はすべて弾道学の法則にしたがう。もはや〈ロケット〉は無力、そこは工学の企図をこえた、別の力の支配下にある。

その巨大な真空中の弧が、この地球を駆動し彼女自身も（彼女を利用する者たちも）駆動する、ある秘められた性的欲望の明確な表現になっていることを、カッチェは理解していた。頂点を通過してあとは下降する、突入する、燃えながら、最終的なオルガズムに向かっていく……こんなこと、スロースロップに教えられるはずもない。

すわっているふたりの耳に聞こえる風と雨の音、ほとんどみぞれの音。冬が集まり、息づき、深まる。どこかの部屋の奥でルーレットの玉がコロコロ転がる。彼女は逃げの姿勢だ。なぜ？　彼がふたたび接近しすぎたから？　スロースロップは記憶をたどる、カッチェはいつもこんなふうにしゃべっていたろうか。こんな、ビリヤードのドローショットみたいに、縁にぶつけて跳ねかえってからおれに触れるなんて。いいだろう、ここで質問作戦といこうか。彼は暗闇の中で陰謀への対抗を開始する。手あたりしだいにドアをこじあけ、何がとび出すか、さあお立ち会い……

黒ずんだ玄武岩が海から突きでている。岬に立つシャトーに蒸気の薄膜がかかっている光景は、印刷の粗いむかしの絵ハガキそのものだ。スロースロップはカッチェの手にふれ、素肌の腕に指を這わせる。

「えんん？」

39　管の径、流体の密度と粘性が与えられているとき、流体の速度の計算に用いられる。

40　ドイツ語で「孔雀 Pfau」と「V」とは発音がほぼ同じ。つまり「V 2」。

CamScannerでスキャン

「上に行こう」とスロースロップ。

カッチェはためらったのだろうか。ほんの一瞬のしぐさ、スロースロップはキャッチできなかった。「いままでずっと何の話をしていたのか言ってみて」

「A4ロケットのことだろ」

彼を見つめ続けている。最初は吹きだすのかと思った。次に、泣きだすのでは、という気がした。何なんだ、これは。「スロースロップ。あなた、わたしを求めてない。あなたに関して彼らが調べようとしているものはわたしを求めているにしても、それはあなたじゃないの。A4がロンドンを求めているのでないのと同じよ。でも彼らだってきっとわかってないのよ…別の自己（アザー・セルヴズ）――あなたにも〈ロケット〉にも別の自己があるってことを、あなた同様わかっていない。今いってること、通じなくてもいいから、憶えておいて。わたしがあなたにしてあげられるのはそれだけよ」

ふたたび上階、カッチェの部屋――ペニス、ヴァギナ、窓を打つ月曜の雨。…午前の残りと午後の早い時間、スロースロップは勉強だ。シラー教授の再生式冷却、ヴァーグナーの発火方程式、パウアーとベックの排気ガスならびに燃焼効率。そしてあられもない姿をさらす青焼きの設計図。正午に雨があがった。カッチェは私用で外出。スロースロップは階下のバーで数時間すごす。眼が合うとウェイターはニヤリ笑ってシャンパンの罎を差しあげ、いかがですかと振ってみせる――「メルシ、ノン（けっこうです）」いま、あのペーネミュンデ[*41]の組織図を暗記しているところなのだ。

どんよりした空から光がこぼれてきた。カッチェと一緒に外へ出る、一日の終わりの遊歩道の散策。握ったカッチェの素手がひんやり冷たい。細身の黒のコートを着たカッチェ

41 バルト海のウーゼドム島にあるこの村で、V1およびV2の開発が行われた。その詳細は、この小説の主要なソース

は実物よりさらに長身に見える。言葉はない。長いこと押し黙った彼女の存在は、希薄化してほとんど霧のよう。・・・立ち止まって手すりにもたれる。真冬の海をスローストップは眺める。カッチェが眺めているのは何だろう。背後にヌッと立つ、目に見えぬ冷え冷えとしたカジノだろうか。上空を果てしなく無色の雲が滑ってゆく。

「きみの姿を見かけたときのことを考えてたんだ。あの日の午後」具体的に切り出せない。だがヒムラー遊戯室でのことだとカッチェは察知し、鋭く振り返って、「わたしも、同じときのこと考えてた」

ふたりの吐く息がちぎれ、霊(ファントム)になって海へ舞っていく。きょうのカッチェの髪型は高く上げたポンパドール。ブロンドの眉は毛抜きで翼のかたちに整えて、眼のまわりを黒で縁どり、染めそこねた睫毛が数本だけ金色のままはみ出ている。雲を抜けて斜めに差しこむ光に照らされ色を奪いとられたその顔は、まるでパスポートの、フォーマルな白黒写真そのものだ・・・

「あの時のきみは遠かった、手を伸ばしても届かなかった・・・」

その時。カッチェの顔に憐憫に似た表情が浮かんで消える。そして口からささやき声。それは、突然舞いこんだ電報のような、命取り(リーサル)な輝きを帯びている。「きっとわかる日が来るわよ。どこか彼らが爆撃した街で、彼らの河か森の近くで、雨の日かもしれないけれど、きっとあなたに訪れるわ。ヒムラー遊戯室と、わたしの穿いていたスカート[43]の記憶から、理解が踊りはじめるでしょう。あのときも今も、言えずにいることが、わたしの声になってあなたに聞こえてくるでしょう」。なんなんだ、この女の一瞬の笑みは。あっという間に消えて、運のない、未来のないマスクに戻る——望ましい、容易な、初期設定のカ

[illegible]の「V2」に書かれている。物語の「現在」は確定しがたいが、V2の攻撃はまだ盛んに続いている時期で、したがって、カッチェが教えている情報は、スパイ活動——または陣営を越えた〈かれら〉の癒着——によってしか入手できないはずのもの。

42 虹のストライプのダーンドル・スカートだった。397ページ参照。

ッチェ顔に。

柵のない遊歩道が湾曲するところ、カールした鉄の骨組みのベンチが並んでいる周りにふたりは立っている。そこは切り立った堤にしてあるが、眠っていない人間なら、こんな高さにする必要はあるまい。そこに立てば眼がくらみ、海に吸いこまれ、何もかも終わりにできそうだ。一段と冷えこんできた。ふたりとも長いこと直立していられない。数秒おきに、どちらかがぐらつき、足場を確かめなおす。手を伸ばしカッチェのコートの襟を立て、両の掌で頬を包む……肌の色を取りもどしたくてそうしているのか？　目線を下げて彼女の眼を覗きこむ。なぜなんだ、みるみる涙が溢れてくる。ぬれた睫毛からマスカラがほんのり黒みがかった渦巻きをなして流れだす……それぞれの眼窩の中で震えるふたつの半透明の石……

波が浜辺の小石にぶつかり引き寄せる。波止場の波もすでに風に砕けだした。白波がまぶしすぎる。くすんだ色の空以外からも光を集めているのだろう。またもや姿を現したのか、〈異なる世界（アザー・ワールド）〉の不変の光景が――こんな場面で、またこの恐怖にさらされなくてはならないのかよ――この木立を見ろよ、長い葉先のひとつひとつが垂れたり、ピンと立ったり、空に目も眩むようなドライポイント描法の線を刻んでいる。どの点の位置も、あまりに完璧……

カッチェが太腿を動かし尻の突部でコート越しに彼をこすった――こうすることでまだ彼の気を引き留めることができるとでも？――息は白いスカーフのよう、涙の跡は冬に照らされ氷のよう、女の体は温かくても、それだけでは不充分。充分だったためしはない。彼にはちゃんとわかっている、この女はだいぶ前からここを去るつもりだったと。眼下に

揺れる白波が感じさせる風ゆえか、舗道の傾斜のせいなのか、ふたりは互いを抱き寄せる。カッチェの眼にキスをしたスロースロップは、おやおや、またも股間がクキンクキン、古き良き、いや良くも悪しくも昔ながらの性欲のうずきに捕まった。

海辺で始まったクラリネットのソロがコミカルなメロディを聞かせる。数小節後からギターとマンドリンが加わる。浜辺に群れた人たちの眼が輝く。そのサウンドにカッチェの心も少し軽くなったようだ。スロースロップにはまだ、ヨーロッパ人がクラリネットに対して示す反応が身についていない。これを聞くと、サーカスの道化ではなく、ベニー・グッドマン[43]を思い浮かべてしまうのだ——でも、待てよ・・・近づいてくる音、これはカズーの軍楽隊ではないのか。すげえ数のカズーだ！ カズーの軍楽隊だ！

夜遅く部屋に戻ったカッチェは、厚い絹地の赤いガウン。背後に、どのくらいの距離だろう、長い蠟燭が二本燃えている。何かが変わった。セックスが終わると彼女は片肘をついて彼のほうを見つめる。深い息に乳房がうねる。ダークな乳首は白い海に浮かぶブイのようだ。だが彼女の眼には緑青がふいて、いつも見慣れた引きこもりを、仄暗い心の奥への優美な退行を、最後にもう一度見たいと思っても見られない。

「カッチェ」

「シーッ」夢にまどろむフィンガーネイルの一搔きが、朝をわたる——コート・ダジュールを過ぎてイタリアへ。スロースロップは歌がほしくなる。歌おうとする。しかし今の気持ちに合う歌が思いつかない。腕を伸ばし蠟燭の芯をつまんで火を消す。その前に指を濡らさなかった。焦がした指先にカッチェのキスが余計にしみる。女の腕の中で眠りに落ちたスロースロップ。目覚めたら彼女は跡形なく消えていた。一度も袖を通したことのない

43 それまで限られた聴衆を相手に、基本的に黒人の音楽として発展してきたジャズは、一九三五〜三六年（スロースロップの青春時代）に白人のクラリネット奏者ベニー・グッドマンの率いる楽団の人気によって、ポップなダンス・ミュージックに生まれ変わり、以後「スイング」の大流行へとつながる。

服の大半を衣装簞笥に残したまま。彼の指先に火ぶくれと、わずかな蠟を残したまま。何口か吸って乱暴にもみ消した煙草が一本、鈎針形に横たわっている。……彼女が煙草を吸い残したことはなかった。すわって一本ふかしながら、おれの寝姿を見つめていたのか……そのとき急に何かが（それが何だったのかこの先たずねる機会はないだろう）引き金となって、吸い終えることを彼女にゆるさなくなったんだ。曲がったその一本を伸ばして火をつける。最後まで吸い終えよう——まだ戦争は続くんだ、煙草を無駄にはできないぜ……

□□□□□□□

「われわれは通常、行動する際に、反応を個別的に返してはいない。そうではなく、複数の刺激に対し複合的に反応することで、刻々と変化する環境の実情に対応している。ところが老齢者にあっては、」これはパヴロフ八十三歳のときの講義、「これとは全くしくみが異なり、単一の刺激にのみ神経が集中する。それに随伴したり共時的に届いている刺激に対し、われわれ老人はこれを無関係なものとして排除してしまう。環境の現状に対して補完的な作用を果たしていないと見なして〝負の誘導（ネガティブ・インダクション）〟を発動してしまうのである。

かくして「けっして他人に見せることなくポインツマンがしたためた詩文より」

　テーブルの花に手を伸ばしつつ
私の部屋の冷えたモザイク[*1]が
開花の、刺激の、欲求のまわりを囲みて
緩慢たる抑止の消却を始めるを知る
赤々とした拡がりが急速にうちしぼむ

1　パヴロフが考えていた大脳皮質のしくみの大枠については、111ページ参照。

周囲の物体から吸い寄せられ、一点に凝集し
（閃光には至らぬが）ひとつの炎に集中する
残りの物は、部屋のどんよりとした夕刻の
眠気のなか――本も、器具も
老人の服も、古ぼけたゴロドキ[2]の棒も
存在はおぼろ気に認められてもその魂(スピリッツ)は
私の中に保持されるべき場所の記憶は
消えるのだ、この瞬間、凝集した炎によって
儚く待つ花へこの手が伸びるとき・・・
何か――ペンなのか空(から)のグラスなのか――
いまあった場所から落ちて、私の記憶の空白の縁の向こうへ
（おそらくは）転がり行く・・・
だがこれは、「老碌ゆえの散逸」にあらず
むしろ「集中」だ、若者であれば
楽々と笑いながら避けられること
彼らの世界はつまらぬものがひとつ欠けても
補って余りある豊潤の中にある――
ところが、ここ八十三歳の地にあって、皮質(コーテックス)は弛緩し
抑制の節くれ立った指にひねりつぶされ
わが興奮の諸過程は灰と消えて

2 野球のバット大の重い棒を（ロケットのように）投げて、敵陣に並べた木のブロックを弾きだすロシアのゲーム。

画全体が干上がったに見える今、この男だけは裕福な雰囲気を立ちのぼらせているのだ。

集まった面々の吠える声が一段落したところで、なだめるようなポインツマンの発言――

「危険はない」

「危険はない?」アーロン・スロースターのヒステリックな声に続いて、部屋の中はふたたび呟きとうなり声で満たされる。

「スロースロップのやつに、ドズスン＝トラックも、あの女も、一日で壊されたんですぞ!」

「崩壊だよ、これ以上支えきれんでしょう、ポインツマン!」

「サー・スティーヴンの帰国以来、フィッツモーリス・ハウスは計画から手を引いてしまったんだ。ダンカン・サンディス[*5]からも、嫌味な問い合わせがきているし――」

「チャーチル首相の娘婿殿からですよ、ポインツマン。これは、どう考えたってまずいでしょうが」

「すでにもう赤字運営になってるわけで――」

「資金なんてものは」もし君が知性を失わざれば[*6]、「調達可能なものだし、じきにきっと入ってくる、深刻な資金難に陥る前に打開できる。サー・スティーヴンは〝壊れて〟などいないし、フィッツモーリス・ハウスで元気に勤務してる。どなたでも確認したければ、そうなさい、ほんとにいい顔をしているから。ミス・ボルヘジアス[*7]にしても、現行プログラムをバリバリこなしているしね。ミスター・ダンカン・サンディスから上がってきた疑念にも、ひとつ残らず返答した。何より心強いのは、われわれが一九四六年度も充分活動できるだけの予算をすでに得ているということだ――資金難が現実に頭をもたげる事態に

5 戦時連立政府の要職にあった彼は、「独軍V兵器防衛委員会」のトップも併任していた。

6 ラドヤード・キップリングが戦場の息子に宛てた詩"If"の冒頭の句。

7 この姓は、タコに襲われたシーンで、カッチェの腕輪に刻まれていた。

はなりませんて」
「また例の、利害を共にする団体からの寄付ですかね？」とロッロ・グロースト。
「そういえば、一昨日はインペリアル・ケミカル社[*8]のクライヴ・モスムーン氏[*9]と密談していたようだが」と、エドウィン・トリークルが言及する、「クライヴとはマンチェスターの大学時代、一緒に有機化学の授業に出た仲でね。ICIもウチの、なんというか、スポンサーになったのかな、ポインツマン？」
「いや」スムーズな即答、「モスムーン氏の最近の仕事場はマリット・ストリート[*10]とは別のようだ。残念ながら、〈黒の軍団（シュヴァルツコマンド）〉に関する協力関係以上に不吉なものが始まる気配はないようですな」
「とんだお笑いぐさだな。クライヴはICIにいて、ポリマーに関するなんらかの研究を担当しているとくらい、私の耳にも入ってるんだ」
にらみ合うふたり。一方が嘘かハッタリをかましている。さもなくば両人とも。どんなケースも考えられるが、ともあれ、分があるのはポインツマンのほうだろう。みずからのプログラムの廃止という可能性に直面して彼は相当の〈智慧〉をつけた。自然界には奥深い生の力が働いていようとも、官僚世界にそれに相当するものはない。神秘的な力などはなくて、すべて煎じつめれば、男たちの個々の欲望にゆきつく。もちろん女たちもだ——彼女らのかわいい脳タリンの頭に祝福あれ。この世界では、より強い欲望を持つことが生存につながる。すなわち、〈制度（システム）〉を他人よりよく理解して、その使い方に通じること。これは仕事である、たいへんな仕事である。超常現象などにビクついている暇はないのだ——不安は意志を砕き、心を女のように脆弱化する。不安にかまけるか、それを克服す

8　「インペリアル・ケミカル・インダストリーズ」（ICI）は、大英帝国を代表する化学合成薬品企業。

9　〝海賊〟プレンティスを愛人にしたスコーピアの夫。

10　ロンドン大学の研究所が並ぶ界隈。

るか二つにひとつだ。「わたしとしても望んでるんだよ、ICIがどうにかして出資を検討してくれないかとね」といってポインツマンは微笑を浮かべる。

「弱い、弱い」若輩のグロースト博士がつぶやいた。

「ほんとに何をいってるんだ」アーロン・スロースターががなる、「あのジイサンが悪いタイミングで機嫌を損ねれば、それだけで研究全体が墜落するんですぞ」

「ブディング准将なら大丈夫だ。一度コミットしたら後へは退かん方だからして」ポインツマンは落ちつき払っている、「准将とはうまいこと取引が成り立っている。詳細は重要ではないが」

ポインツマンが場をしきれば、詳細など、いつも問題ではない。トリークルの挑戦はうまくかわされ、議事はモスムーン問題にすり替わった。ロッロ・グローストが不満をこぼしつつも、正面から渡り合うところまでには至らず、結果的に自由なディスカッションが行なわれたという印象を与えただけ。スロースターのヒステリックな物言いも、他の面々の注意を逸らすだけの結果に終わった。…というわけで会議はお開きとなり、謀り事の仲間たちはコーヒーへ、妻のもとへ、ウィスキー、睡眠、無関心へと散っていく。ウェブリー・シルバーネイルは後に残って、視聴覚装置を確保し、複数の灰皿を自分のまわりに寄せ集める。犬のヴァーニャの精神状態は今は平常に復帰（もっとも、臭化カリウム[11]の投与によって腎臓はだいぶ弱ったろう）。実験用スタンドへの縛りを解かれた短い間、ヴァーニャは鼻をクンクンさせてラットのイリアの檻に近づき、イリアは電気刺激が走る金網に鼻づらを押しつける。二匹はそのまま鼻と鼻を、命と命をくっつけている。…シルバーネイルは鉤型の吸いさしをふかし、16ミリのプロジェクターを引きずって、長い檻の列

11 鎮静剤・抗てんかん剤として早くから知られ、パヴロフも著書で犬に対する使用を薦めている。

の前を通り、蛍光灯の下でネズミの漕ぐ回転車輪がストロボ効果を見せるのをあとに、ARFを出てゆく。オラオラ、気をつけな、看守のヤローがやってきたぜ。ああ、やつなら大丈夫さ。ルーイ、あいつはいいやつだ。みんなが笑う。だったらここで何してるんだ？　長くて白い光が頭上でジージー鳴る。グレイのスモック姿の助手たちが雑談し、煙草を吸いながら、日常業務をこなしている。気いつけな、レフティ、あいつらオマエに眼をつけるぜ。見てろ、と言ってマウスのアレクセイが笑う、あいつがおれをつまみ上げたらその手のひらに糞こいてやる！　そいつぁ感心しねえなあ、スラッグのこと忘れたか、あいつそれやってフライにされちまったろ、迷路を走りながら垂れちまってさ、ほんの一回のことでよ。百ボルトだぜ。それが〝事故〟だってさ。そうほざいてた。ああ、事故もいいとこさ。

　頭上から、ドイツ風のカメラ・アングルで見たとしたら――ウェブリー・シルバーネイルは思う――この実験室にしたってそれ全体が迷路だろう…テーブルとキャビネットの通路をかけまわっている研究者も、ラットやマウスそっくりだ。丸めた餌のかわりに、実験の成功が彼らを発奮させる。そのようすを、上から観察しているのは誰だ？　研究者の反応を誰がいったい書き留めているんだ？　檻の中の小動物が交尾し、授乳し、灰色のカドリーユの踊りを通して意志伝達するのを聞いているのは誰だ？　ほら、今、彼らが歌いだす…ネズミたちが囲いを出て、ウェブリー・シルバーネイルのサイズになって（実験室の人間は誰ひとり気づいてはいないようだが）、コンガを叩くリズムに合わせ、彼と一緒に踊り出す。実験器具をあしらった長い通路を踊りぬける。オーケストラの奏でる、ごきげんなビギンのメロディは――

《パヴロヴィア》〔ビギン〕

パヴロフ・ランドは春だった
おれは迷路を何日も
出口求めてさまよった
消毒スプレー、そよぐなか
袋小路で出会ったおまえも
おれに劣らずめいってた
鼻と鼻を寄せ合った
ハートが空へ飛んでった

おまえとふたり、道を見いだし
落ちてた餌を半分こ
カフェへディナーに出かけたみたいに
おまえを見つめた、しあわせだった・・・

パヴロフ・ランドに秋が来て
いつしかおれはまた独り
数ミリボルトの悲しみが

骨とニューロンに流れてく
名前も知らないおまえとの
想い出だけにすがって生きる
北風わたるパヴロフ・ランドにゃ
迷路とゲームしかありゃしない・・・

ネズミたちが流麗に踊り交わる。ラットとマウスが輪になって、しっぽを巻きしっぽを伸ばして菊の花、燃える太陽のパターンを描く。フィナーレは全員で描く巨大なマウス。描きだされた眼を見つめほほえみながらシルバーネイルは、壮大なネズミのコーラスとオーケストラが響きわたるなか、両腕をV字に差し上げてエンディングの音を支えている。

最近のPWD[12]の宣伝パンフレットのヒット作に、ドイツ軍民間選抜隊員(フォルクスグレナディア)に呼びかけた「V2を起たせよ(ゼッツ・ファウ・ツヴァイ・アイン)」[13]というのがある。脚註の説明によれば、"V2"とは、両腕をV字に上げた「名誉ある降伏」のことなのだそうだ。その際に「コウフクします／アイ・サレンダー」と言うようにと、指示も書いているのだが、さて、今のウェブリーのVは、勝利のVなのか、降伏のVなのか？

ネズミたちの自由も一瞬でおしまい。ウェブリーもただの客演にすぎない。一同、檻の中へ。理性化された死——みずからの死すべき身を意識する唯一の動物に仕える死へと——戻っていく。・・・「自由にしてあげたいのだが、方法がわからない。ただ檻の外も不自由なんだよ。動物も植物も鉱物も、一部の人間もだ、毎日分解され組み立てなおされている。一握りのエリートを守るために。まっさきに自由を口にするのがその連中だが、そ

12 英米合同のヘッドクォーターSHAEFに属する「心理作戦部局 Psychological Warfare Division」。

13 「フォルクスグレナディア」とは、戦争末期に編成された主に少年と老人から成る隊。"SETZT V2 EIN!"というスローガンはおそらくピンチョンの創作で、「V2を挿入せよ」という意味にとれる。

の実譜よりも不自由なのがやつらさ。いつかはましな状況になるという希望すら、与えてあげることはできなさそうだ。〈かれら〉が死のビジネスから自由になるなどとは想像しがたい。自分らのテクノロジーが入念に作りあげた恐怖をなくし、他のあらゆる生命体を無慈悲に使いまくるのをやめ、みずからに取り憑いた魔物を許容範囲に収めておくというのはね。きみたちのように、ただこの世でシンプルに生きるようになるのは無理らしいのだ……」客演スターは廊下を歩みさっていく。

"ホワイト・ヴィジテーション"の、スプリンクラーのような灯りは今は消えている。今夜の空は深いブルー、海軍の大外套のような青さを背にした雲の白さが目を見張らせる。風は肌にきつい。プディング准将は老体を震わせ、裏階段から忍び出る。星空の下、ひっそりとしたオレンジの温室を抜け、レース姿の伊達男、馬、目の代わりに堅ゆで卵をはめた婦人像などが掛かった回廊（ギャラリー）を通り、小さな中二階（他人に見られる危険はここが最大……）から物置ルームへ。そこに置かれたガラクタの山と形なき暗闇は、子供からこれだけ隔たった老人にも、寒気をもよおすに充分だ。ふたたび戸外へ、金属製の階段を降りながら彼は、誰にも聞かれないよう秘かに勇気づけの歌をうたう——

あんたの汚れた娘さん
洗った水でわたしを洗って——
漆喰の壁より白くなれるように

どうにかD翼棟に到達。三〇年代に収監された狂人たちが居残っているこの棟で、夜間の

見回りがデイリー・ヘラルドの新聞紙をつっかぶって寝入っている。粗野ななりをした男だが、社説を読んでいたと見える。おいおい、これは来るべき選挙[14]の成りゆきを予兆してはいないかい…？

だが老准将の通行には許可せよとの指示が出ている。つま先立ちして、荒い息で、通りぬける。痰が喉にからみつく。この齢になると、痰は日々の友、老人たちはみんなして痰を培養している。痰の出現形態は千変万化、テーブルクロスの上に不意に飛び降りて友をびっくりさせたかと思うと、夜、気管にへばりついてそこをベンチュリ管のように細く絞り込み、彼の夢の縁に恐怖の影をもたらして、目覚めさせる——後生だ、やめてくれと咳き込みながら…

どこからか、遠すぎてわからない檻の中から誰かが詠じる——「われは聖なるメタトロン[15]なり、秘密の護り手、玉座の番人…」この建物では、ホイッグ党時代の過剰な装飾は御法度。削りおとされるか塗りこめられる。収容者の不安をかき立てぬよう、すべては中間色だ。カーテン類も目にやさしく、壁に掛かった複製画も印象派でまとめている。元のままなのは、白熱電球の光を水のようにギラリと反射している大理石の床だけだ。目的地に到達するまで、半ダースほどのオフィス、または控えの間と、掛け合わねばならない。始まってまだ二週間とたっていないが、この巡礼にはつねに儀式めいた、繰り返される手順がある。それぞれの部屋にひとつずつ、気分のよくないものに出くわすのだ。そのテストを通過しなくてはならない[16]。これもまたボインツマンの仕業か、という考えがよぎる。そうだ、そうにきまっている…あののろくでなしの若造はどうやって見破ったのだ？　わしが寝言をいってそれを聞かれてしまったか？　夜中に真実吐露の血清をたずさえて忍び

14　欧州終戦後七月に行われる英国総選挙では、労働党が圧勝する。「デイリー・ヘラルド」は労働党よりの日刊新聞。

15　ヤハウェの神を護る最高位の大天使。

16　カバラ（ユダヤ神秘主義思想）によれば、魂が神のおわす「メルカバー Merkabah」へ上っていく際に「篤信」「純潔」「誠実」など、六つのテストを受けなくてはならない。ここではそのパロディが、戦場の糞泥にまみれた“地獄”へ降りていくブディングの前に展開される。

こむ連中がいたのか――そんな考えがくっきりと浮かんだとき、プディング准将は今夜の最初のテストにたどりついた。第一の部屋には、皮下注射の器具が一式。テーブルに置かれたそれは透き通り、光輝き、周りは焦点がぼけた感じに見える。そうだ、朝はいつも、夢の後、ぐったりして起きられなかった。いやあれは夢なのかな、わしがしゃべっていたのは。…だが、准将には誰かがそこにいて聞いていたという以上の記憶はない。…からだが震えている、顔は漆喰の壁より白い…

第二の控室には、空の赤いコーヒー缶だ。ブランド名はサヴァリン。これにはピンと来た。つまりわしがセヴェリン[*17]というわけだ。なんという汚らわしい当てつけをするやつだ。…だがこれは単なる悪意の語呂合わせではない。高級にしろ低俗にしろ、ありふれた一種の共感呪術なのだ（たとえば、正常な神経の爆破工作員なら、食器洗いのさい、カップとカップの間で、あるいはガラスのコップと皿の間で、スプーンを洗ったりしない、時限装置の振動板（トレンブラー）を想起してしまうから…だって左右の破裂物にはさまって、トレンブラーの舌を、自分の指で宙づりにしていることに突然気づくのは怖いです）。…第三の部屋にはファイル・キャビネットの引き出しが半開きになって、カルテの束がのぞいていたほか、読みかけのクラフト＝エビングの書物[*18]も置いてある。第四の部屋には人の髑髏。老将の胸が高鳴る。第五の部屋にはお仕置き用のマラッカ・ステッキ。わしは祖国のために何度戦争に行ったことか…誰のために危険な目に遭ってきたか、それでもまだ償いが足りないのか。…どうして年寄りを苦しめるんだ。第六の部屋には、白いシーツの畝の上、ボロボロに殺られた英国歩兵が頭上からぶら下がっている。その戦闘服には、マキシム機関銃で撃たれた穴がいくつも開き、縁がぐるりと黒く焼け焦げていて、マスカラを塗った

17 レオポルド・フォン・ザッハー＝マゾッホ『毛皮のヴィーナス』（一八七〇）の主人公。

18 サディズムの命名者でもあるリヒャルト・フォン・クラフト＝エビングの主著は『性的精神病質』（一八八六）。

クレオ・ド・メロードの目を思わせる。[19] 左目は射ち抜かれ、死体は悪臭を放ちはじめている……おっとこれは……ノー！　一着のオーバー、ただ誰かの古いオーバーが壁のフックにかかっているだけのことなのに……この老人は臭覚機能を失ってしまったのか？　毒ガスだ。見たくない夢が侵入するときのように、窒息しそうになるときのように、低音のうなりとともに彼の脳裏にマスタード・ガスが噴きこんできた。独軍側のマシンガンがリズミカルに「ダム・ディディ・ダダ」とうたっている。すると英国が「ダムダム」と応じる。夜がギュッと締まる。死体に巻きつき締め上げる。例の時刻までもうすぐだ。

第七の小部屋の前、黒い樫材にとまどい気味にノックする。錠前は電気仕掛け、リモコンで一気に開いた余韻があとに続く。老将は足を踏み入れ、後ろ手にドアを閉じる。小部屋はうす暗く、奥のすみに一本だけ香の匂いをたてながら燃えている蠟燭が、遥か遠方に感じられる。背の高い十八世紀風アダム・チェア[20]に腰かけて彼女は老将を待っていた。白い肉体、黒い制服——ユニフォーム・オブ・ザ・ナイト。老将はひざまずいた。

「ドミナ・ノクトゥルナ[21]……光り輝く母にして最後の恋人……アーネスト・プディングが、仰せにしたがい参上つかまつりました」

戦時中の、女の顔の焦点といえば口である。口紅が、タフな女たち——残念ながらオツムのほうはしばしば浅薄——の口を血のように彩っている。目はといえば、天候と涙のなすがままに萎れてしまった。空にも海にもいたるところ死が潜み、偵察飛行写真に映ったシミや汚れにも死がうごめいているという昨今、たいていの女の眼は物を見る機能しか果たしていない。だがプディングは別の時代の人間だ。そうした細部についても、ポインツマンは念入りに事を運ぶのを忘れない。老将の「レディー」は虚栄の鏡の前で丸一時間、

19　香料の記憶にいつまでも生々しい、ベルギーでの第一次大戦の塹壕戦のイメージ（150ページ注**21**参照）。クレオ・ド・メロードは、ベルギー王の愛妾となったフランスのバレリーナ。映画『クリムト』（二〇〇六）で描かれる画家の恋人レアのモデルでもある。

20　イギリス新古典主義を代表する十八世紀の建築家、ロバート・アダム、ジェイムズ・アダム兄弟のデザインによる。

21　グリムの『ドイツ神話学』によれば、ドミナ・ノクトゥルナ（夜闇の貴婦人）は魔女であって、戦場の上を天翔て、死者から魂を取り上げる。

CamScannerでスキャン

マスカラとアイライン、アイシャドーと眉墨、ローションとルージュとブラシと毛抜きを駆使する。ときどき、三十年も四十年も前に君臨した美女たちの写真を収めたルーズリーフのアルバムが参照される。夜の儀式における彼女の輝きは、正式とは言えなくても真正な格調を帯びる。これは男の側だけでなく、彼女自身の精神にもかかわることであるのだ。彼女のブロンドの髪はピンでまとめて大きな黒髪のかつらの下。女主人の姿勢を忘れて首を前に傾げるとその黒髪が肩を越えて前に垂れ、乳房の下に届く。長い黒貂（クロテン）のケープをまとい、ヒールの高い黒いブーツを履いた以外は裸身だ。身にまとう唯一の宝石は銀の指輪についた人造ルビー。多面体にカットしていないオリジナルの丸石が、傲慢な血の滴を思わせる。それがスッと伸びて、老将のキスを求める。

刈りこんだ口髭の剛毛が、震えながら彼女の指をさする。その先の爪はやすりで尖らせ、彼女のルビー、ふたりのルビーと同じ赤い光沢のある赤に塗りこめてある。灯火の下で爪はほとんど黒に見える。「もういい。用意なさい」

老体が服を脱ぐ。勲章がチリチリと鳴り、糊のきいた襟がカサコソ音を立てる。彼女は煙草が吸いたくて仕方ないが、それはできないというお達しだ。動きそうになる手をぐっと押さえて、「何を考えているの、プディング」

「初めてお会いした晩のことを」——泥の悪臭。高射砲のダダダダという音が暗闇に鳴っていた。部下が、哀れな羊らが、その朝ガスにやられていた。彼はひとりだった。展望鏡ごしに、空に懸かるスターシェル[22]の光で、彼女を最初に見たのだった・・・隠れていたのだが、自分も彼女に見られてしまった。全身黒ずくめの白い顔が両軍の中間地帯に立っていた。彼女の周りは機関銃の弾丸が型通りに地面を掘り返しているのに、何のプロテクショ

22 第一次大戦期に使われた、落下傘つき缶の中に燐光体を入れて打ち上げる、白光の照明弾。

も必要ない」「みなが知っておりました。男たちはみなご主人様のものでしたから」
「おまえもね」
「ご主人様はわたくしめに呼びかけられ、こういいました。——おまえからは離れない。おまえはわたくしのものです。このさき何年後になろうとも、繰り返し一緒になるの。そしておまえは常にわたくしに仕えるのです、と」
ふたたび両の膝をつく。赤ん坊とおなじ丸ハダカ。床を這う老いた肌が、蠟燭の光に、そのザラザラした質感をさらす。古い傷跡に、新しいミミズ腫れが絡まる。ピンと〝ささげ銃(つつ)〟をしているペニスを見て彼女の口元がほころんだ。命令にしたがい、前に這ってきてブーツにキスをする。ワックスとレザーの匂いがし、彼女の足指の力が抜けるのが、黒革をとおして彼女の舌先に伝わってくる。視界の端、小さなテーブルの上に、彼女の早めの夕食の食べ残しが見えた。プレートの端、二本のボトルの頸部——ミネラル・ウォーターとフレンチ・ワイン・・・
「さ、苦痛のお時間ね、准将。今夜おまえの捧げ物がわたしを喜ばせるなら、十二発たっぷり打ってさしあげましょう」
彼にとって最悪の時間だ。以前にも拒絶されたが、突出地[23]の記憶に、彼女は関心がない。大量殺戮のことは知らんぷり、神話と、個人的な恐怖のほうがお好きらしい・・・だが、どうか・・・聞き入れてほしい・・・
「あれはバダホス[24]でありました」丁重にささやく、「スペインの内戦のさなか・・・フランコの大軍の旗(バンデラ)が町に迫っておりました。連隊の歌をうたいながら・・・掠奪した花嫁の歌もうたっておりました。その花嫁とは、ご主人様、あなた様のことであります。あ、あやつ

23 敵の領土の中へ突きでた、攻撃を浴びやすい陣地。

24 ポルトガル国境に接するスペインの町。スペイン内戦の一九三六年には共和派が敗れ大量の処刑者を出した。

CamScannerでスキャン

しけあたし様な花嫁と言っておったのです

彼女は一ぱいも何も言わず、彼を待たせた。間をおいてゆっくり目と目を合わせる。彼女のほうから卑猥なものにいつもと同じく好き勝手をさせること。彼がそれを必要としていた。そう、……あの日わたしの花婿は大勢いました。シャンシャンしたフラッカ・フラッキたちが、と彼女はささやく。部屋の中を一陣の冬の風が吹きぬけて、彼女の像は一瞬、ハラハラと無数の雪片へ崩れおちてしまいそうになった。老将はその声に魅せられている。それはあのフランダースの村の、壊れた部屋から聞こえてきた声だ。独特な訛りをもった声のトーンは、低地の国で齢を重ねていった少女たちの声。戦争が長引き、めぐる季節がどんどん冬へときびしくなるにつれて若さをなくし、陽気な調子を失って無関心につつまれた。……「メスティゾの男たちをかなりに抱きしめました。彼らの褐色の肌は、土の色、夕闇の色、完璧に食べごろの炙り肉の色でした。みんな、あどけない若い兵士で。その夏の日、雪の一日は、わたくしの婦人の日々の中でも傑出した一日になっています。おまえには感謝していますよ。今夜は苦痛なら与えてさしあげましょうね」

一夜のルーティンの中で、彼女が少なくとも楽しめるところである。英国の古典ポルノを読んだことはない彼女だが、目前の出来事の流れの中には、魚のような自然な泳ぎで入っていける。まずは尻に六発、乳白な腿を横切るようにしてさらに六発。バシッ！ どうしたの。おまえの〈瓢箪サイズ〉は、えっ？ ゆらゆら作ったミミズ腫れから血を滲ませるのが彼女は好きだ。老人の苦痛の呻きに合わせて彼女自身が呻いてしまうのを抑えるので精一杯のときもよくある——二つの声が重なったら、そのそぐわなさは、実際聞こえるよりもずっと意図的に響くだろう。……飾り紐や猿轡をかませる晩もあったし、金房のついた

飾緒や彼自身のサム・ブラウン・ベルトで体を縛ることもあった。だが今夜の老将はただ背を丸めて床の上、打ち据えられることを求めて、しなびた尻を突きあげている。ただひたすら痛みが欲しいのだ――リアルなものが、純粋なものが。そのシンプルな神経の感覚から、〈かれら〉は准将をここまで引き剝がしてしまった。彼と真実との間に、書類（ペーパー）のイルージョンと軍の婉曲作法を詰めこんだのだ。それをぜんぶとっ払い、裸になって彼女の屹然とした足下に屈する今こそは、貴重な、まっとうな時間なのだ……いや、やましく思っているわけではない――大臣や科学者や医者たちが、それぞれの領域でほざいている嘘ばかり何年も何十年も聞いてきたことは、むしろ驚きだ。ここに来ればいつでも彼女に会えたのに。彼の老いさらばえる真の肉体を確信をもって所有してくれる人が。ここには己の正体を偽る制服もない、眩暈と吐き気と苦痛による彼女のコミュニケを防御する薬品もない。……なかでも直に伝わるのが苦痛（ペイン）。それは最高に透んだポエトリー、きわめて高価ないつくしみの形。

准将は苦しげに跪き、お道具にキスをした。彼女はいま、彼の上に跨って立つ。足を大きく開き、骨盤を前に突きだし、開かれた毛皮のケープのへりを両の手で尻のうえにおさえた恰好で。そのヴァギナを、あの恐ろしき渦巻きを、彼は勇気をふるって見上げるが、彼女の陰毛はゲームのために黒に染まっていた。老人の口からため息とともに小さな恥辱のうめき声が漏れる。

「ああ……そうだった」笑い声が響く。「お気の毒さま、これはわたしの最後の秘密の暗がりよ」爪が陰唇をなでる、「女の秘密の場所を開かそうなんて、そんなワルイことは考えていないわよね」

「どうか・・・」

「だめ。今夜はだめです。ここにひざまずいて、わたしが出すものを受けなさい」

老人の視線は、意志に反して——もはや条件反射になっているのか——テーブル上のボトルと（肉汁とオランデーズ・ソース、肉のすじと骨を少々残した）プレートに向けられる。・・・彼女の影が老准将の顔と胸を覆う。太腿と腹部の筋肉がピクッと動き、革のブーツがキキッとかすかな音を立てる。次の瞬間、尿がほとばしる。彼は口をあけて流れを捕らえる。息をつまらせ、必死に飲みつづけるが、尿はあふれて口の端から首筋そして肩にかけて生暖かい流れとなってしたたり落ちる。シャーシャーと吹き荒れる嵐に彼はもうずぶぬれだ。彼女の排尿が終わると彼は、口のまわりの数滴をペロリ舐めとる。彼女の陰部の繁みには、まだ金色に澄んだビーズがついている。両の乳房の谷間から見上げる顔はスチールのような滑らかさ。

彼女がくるり角度を変えた。「毛皮を持ちあげて」いわれるままにしたがう。「気をつけなさい。わたくしの肌にふれぬように」このゲームをはじめたころ、彼女は緊張して便意を失った。男がインポになる気持がわかった気がした。だがポインツマンはそんなところまで注意を回し、食事のトレイに軟便剤も一緒にのせるのを忘れない。いま彼女の腸内で柔らかな鳴き声をあげながら便がすべり落ちる。門から外へ。彼は跪き、両腕を宛てて壮麗なるケーブにしがみつく。黒々とした糞塊が裂け目から、白くたおやかなふくらみの谷間、その暗黒の中から現れでる。もぞもぞと、彼女のブーツの革にふれるまで膝をひらき、前屈姿勢をとると彼は熱い便を唇で囲い込み、そっと吸いつきながらその底部に舌を這わせる。彼は思う、こんなふうに思うのは残念だがどうすることもできない。もちろん現実

の食糞を通過することで、埋めこまれた条件づけの一部は解除されるだろう。だが野蛮なアフリカ人に屈服を強いられているというイメージは否定されようもない。……悪臭が鼻孔に染みわたる。彼を囲い、包みこむ。これはパッシェンデールの、塹壕線が突出したあそこの臭いだ。朽ち果てていく屍が泥と混じった臭いだ。これこそふたりの慣れ初めの専横的な、彼女を象徴する臭いだ。便が口腔内の奥深く。さらに食道へと滑りこむ。こみ上げる吐き気。彼は雄々しくも歯をくいしばってこらえる。ふつうなら、陶器の水の中を、誰にも見られず味わわれず、行方もしれずに流れていってしまうものが、大腸の苦い〈かまど〉で焼かれたパンとなってここに姿を現したのだ。一家団欒のように明るく、ベッドの中の死のように窃かに……喉元の痙攣は続く。苦痛が襲う。舌と口蓋を使って彼は糞を潰し、そして噛み始めた。そのネチャネチャとした音だけが部屋に響く。

あとふたつ糞がきた。今度は小ぶりのやつ。これを食べ終わり、肛門に付着した滓も舐めとった。いま彼は祈っている——ケープの裾を引っぱり落として、絹の裏地の暗闇の中にとどまり、屈従の舌先を彼女の尻の穴の中へ突き入れることを許されないかと。だが彼女は行ってしまう。彼の手のひらから毛皮がフワッと消える。主人は彼にマスターベーションを命じた。ブリツェロ大尉とゴットフリートのを観察していた彼女は、その正式な方法に通じている。

准将はすぐに達する。精液の濃厚な匂いが煙のように部屋にたちこめる。

「さあ帰って」老将は泣き叫びたい。だが、以前にも懇願して、命を捧げるとか、バカを言ってしまった。涙があふれ、頬をつたう。彼女の目を覗くことはできない。「口のまわりがうんちだらけよ。その顔、写真にとっておこうかしら。わたしのことを厭きられると

CamScannerでスキャン

困るから」

「めっそうもありません」わたしが起きているのは、あれだけで」頭をグイと動かしてD翼棟から抜きとるふり。"ホワイト・ヴィジテーション"の全体を見回すしぐさ。「あれにはほんとにウンザリだ…」

「服を着なさい。口のまわりを拭くのをわすれないことね。また欲しくなったら呼びにやらせます」

退室のとき。軍服姿に戻って独房の戸を閉め、来た道をたどって帰る。夜の番人はまだ眠っている。老体に冷気が打ちかかる。プディングはすすり泣く——背を丸め、ひとりぼっちで。パラディオ建築の館の壁に頬を一瞬押しつけて。彼の常勤する一画はもはや異国。〈夜の女主人〉の棲むところ、彼女の柔らかなブーツとオランダ風英語の堅い発声こそが、心安まるホームなのだ。いまの彼を待つものは、深夜のブロス・スープと、サインすべきいつもの書類と、大腸菌を抑えるためにポインツマンから服用を命じられているペニシリンの摂取。だが、たぶん、明晩がある、明晩にはまた、きっと…それまでどうやって持ちこたえていけるのか。しかし、ひょっとしたら、夜が明ける直前に…

CamScannerでスキャン

□□□□□□□

春分の季節は大いなる変化の尖点。夢みる魚座から若やいだ牡羊座へ、水の眠りから火の覚醒へ、世界は継ぎ目を通過する。西部戦線の向こう側、[1]ブライヒェレーデのハルツ山地では負傷して腕を吊ったヴェルナー・フォン・ブラウンの三十三歳の誕生パーティの準備が進み、午後のあいだ砲音が轟いた。そのはるか彼方で、ロシアの戦車が土煙りの化け物を巻き上げ、それがドイツの草原を覆った。コウノトリはねぐらで休む。気の早いスミレの花は咲きだした。

〝ホワイト・ヴィジテーション〟周辺の白亜の海岸も、晴朗にして澄みわたった日々が続いている。OLたちの重ね着もだいぶゆるんでセーターの胸の隆起が目立ってきた。三月の到来は、おずおずとした羊のよう。ロイド・ジョージは死の床の中。[2]いまだ立入禁止の浜辺に入りこむ旅行者の姿もチラホラ見える。旧式の鉄柵とケーブルが張り巡らされた間で、ズボンを膝までたくし上げ、あるいはスヌードを外した髪を垂らし、冷たそうなグレイのつま先が海辺の小石をつついている。そのすぐ沖の海面下には何マイルもの送油パイプが隠れている。バルブをひねって火をつけて、上陸を図ろうとするドイツ兵を黒焦げに

1 この時フォン・ブラウンは、自動車事故で左腕を複雑骨折、それでもなお開発チームを率いていた。だがすでにロケット作戦は最期を迎えつつあった。

2 第一次大戦中から戦後に英国首相を長期に務めたデヴィッド・ロイド・ジョージは、三月二十六日に死去。享年八十二。

することの計画も、すでに過去の夢となった[3]…そのハイパーゴリックな点火[4]が起こるとすれば、研究所の若僧がいたずらを企んだか、「魂の五月蜂起」が起こって、ババリアの作曲家カール・オルフの勇ましき、

オー、オー、オー
トートゥス　フローレオ
ヤム・アモーレ・ヴィルギナーリ
トートゥス・アルデオ[5]…

の音楽に合わせ、ポーツマスからダンジェネスに至る要塞の沿岸一帯、春を想い焦がれて燃えあがったときだろう。いや実際、そんな魂の暴発の企てが〝ホワイト・ヴィジテーション〟の活発な頭脳の中で日々孵化している——犬たちの冬、争点なき黒い降雪の冬は終わろうとしている。じきに背後に過ぎゆくだろう。だが過ぎゆきてからも、フードの付いた寒気を送りこんでくるのか、海上でいかに炎が燃えようとも?

カジノ〈ヘルマン・ゲーリング〉でも、新しい体制ができてきた。今や知った顔はワイヴァーン大将くらいで、そのワイヴァーンもどうやら降格の目にあったかに思える。スロースロップの中で、自分をめぐる陰謀のイメージは膨らんだ。最初のうち、謀略は一枚岩で、強力無比に思えた。自分の手で触れられるようなものではなかった。あの泥酔ゲームとカッチェとの事が起こるまでは。ところが不意の別れがふたつ起きてからは——

〈パラノイドのための格言〉その1——陰謀のマスターには手が届かなくても、その犬ど

3　大戦初期の一九四〇年、ドイツ軍のイギリス上陸に備えてとった防衛措置。

4　Vロケットの燃料のように、他の液体と混ぜ合わせるだけで自然発火させる方法。

5　「オーオーオー／わたしは完全に花開く／いま乙女の恋が／わたしを燃やし尽くす」　もともと十三世紀の修道院で歌われていた歌に基づいてドイツの作曲家オルフがまとめたカンタータ「カルミナ・ブラーナ」の一節。

もをくすぐることはできる。
そして、そのスロースロップの「意識」というやつが、このごろ変容を被りがちなのである。いや「夢を見ている（ドリーミング）」というのではない。むしろ、ひと頃よく「夢想（レヴェリー）」と呼ばれたものに近い。ただし、目にする色はパステル系ではなくて、目に鮮やかな原色系……その種の意識状態で彼はふれたのだ。そう、タッチして、しばらく接触を保った。タッチした相手は、われわれにもなじみの御霊である。研究施設のお雇い霊媒キャロル・イヴェンター氏を通して一度ならず天から語った故ローランド・フェルズパス氏は、あちこちの航空系研究所に長年出入りをしている制御システムの専門家。誘導方程式とフィードバックのエキスパートである。そのローランドが、どうやら個人的な理由から、スロースロップの空間の上空に停滞浮遊しているようなのだ。日射しが彼にはなかなか感じにくい快晴の日も、背中にちょっぴり静電気を感じるだけの雷の日も、「野蛮な高度（サベージ・ハイト）」と呼ばれる上空八キロ[6]からささやき続けてきた。ここで彼は——いわば成層圏の不可視の防衛網の一部として——絶対に侵入されてはならない〈最後の放物線（ラスト・パラボラ）〉と呼ばれる軌道を見張っている。天界でのこの業務も、生者の世界に負けず劣らず官僚的であって、ローランドは、予想される通り、アストラル体の肉吊るしをクルッとカールさせ〝空〟の中に（どのようにしてかは想像にお任せするが）隠している。いや、ここは、なんとか通り抜けようとする霊どものフラストレーションで充ち満ちていて、たとえていえば夢の中にいる者が、目を覚まして話したいのにそれができない不能感を抱えながら、目覚めていたら耐えきれないほどの圧迫感と頭蓋内部を探られる感覚に耐えているといった感じ。そんなところで見張っているローランドの前に、スロースロップのごとき男がふらり現れるとは——

6　上空八キロ周辺は、だいたい地上からの「対流圏」とその上の成層圏の境界に相当する。

CamScannerでスキャン

ローランドは身震いする。これ、ですか？　これ？　こいつを最新の船首像（フィギュアヘッド）にしろと？　神様、勘弁してくださいよ。このスロースロップごときが、どんな霊気の嵐を、エーテルの怪物を、お祓いできるというんですか。

ともかくローランドとしては現状の中でがんばるしかない。彼らがここまでやってくるなら、制御（コントロール）に関する自分の知識を知らしめてやる。それこそが死んだ自分の密かな使命のひとつだ。あの晩、〈スノックソール〉に集まった者たち、経済システムの話をしたが、*7 その謎めいた発言も、コチラでは巷の民衆のおしゃべりみたいなもの、いわば存在の初期条件だ。ドイツ人に聞いてみると一番いい。いや、悲しい話さ。彼らはみじめにも〈制御〉に対する熱狂を、権力者に利用されてしまったのだから。『PSH』（『パラノイア・システムズ・オブ・ヒストリー』）という短命の雑誌が二〇年代にあって、その組版（プレート）は、今はすべて謎の消失を遂げているが、それも当然で、この雑誌の社説欄では、数度にわたってこんなことを示唆していた——ドイツのインフレは、〈サイバネティックスの伝統〉*8 への若い熱狂者を〈制御〉の仕事に駆り出すことを目的に、意図的に創り出されたものではないかとね。膨れあがった経済が、気球のように空をのぼる。それが定義する地表面の価値にしても、制御を外れて漂流する。マルクの価値をコンスタントに保持すると期待させたフィードバック・システムも、屈辱的な崩壊をきたしてしまった。…ループ*9 ができれば、一つにまとまる。統一されれば、変化はゼロで、その静まりは永遠に——というのが〈コントロールの学〉の揺籃時代に、密かに歌われた、恐るべきわらべ歌であったわけだ。左翼系の歴史書を見れば書いてある、"発散的揺動（ダイヴァージェント・オシレーション）"は、何であれ〈最悪の脅威〉のように見なされたわけだ。ブランコを漕ぐにも、一定の角度以上漕ぎあげるのは禁止。

7　63〜64ページでローランドは、経済を動かす「不可視の手」を否定し、内的な制御について語っていた。

8　「サイバネティックス」という学問体系は、戦後になってノーバート・ウィーナーらが整備したが、蒸気機関の調速機など、システム恒常化のための思考は、十九世紀から活発だったといえる。

9　基準から外れたことが引き金となって、そのズレをなくすプロセスが作動するような「負のフィードバック回路」について語られている。

CamScannerでスキャン

喧嘩が始まろうにもすぐに、きわめてスムーズに、ブレイクがかかる。雨は降っても雷や稲光を生じることなく、ガラスのような高慢な灰色が地表近くを覆うだけ[10]——苔むした倒木の群れなす谷間のモノクロームの眺めだ。倒木の根は天を差しても、そこに悪意の戯れもなく（心なき天上のエリート主義者たちに向けて白い根を突き立てているわけでもない）、谷間は秋を凝集させ、秋の黄金色は雨の中で萎びゆくオールドミスのような褐色を背に纏う……雨の帳はつややかな部分と光沢の剥げ落ちた部分が選り分けられて、疫病を思うかのよう。その雨にからかわれながらきみは空地を抜け、裏通りへ導かれる。あたりは謎めき、舗装はひどく、街は深みを増し、生け垣をそれぞれの角度に曲がるたびに、前よりもっと傾いだ地区へ出る、それを七度、時にはそれ以上も続け、狂ったような昼の光も突っ切って、ついに道路の空間を離れ、昂揚しながら、声もなく、田園を進むと、キルトを敷きつめたようなダークな野辺と森、真正な森がここから始まる、ゆく手に待つ試練が、ちょっと顔をのぞかせて、きみの心を恐怖が覆いはじめた……ところでストップ。ブランコをある角度以上に振り上げられないのと同じで、この森も、中心から一定範囲へは立ち入ることができない。つねにリミットが宛てがわれる、そういう世界なら、成長するのに苦労もいらない。すべてが理想的に健全であって、崖縁（エッジ）を覗く瞬間もないし、限界との戯れも起こらない。もちろんそこにも破壊はあるし、デーモンたちも（マクスウェルの悪魔[11]を含め）存在した——森の奥深くには他の野獣（ビースト）も棲んでいて、きみを護る土塁の間を跳躍していた。

〈ロケット〉の暴れる航跡も同様に、文字通りブルジョワ的な秩序観念の中へ手なずけられた。たとえば次のような、哲学とハードウェアの優雅な融合、抽象的な変化と現実の蝶

10　次第に大きく揺れるブランコも、応酬が激しくなっていく喧嘩も、発散するプロセスの例。同様に、平衡がとれた空気から、雷雨や竜巻が生じる過程も、小さな変化が次第に大きな変化を呼び込む発散的過程の産物。

11　高速の気体分子と低速の気体分子を振り分けることで温度差を作り出し、エントロピーの法則をくつがえす思弁的存在。『競売ナンバー49の叫び』107ページに"登場"する。

CamScannerでスキャン

番でつながった金属版の回転角の結託によって、偏揺れ角の制御（ヨー・コントロール）という面で運動の記述が可能となった[12]——

$$\Theta\frac{d^2\phi}{dt^2}+\delta^*\frac{d\phi}{dt}+\frac{\partial L}{\partial\alpha}(s_1-s_2)\alpha=-\frac{\partial R}{\partial\beta}s_3\beta$$

によって安定を保持し、スキュラとカリブディスの間の荒れる難所[13]でも舵を失わずに、〈燃焼終結（ブレンシュルッス）〉にまで辿りつく。当時の若手エンジニアの中にも、〈フィードバック〉の持つ根源的な保守性と、それを導入する過程で人の暮らしにどのような変化が起こるかを対応させて考えた者はいただろう。だが両者を一つのプロセスとして見た——少なくとも生きている間に——はいなかった。ローランド・フェルズパスにしても、死を通過して初めて、おそらく遅きに失した知見を得ることができたわけだ。他にも無数の霊たちが今もなおヒュイヒュイ上がってくる、ロケットにでもなった気分で、石青色（ストーンブルー）の〈虚空〉を目指して飛んでいる——自分の運命がどんな名前の〈制御〉の下にあるのかも知らずに、その名も知らずに…コチラの光の、天の羽衣のような穏やかさに見とれ、霊の群がりと不可視の力、聞こえる"声"の断片に、オーダーの違う存在のあり様を垣間見ながら…

接触のあと、スロースロップの頭の中に、その明確なシンボルや図解が残るわけではない。何かしら漠然としたアルカリの後味のようなもの、消すに消せないストレンジ感、何ひとつ受け入れられない自己閉塞感だけが残る。

まあ、いってみれば、とてもゲルマン的なエピソードだ。このところスロースロップは、夢もドイツ語で見る、というのも種々のドイツ語方言を教えこまれているのだ。英国軍の

12 シャトル飛行のそれぞれの時点tにおいて、この等式が満たされている限り、偏揺れ角は、常に放物線の接線に寄り続ける。すなわち、すべてのパラメーターがこの等式にかなった内的制御の下にあるとき、重力に抗する飛翔が獲得される。ただしシャクターレとアラヴィンドの調査によると（*Pynchon Notes* 参照）、この数式はピンチョンの創作であって、実際に工学者たちが使っていたものではない。

13 不安定な揺れをもたらす空域。ホメロスの『ユリシーズ』の渦巻く海峡にたとえた表現。

占領予定ゾーンを想定して低地ドイツ語を学習する。またロシア軍がノルトハウゼン（ロケット開発の中心拠点）まで攻め上がってこないことを想定してチューリンゲン方言も。語学教師ばかりじゃない。砲兵器、電子工学、航空力学の専門家も訪れる。「シェル石油」*14からはヒラリー・バウンスと名のる男が派遣されてきた。「推力」に関する講義をするのだという。

一九四一年のはじめ、英国の軍需省がシェル石油に一万ポンドの委託研究費を渡して、コルダイト爆薬とは別の物質で駆動するロケットエンジンの開発を要求したそうである。コルダイトは、人間たちを吹き飛ばす用途に、毎時ものすごいトン数が使われているから、ロケットにまでまわす余裕がない、と。そこでアイザック・ラボックという男を指揮官として、ホーシャムの近くのランガーストに静止実験のための施設が作られた。そこで始まった液体酸素と飛行燃料を用いた実験は、一九四二年八月に初の成功を収める。ラボックは、ケンブリッジ大学の優等卒業試験の二科目でトップスコアを記録した天下の秀才、かつ英国液体酸素研究の創始者であり、酸素について彼の知らないことは知る必要がないと言ってよかった。そのラボックの第一助手を最近務めているのがジェフリー・ゴーリン氏で、ヒラリー・バウンスが報告書を提出する相手がこのゴーリンだった。

「おれはエッソ派なんだけどなあ」とスロースロップがわざわざ応える。「以前運転していた愛車がとてもガソリンを食うやつだったんだけど、こいつがグルメでね。シェルのガソリンなんか飲ませた日にゃ、[illegible]タンクに[illegible]てやらないと。[illegible]なかったもんだ」

[illegible]

14 正式には「ロイヤル・ダッチ・シェル・グループ」。一九〇七年、米国のスタンダード・オイル社に対抗して、イギリス・オランダの石油会社が合併して成立。

15 世界最大の独占的企業だったアメリカのスタンダード・オイル分割後、「ジャージー・スタンダード」社（後のエクソン）[illegible]

16 [illegible]

ースロップの苦情の対応にしきりである。「実際のところ、当時我が社は移送と貯蔵にしかかかわっておりませんでな。まだナチもジャップも登場する以前には、生産も精製もすべて、ハーグにあるオランダのオフィスの担当だったものでして」

これを聞いて傷心のスロースロップはカッチェのことを思いだしてしまった。故郷の街の名を口にし、オランダ語の愛のフレーズをささやいたカッチェのことを。海辺の朝をふたりで歩いたのは別の時代、別の世界の。…チョット待ッタ、「あんたがいたのは、バターフシェ・ペトロレアム・マーチャペイ、NV[17]のオフィス？」

「そうですけど」

その建物を、街の偵察写真がとらえていた。ダークブラウンのネガに、水斑が花粉のようについていた。ちゃんと乾かす暇もなかったのか――

「あなたらも気づいとるでしょう」――いかなる理由からか、彼らはスロースロップにイギリス英語も教えこんでいて、ときどき、こんなケーリー・グラントもどきのしゃべり方になる――「ハーグの街には、ドイツの軍隊がいらしてて、あのペランメーなロケットを、ハーグの街から、ロンドンに向けてぶっ放してた。そのとき…ロイヤル・ダッチ・シェルの本社ビルを使ってたんだよね。場所はヨーゼフ・イスラエルプレインだっけ、そこのビルで無線誘導送信ってのをやってた。それ、どういうことなんだろ。説明つきますか、あなた」

パウンスは胃の上で揺れている宝石をジャラジャラさせて睨んでいるが、このスロースロップという男の意図を計りかねているといったようす。

「つまりだよ」スロースロップとしては、個人的に漠然と不安に思ってきたことを質問の

17 オランダ語で「バターフシェ石油株式会社」。ロイヤル・ダッチ・シェルの子会社として、オランダ領東インド産の原油の精製に当たっていた。

形ドーンぶつけてやるだけで、なにも一悶着起こそうとしているわけではない。はず。
「あなたらもルケンだとは思わないですかね。あなたたちは、英仏海峡のあなたらの側で、あなたらのリキッド・エンジンを開発してる。そこへもってきて敵のやつらが、やつらのパランノーな殺戮兵器を、あなたらに向けて発射してる。そのとき使うのが、あなたらの……とんでもねえや……シェルの無線誘導タワーだったなんて」
「いいや、筋の通った質問とは思えませんがね。きみは何が言いたいんですか？　発射地点とロンドンを結んだ直線上にある建物のうち、一番高いのがそれなんですから、そりゃ当然、選ばれるでしょう」
「そのうえ、距離までピッタリなんだぜ。いいかい、忘れちゃ困るよ――発射地点から測ってキッカリ十二キロのところにそれはある。おれが言ってるのは、そのことなんだよ」
おいおい、ほんとか、スロースロップ、ほんとにそのこと、言ってるの？
「ぼくは、そんなふうに考えたことはありませんでしたな」
ぼくもありませんでしたよ――ハハ、おれだってねえよ……
ヒラリー・バウンスの、そのうろたえた微笑。ここにもうひとり、スティーヴン・ドズスン＝トラックと同様の、無垢でおとなしい熱狂者がいる。だが、
〈パラノイドのための格言〉その2――犬ども（クリーチャーズ）がイノセントであればあるほど、マスターの悪徳の度は大きい。
「何か悪いことを言ったのでなければいいんですが」
「そりゃまたどうして？」
「どうにもきみが不安そうなものですから」バウンスの口から息がもれた。本人は優しげ

に笑っているつもりなのだろう。
　不安？　そうさ、得体のしれない〈クリーチャー〉の、そら恐ろしい〈存在（プレゼンス）〉の、顎と牙が見えるんだ。あまりに巨大で、自分以外は誰にも見えない…あそこだ、あの怪物だよ——ばかな、あれは怪物じゃない、雲だろうが！——そうじゃない、おまえ見えないのか？　ありゃ怪物の足だぜ——そうなのだ、スロースロップは空の上にこの野獣の気配を感じることができるのだ。その鋭利な爪と、連なるウロコが、雲やなんかのありふれた物の姿に擬態して空に浮かんでいる…さもなくばスロースロップに聞こえるところで、みんな結託して、別の呼び名で呼び合っている…
「きみは〝放縦（ワイルド）な偶然〟を結びつけようとしてますね」
　他人の発言の中に引用符を聞きとる術に、スロースロップもまた熟達してくるのだろう。書物読みの条件反射というべきこの性癖と、もしかしたら彼は遺伝的になじみがあるのかもしれない。スロースロップ家の遠いピューリタンの御先祖はみな、住み着いたブルーの丘陵地帯で、荷物の中にいつも聖書をいれて各章の詩行を暗誦していた。方舟や寺院や幻視された玉座の構造、その材質からサイズまで頭に叩きこんでいた。それらのデータの背後には、聖なる神の存在が、疑いようのないものとしてあった。
　そんな家系に生まれたタイロンには実にお似合いだ。この寒い日の朝、こんなふうに〈それ〉と遭遇したのは。
　それはドイツ製の部品リストの青写真なのだが、複写の品質があまりに粗悪で、よく判読できない。「Vorrichtung für die Isolierung（フォアリヒトゥング・フュア・ディー・イゾリールング）, 0011-5565/43」え、なんだと？　番号自体はソラで憶えていた。A4ロケット全体の当初の契約番号である。だが「絶縁のための装

CamScannerでスキャン

置」[18]という表記の次に、どうして集合体（アグレガート）[19]の契約番号がついているんだ？　それにこのDEの文字のついたレーティングは、ナチスにとって最高のプライオリティを持つ印ではないか。まずいぜ、これ。ＯＫＷ[20]の事務官が大失態を演じたか（それも聞かない話じゃない）、何かの正しい番号が思い浮かばず、次善の策としてロケット番号を挿入してしまったのか。請求、部品、製作番号——どれもみな同じ旗記号がついている。それを頼りにスロースロップは「文書ＳＧ‐１」に行きついた。旗が二本立っているところには、「Geheime Kommandosache! §35 R5138 の意味での国家機密」[21]と書かれている。

「ああ、もしもし」ちょうど入ってきたワイヴァーン大将に向かって、「文書ＳＧ‐１の写しをいただきたいんですけど」

「面白いことをいうやつだ。そいつは、わが軍の誰もが欲しいだろうよ」

「冗談はよしましょう」Ａ４に関する連合国側の情報は、その分類にかかわらず、すべてロンドンで秘密の漏斗に入れられ、それがパイプを通って、ここのカジノでスロースロップが滞在する素敵な独房に現れるようになっているのか。これまで彼らが差しとめた情報はない。

「スロースロップ君、〝ＳＧ〟なんて文書は存在しない」

その瞬間、この男の鼻先で、部品リストを振ってやりたい衝動にかられるが、きょうのスロースロップの役どころは、米国独立戦争で赤服兵（イギリス）を出し抜く頭の冴えたヤンキーである。「するとおれの読みちがいですかね」と言いながら、書類の散らかった部屋をキョロキョロ見回して、「５６と書いてあったのをＳＧと読み違えたのかなあ、へんだなあ、たしかこのへんにあったんだけど・・・」

18　「イゾリーシング」は絶縁、「フォアリヒトゥング」は装置を意味する。

19　ロケットと同義。「（装置の）集合体」という意味で、開発されたロケットの機種はアグレガートの頭文字をとって「Ａ１」に始まるコード名で呼ばれた。

20　ドイツ国防軍最高司令部 = Oberkommando der Wehrmacht

21　ゲハイメ・コマンドザッヘ（極秘指令文書）。

CamScannerでスキャン

大枠がまった後に、スロースロップとひとつの謎が残る。まあパズルと言っておこう、まだオブセッションというほどじゃない……いまのところは……部品のリスト対面に、原材料の欄の上に、ほら、書いてあるこの名前――〈Imipolex G〉。あ、そ。〈イミポレックスG〉でできた絶縁装置なのね。スロースロップは部屋中の書類を蹴とばしながら、ドイツの商品名ハンドブックはないかと探すが、その種のものはまるで見えない……つぎに「A4とその補助装具全品の原材料の元リスト」の項をチェックしてみるが、ここにも〈イミポレックスG〉なる名前は見つからない。鱗と爪が感じられる。自分以外誰にも聞こえぬ怪物の近づく足音が……

「どうかしたかい？」ヒラリー・バウンスがふたたびドアから首をつっこんだ。

「液体酸素の件なんだけど――明確なインパルスの数値データが欲しい……」

「明確な……何をだ、推力の数値？」

「そうそう、スラスト、スラスト」。イギリス英語の助け船がきた。バウンスが話の向きを変える。

「液体酸素とアルコールの混合[22]なら二〇〇はいくだろう。ほかに何を知りたいね？」

「でもあんた方はランガーストで、ガソリンを使ってたんじゃなかったのか？」

「ガソリンも使っていた、他のも使っていた」

「その他のやつのことを知りたい。まだ戦争は終わっていないんだぜ。そういうのを独占的にやってていいの？」

「しかし、われわれの社への報告書はみんなロンドンにあるんで。次にきたときには調べておきますから」

22 459ページ参照。一九四二年十月にペーネミュンデで打ち上げに初成功するA4のエンジンは、液体酸素とアルコールを使用。

「その役人みたいな答え方、なんとかしてよ、大尉。おれは答えが今ほしいんだ」スロースロップのこの強気は、〈知りたい放題知る自由〉を〈かれら〉から与えられていると思うに至ったから。そのカンの正しさを、バウンスが裏打ちする――

「テレタイプで送付してもらうことはできると思いますよ・・・」

「そうこなくっちゃ！」しかし、テレタイプだ？ ヒラリー・バウンスはシェル・インターナショナル・ネットワーク・テレタイプ機――「端末」というのだっけ、それを自室で私用に使っているというのか。なんとも羨ましい話だ。そんなもんがホテルの彼の部屋のクローゼットのなか、アルキット*23の制服と堅いカラーのシャツが並んでいる奥に収まっているなんて。スロースロップはミシェルに頼みこんで忍びこむ――バウンスのおっさんが、この娘に色目を使っていたのを知っているから。「ようカワイコちゃん」茶色のストッキングが垂れている屋根裏部屋の、踊り子たちの寝室で、「今晩ビッグな石油男（オイルマン）とおつきあいするのはどう？」 彼女は誤解してしまう。金属の部品とか使って、原油をボタボタ垂らしている汚い男とくっつくのかと。そういうの、わたし趣味じゃないかも・・・だが誤解がとければミシェルの目はランラン、バウンス大尉を猫なで声で引き寄せているその隙に、スロースロップがロンドンに接続して〈イミポレックスG〉の情報を聞きだすという計画だ。ミシェル本人も、バウンス大尉のことは、夜な夜な自分目当てに通ってくる客のひとりとして知っていた。お腹の上に掛かった金属メダル、すなわち中心に末広十字をあしらった金のペンゼン環は特にはっきり記憶していた。これはスロースロップも見たことがある。金のペンゼン環の中央で、中心が細くなった十字が交差している。合成分野での立派な研究成果を顕彰するIGファルベン賞だ。バウンスはこの賞を一九三二年に授与された。

23 ロンドンの高級男性洋服店。

それが示唆する産業界の結びつき(リエゾン)についての想像が心の底でフツフツしていた矢先に、スロースロップはあのロケット誘導の送信器(トランスミッター)の一件を聞かされた。いま遂行しようとしているテレタイプ作戦も、ある意味で、この怪しいリエゾンが生みだしたものといえる。こういうことを誰よりも一番よく知っているのはシェル石油のような団体だろう。国籍も曖昧、連合国側か枢軸国側かも不明、特定の顔もなければ継承すべき何物もなく、わたくしどもはただひたすら地球の最深層の深みから、化石燃料を汲み上げては、企業としてそれを所有しているだけです、という顔をしている。

オーケー。今夜はキャップ[*24]でパーティがある。会場はラウール・ドゥ・ラ・ペルランパンパンの邸宅だ。リモージュの花火産業の立役者ジョルジュ(通称"プードル"[*25])・ドゥ・ラ・ペルランパンパンの跡取りであるラウールはとんだ変わり者で、このパーティにしても(そんなものを"パーティ"と呼ぶのかどうか知らないが)南仏解放以来、途絶えることなく続いている。その館へスロースロップは——いつも通りの監視は受けつつ——気が向くときはいつでも入れる。客の出入りの激しさに目がまわる。ヨーロッパの連合国側に属する、あらゆる地方から流れてきた、家族の絆、性愛の絆、過去の同類のパーティとの絆がつくる関係のネットワークはあまりに複雑でスロースロップの頭でもって整理するのはとてもムリ。そちこちを、さまざまな顔が通りすぎる。ハーバードやSHAEFで見かけた、名前は忘れたアメリカ人も、ときどき通りすぎる。過去の亡霊が戻ってきたのか・・・偶然に? それとも・・・

ミシェルがヒラリー・バウンスを誘惑して連れてきたのがこのパーティだ。ロンドンからの返事がバウンスのテレタイプに——暗号ではない文字で——現れるのを最後まで見届

24 モナコの西、フランスに入ってすぐのリゾート町。

25 英語で言うなら「パウダー」。

26 "Sta-Comb" と綴る、「櫛いらず」という名の

けると、スロースロップはパーティのためのおめかしを始めた。入手情報を読むのは後回しにして歌いだす——

マイクロフォーンの輝きだ
髪のテカリはステイコム[26]
アイスクリーム・コーンに負けない魅力
おれはミスター・デボネアー[27]・・・

歌いながら、スロースロップは大胆なカットのグリーンのフランス製スーツ（微妙な紫のチェック入り）を着込み、「三〇と四〇」（トランテ・エ・カラント）[28]でせしめた花模様の幅広タイを締め、茶と白のウィングティップ・シューズ[29]、白のソックス、ミッドナイト・ブルーの中折れフェドーラを被ってこれでよし、足音軽くカジノ・ヘルマン・ゲーリングのロビーを出た。すると、車寄せの引っ込みに身を寄せていた痩せた民間人、まさにシークレット・サービスが思い描くアパッシュ[30]のイメージそのままの恰好をした男がふらりと出てきて、暗くうねった道をラウールのパーティへ向かうスロースロップを乗せた車を尾行する。

整髪料。

27 Debonair＝「スワーヴ suave」と共に、この時期盛んに使われた、「エレガントでスタイリッシュ」という意味の言葉。

28 「赤と黒」（ルージュ・エ・ノワール）とも呼ばれる、モナコでは定番の、カードを使うカジノゲーム。

29 甲の部分に翼状の飾りが縫い込まれている。

30 （アメリカのズートスーターにもつながる）派手な服装をしたフランスの不良。ドイツ映画『アパッシュ』（一九二七）を通し、ナイフを手にしたジャンパー姿のイメージで国際的に知られるようになった。

CamScannerでスキャン

□□□□□□□

どこかのイタズラ者がオランデーズ・ソースに百グラムのハッシシを混入したのが発覚、そのうわさが広まって、パーティ客はブロッコリに殺到し、部屋の端から端まであるビュッフェ・テーブルで直火焼の肉類がひっそり冷えていく。客の三分の一はすでに寝ていてその大半は床の上、なのでどこへ行くにも、転がる人体を縫って進むしかない。

だがどこで何をやっているのか。庭では、いつも通り小グループが体を寄せ合うようにして取引している。スペクタクルは、今夜は不作のようだ。男同士の三角関係がホットになって抓ったり詰ったり、バスルームに入れろ、入れない、の攻防が続く。年若い将校が百日草の繁みで吐きもどし、カップルがうろつく。女は豊富だ。ビロードのリボンをつけたの、ボイルの袖をつけたの、痩せているの、肩幅の広いの、パーマをかけたの……が半ダースにおよぶ言語でおしゃべりしている。こんがりと日焼けした女も、〈戦争〉の東部からやってきた、死の司祭さながらに白い肌をしたのもいる。エナメルを塗ったような黒髪の若者たちは、レディーズの気を引こうと大奮闘。その一方でツルツル頭の中年男は何気ないそぶりで部屋から部屋へ視線を走らせ、ビジネスの話をしながら反応をうかがう。

CamScannerでスキャン

サロンの片隅はダンスバンドが占めていて、痩せたウェーブヘアのシンガーが赤い眼をして感傷的に歌うのは——

《ジュリア》〔フォックストロット〕

ジューリア
ぼくって、そんなに変わり者（ベキューリア）?
望みはきみをだまくらかして（フール・ャー）
キスをせしめるだけなのに

ジューリアーーー
誰よりも、ぼくの愛が誠（トゥルーリア）
崇拝するから、宝石で飾るから（ビジューエル・ャー）
ちょっとだけ、ぼくにキスして

ああジューリャーーー
誰よりも、ぼくの心は乱れてる（アンルーリャー）
口から涎がだらりんこ（ドゥーリャー）
つのる思いが天井ぬけた
その上おまけに

CamScannerでスキャン

ジューリア
叫んでみせる　ハレールヤー
この両腕で　ジューリアー
ギュッと抱きしめられるなら

サクソフォニー[1]というべきか、パークレイン[2]風のサウンドが、ラリった頭にピッタリだ。ヒラリー・バウンスは、かのオランデーズにすっかり舞い上がったようすで、ミシェルとふたり特大のクッションの上でトロリとしている。その腹の上のIGファルベンのメダルを、ミシェルはかれこれ二、三時間もいじくりまわしているだろう。スロースロップが手を振るけれども、どちらも彼に気づかない。

ヤク酔いもサケ酔いも、破廉恥な点においては変わりがない。よろよろとビュッフェ・テーブルに近寄り、キッチンに出かけていって、クローゼットの中を引っかきまわし、キャセロールの底をなめる。ビーチへ向かおうとステップを降りていく裸体の一行が通りすがる。ホスト役のラウールはといえば、テンガロン・ハットに、俳優トム・ミックス[3]風のシャツを着て、両の腰に六連発拳銃、手にした手綱の先にはペルシュロン種の馬もいる。馬は馬糞を落とす――ブハラ製絨毯の上にも、仰向けになった客の上にも。すべては焦点を失ったまどろみの中。と突然、楽団の皮肉のこもったファンファーレとともにフランケンシュタインの映画[4]以外ではスロースロップもお目にかかったことがないほどの悪役顔が登場した。着ているズートスーツはリート・プリーツつきで、長い金のキーチェーンが垂

1　Saxophony という造語は、いかにもサクソン人（イギリス人）の吹きならしそうなサックスの音、という洒落になっている。

2　ロンドンのハイドパークの東沿いの路で、スロースロップのオフィスから近い。ホテルのダンスホールなどを指しているのだろう。

3　トム・ミックスはサイレント映画時代からのカウボーイ・ヒーロー。ペルシュロン種はフランス西部ペルシュ地方産の

れている。それをクルクル・キラキラ回しながら、会場の面々をひとりひとりしかめ面（つら）で見返してゆく——急ぎ足のようでいて、相手の顔と体をスキャンするスピードはヤケにゆっくりだ。ぐるりと規則的に首をまわしていくようすは少々不気味でもある。男はついにスロースロップの前で止まった。スロースロップはシャーリー・テンプル[*5]をミックス中である。

「おまえだ」見れば、トウモロコシの芯ぐらい太い指が、スロースロップの鼻先一インチのところにある。

「ちげえねえ」と答えたのはいいけれど、指につまんだマラスキーノ・チェリーが絨毯の上にボトリ、後ずさりした拍子にそれをグニャリと踏んでしまった。「図星よ、やるのは（アイ・アム）おれ様（ザ・マン）だ。で、用向きは？　何だっていいぞ・・・」

「ついてこいや」ふたりして外に出る。ユーカリの木立の下。そこにいたのは、マルセイユの売春業界でその名をはせているジャン＝クロード・ゴング、ちょうど〝白人奴隷〟のスカウトの最中だ。「おい、ねえちゃん」ゴングが木々の間へ向かって叫んでいる、「白人奴隷（ホワイト・スレイブ）、やる気ない？」「いやよ、まっぴら」と、どこからか女の声、「グリーンの奴隷ならやってもいいけど」「あたしマゼンタ[*6]！」という別の声がオリーヴの木の上からも聞こえた。「あたしはヴァーミリオン！」「おれ、ドラッグのディーラーに鞍替えしたい」とジャン＝クロードが頭を掻いた。

「こいつを見ろや」スロースロップのお友達が茶封筒を取りだした。薄暗がりではあったけれども、中身が米軍発行のイエロー・シール[*7]の軍票であることはすぐにわかる。はちきれんばかりの枚数だ。「おまえさんに預かってもらいたい。返してほしいときにゃ指図す

ずんぐりした農耕馬。

4　『フランケンシュタイン』（一九三一）以来、一九四五年時点において、ユニバーサル・スタジオは七本のフランケンシュタイン映画を製作。

5　人気子役スターの名にあやかったソーダポップ。

6　鮮紅色。赤紫、緑と合わせた配色はサイケデリック・カラーの典型。

7　ヨーロッパの解放地域で発行されていた臨時紙幣。ニセものが大量に出回った。

CamScannerでスキャン

る。イタリの野郎が、タマラより先に着いちまいそうで、金の行き先がまた面倒になりそうでな——」

「先に着いちゃいそうって、今夜の前にタマラがくるのかい」[8]とスロースロップが割って入る——グルーチョ・マルクスの声色で。

「おまえを信用してるんだ。不安にさせるようなアホを言うな」でかい男が忠告した。「憶えておけよ、やるのはおまえだ、いいな」

「あいよ」と封筒を内ポケットへ入れて、「ところでそのズートスーツはどこで手に入れた?」

「おまえさん、サイズは?」

「42、ミディアム」

「一着、都合する」そういってドンドンと屋内に戻っていった。

「ピッカピカのキーチェーンもたのむぜ!」背中に向かって声をかけたスロースロップ、いったい何がどうなってるんだろうと、その辺の一人、二人に訊いてみた。男の名はブロートヘット・ワックスウィング[9]というらしい。セレブの脱走兵で、ETO全域[10]で最悪の営倉であるパリのセルヴィエ兵営から逃げてきた。専門は、PX用配給カード偽造、パスポート偽造、独軍兵士の軍人手帳偽造など多岐にわたるが、副業として軍の火器の売却もやっている。バルジの戦闘以来、無断離隊を繰り返し、頭上からすでに死刑のリスクが迫っているにもかかわらず、夕闇が降りれば米軍基地の娯楽施設に現れる。ただしそれは西部劇をやっている場合だ。この男、「蹴り」と呼ばれる派手な悪漢ブーツに目がない。メタルスピーカーから馬の蹄の音が、異国の戦地の、ドラム缶と軍用トラックからなる百ヤ

8 Tamara の愛称は[illegible]

9 Hardy の Precious Character Names によると、Blodgett はよくあるオランダ姓で、bleod（=blood）と good（=good）から成る。

10 欧州作戦地域

ードの列に響きわたれば、それだけでワックスウィングの胸には一陣のそよ風のような心地よさが訪れる。数人のツテを手づるに、戦域内のあらゆる映画上映スケジュール表を入手しているワックスウィングは、将軍のジープだろうと裏技でエンジンを掛けてそのままフランス中部のポワティエまで乗っていく。それもボブ・スティールやジョニー・マック・ブラウンの映画[*12]を観にいくためなのだ。詰所には必ず彼の手配写真が貼ってあったろうから、何千もの憲兵の脳裏にワックスウィングの顔が刻みついているはずだが、にもかかわらず彼は『拳銃稼業』[*13]を二十七回観ているのである。

で、今夜起こっていることだが、これが第二次大戦中のロマンティックなスパイ映画の筋書きに似て、いかにもラウール邸の夜の出来事らしい話なのである。タマラがイタロに借金があり、そのかたとして阿片が届くのを待っている。イタロはイタロでワックスウィングからシャーマン戦車を一台あずかり、これを仲間のテオフィルがパレスチナへ密輸しようとしている。しかし、国境を越えるのには数千ポンドの賄賂が必要だ。そこで戦車をかたにしてタマラに融資を頼んだら、タマラはテオフィルにイタロから借りた金の一部を貸してくれた。ところが肝腎の阿片調達の雲行きが怪しくなってくる。というのも前金を渡してあった仲介人から、数週間も連絡がこないのだ。トンズラしてしまったのだろうか。渡した金はワックスウィング経由でラウール・ドゥ・ラ・ペルランパンパンに用立ててもらったものだが、そのラウールがワックスウィングをせっつきだしたのだ。というのも、例の戦車をタマラのものと思いこんだイタロが昨晩、このラウール邸にやってきて、当然の権利であるかのように戦車に乗ってどこかへ行ってしまった――それでラウールはパニクッている、と、まあ、ざっとそんな話。

11 軍の売店（PX＝ポスト・エクスチェンジ）で兵士がタバコの配給などを受けるためのカード。

12 ともに三〇年代を頂点に西部劇映画の大衆人気を盛り上げた大スター。

13 一八六〇年頃、駅馬車や小馬郵便の監視役をしていた無法者のジャック・スレイドを描く。原題 *The Return of Jack Slade*。『コロラドの決闘 *Jack Slade*』の続編（実はどちらも一九五〇年代の作品）。

バスルームで取っ組み合いを演じている男色のうち二人がスロースロップの尻を見そめ、卑猥な申し出をしてきた。バウンスとミシェルはどこにも見えず、ワックスウィングの姿もない。ラウールはしきりに馬に話しかけている。スロースロップは一人の女の子を見つけた。戦前のウォルト・フロックを着た、額も鼻も髪の毛も例のテニエルが描いたアリスそっくりというお嬢さん。[14]その隣に腰をおろそうとしたまさにその瞬間、屋外から恐怖の轟音が。ガリガリ、グォー、メキメキメキ、巨大な金属塊が立木を折り曲げているかのような音だ。脅えきった女たちがユーカリの繁みを飛びだして家の中へ駆けこんでくる、その向こうから、すべてを踏み倒して庭の青白い光の中へ出てきた、シャーマン戦車！　キング・コングの眼のようなヘッドライトをぎょろつかせ、草と敷石を無残にも踏みしだいて進軍、そして停止。75ミリ砲が旋回し、その先がフレンチ・ウィンドーを突きぬけて部屋の内部にかっちりと照準を定める。「アントワーヌ！」若い女が巨大な砲口をまじまじと見据えている、「こんなときに、そんなことをしないでよ・・・」ハッチがぱっと開いて、中から出てきた女がきっとタマラなのだろう、スロースロップは思った――あれ、この戦車はイタロに渡ったんじゃなかったの――そのタマラとおぼしきが、ラウール、ワックスウィング、イタロ、テオフィル及びアヘンの仲介人を金切声で罵りだした。「いまならさあ、全員一発でノックアウトよね。稲光の一打ちで！[15]」ハッチが閉まった――オー・ジーザス――3インチ砲弾が砲尾に装填される音。女たちは悲鳴をあげて出口へ殺到。ドラッグにいかれた連中は、首を回し、目をしばたたき、ニコリとして、種々様々なニュアンスのイエスを口にする。ラウールは馬に飛びのり逃走を計ったが、尻がサドルをとらえそこねてそのままツルリと向こう側の、闇市用のジェローの桶のなか、ラズベリー味の上にホ

14 ジョン・テニエルが描いた『不思議の国のアリス』の挿画で、アリスはおしゃれなフロック（ワンピース・ドレス）を着ているが、これはオートクチュールの父と謳われるシャルル・フレデリック・ウォルトのデザインに拠っている。

15 原文はフランス語で、coup de foudre。このフレーズは「一目惚れ」の意味で使われる。

イップクリームののったところに頭から突っこんだ。「や、やめ・・・」スロースロップが戦車の側面に走り寄ろうと決心したその瞬間、YYYBLAAANNNGGG！　戦車砲のすさまじき咆哮とともに、室内に向かって三フィートの火炎が吹く。衝撃波で鼓膜が脳の中ほどにまで引っ込む。全員壁に叩きつけられた。

カーテンが燃えている。スロースロップはパーティ客につまずき続ける。耳は聞こえず、頭もガンガン、それでも走る、煙の中を戦車めがけて――ハッチに飛び上がり、かんぬきを外したところタマラが飛び出て、もう一度みんなを罵りまくる。吹っとばされそうになったスロースロップはなんとか組みつき、エロスの誘惑に屈しそうになったけれども――タマラというのがもとより美女であるうえに身のくねらせ方がたまらないのだ――どうにかこうにか取り押さえて、戦車から引きずりおろすが、おや、なぜだ、ものすごい爆音つきの砲火を見たのに、スロースロップのペニスは勃起の気配もみせていない。フム、このデータ、ロンドンには届かないな、誰にも見られていないから。

実のところ、発射したのは不発弾で、被害は何枚かの壁に開いた穴と、〈美徳〉と〈悪徳〉とが怪しくもつれる――〈美徳〉はドリーミーな微笑を浮かべ、〈悪徳〉は当惑顔でモジャモジャ髪をかきむしっている――巨大な寓意画を破壊したに留まった。燃えあがったカーテンはシャンパンで消し止められた。ラウールは涙を浮かべ、命の恩人スロースロップの手を握り頬にキスするので、そのたびにスロースロップにジェローがべとり。タマラはラウールのボディガードに付きそわれて出てゆく。ラウールを振りほどいて、スーツのジェローを拭いているスロースロップの肩に、ふと重い手が――

「おまえさんのいった通りだ。やるのは、ユー・アー・ザ・マン、おまえだ」

「なんのこれしき」スロースロップはエロール・フリン[16]を真似て口髭をひねる。「このあいだなんか、タコにつかまったダンサーを救ったんだ」

「ひとつ違っている点はだな」とプロートヘット・ワックスウィング。「今夜のこと、これは現実だ。いつかのタコの話は、現実ではない」

「どうしてわかる?」

「おれはいろいろ通じてるんだ。何でも知ってるとは言わねえが、おまえさんの知らねえことで知ってることはいくつかある。いいかスロースロップ——おまえにも仲間が必要になる、案外すぐにな。もうこの別荘には、きちゃいけねえ——やつらの手が回るのは早えからな——だが、もしニースまで逃げおおせたら——」と、そこで一枚ワックスウィングは名刺を取りだした。チェスのナイトの絵とロッシーニ通りの住所が箔押しされた名刺だ。「封筒はそっくり返してもらうからな。ほれ、おまえさんのスーツだ。世話ンなったな」

そういい残してスッと去る。ワックスウィングには意のままに消える能力があるようだ。

ズートスーツは紫のリボンで結んだ箱に入っている。中にはちゃんとキーチェーンも。どちらも、イースト・ロサンジェルスに住んでいたリッキー・グティエレスという青年が身につけていたものだ。若いグティエレスは、一九四三年の〈ズートスーツ暴動〉[17]のさい、ウィッティアから来たアングロサクソンの自警団の車に乗っていた一団に襲われ、叩きのめされた。そのあいだLA警官は事態を眺め、大声で指示を出し、それから秩序紊乱のかどで逮捕に踏み切った。ズートスーツ一派に対して判事が下した決定は、監獄か軍隊か、どちらか選べというもので、グティエレスは入隊した。そしてサイパンで負傷し、壊疽におかされ、片腕を切断、いまは帰郷し、結婚した。妻はサン・ガブリエルのタコス・ショ

16 一九〇九〜五九。海賊、ロビン・フッド、騎兵隊など、剣戟ロマンスに活躍した口髭の二枚目スター。

17 イースト・ロサンジェルスのさらに東のウィッティアに多かった「パチューコ」と呼ばれるメキシコ系移民の不良（キザな黒人たちと同様ズートスーツを着ていた）グループと、海軍基

ップの料理場で働いているが、グティエレス自身は職がなく、昼間から飲んだくれている。…だが彼の愛用したズートは、あの夏逮捕された何千もの同志のズートと同じく、LAのメキシコ系住民の家のドアの背後に長い間誰も着ることなく吊され、それから誰かに買われてこの館へ辿りついた。まあ市場を流れて、少々の利益をもたらすのもいい。脂煙の立つ、赤ん坊のおしめが臭う部屋の中よりましだろう…窓に降ろしたシェードに毎日白い太陽の打ちつける、乾いたパームツリーと濁った暗渠に面した、蠅ばかり飛び回るガランとした部屋の中にただ吊されているよりは…

地の水兵とのケンカに端を発した民族的・人種的色彩の強い暴動で、その夏、各地へ飛び火した。

CamScannerでスキャン

□□□□□□□

〈イミポレックスG〉とは新種のプラスチックと判明、それ以上に恐怖すべきものではなかったが、恐るるに足るものではあった。芳香環と複素環をつないだポリマーであるこの新物質を一九三九年、IGファルベンの研究所で開発したL・ヤンフ博士は、時代を数年先取りする仕事を成しとげたといえる。この物質は、摂氏九〇〇度まで壊れない安定性と、充分な強度、および低い電圧低減ファクターを兼ね備えていた。構造的には「芳香環」——ヒラリー・バウンスのヘソの上で揺れている金の六角形がそれである——の緊密な連鎖に、ときおり「複素環」を埋めこんだというものであった。[*1]

〈イミポレックスG〉の起源はデュポン社でなされた初期研究にさかのぼる。プラスチックの世界には大いなる伝統をなす一本のメインストリームがあり、その流れを語るのに、デュポン社とその研究員、「偉大なる合成者（グレート・シンセシスト）」の異名をとるウォーレス・カロザースを抜きにはできない。この男が行った巨大分子の古典的研究は一九二〇年代の全体に及び、結果的にわれわれにナイロンをもたらした。ナイロンの誕生は、フェティッシュな快感をもたらし、武装した暴徒に便宜を与えたにとどまらなかった。〈システム〉の奥深いところ

1 「芳香環」は「ベンゼン環」とも呼ばれ、炭素原子六個を環状につないだもの。炭素だけではなく「環」の構成要素に別の元素や基の混じったものを「複素環」という。これらの環が無数に連結して高分子をなしたもの

で、当時それは〈プラスチック〉の中心的教義の宣言ともいえるものだった。もはや化学者は自然の意に屈することなく、分子の属性を自分たちでプランし、その通りの物質を製造していくことが可能になったのだ。かくしてデュポン社ではナイロンの製造にひき続き、ポリアミドの連鎖と芳香環との連結が図られ、ほどなく、芳香族ポリアミド、ポリカーボネート、ポリエーテル、ポリサルフェインなど一連の「芳香族系ポリマー」の誕生を見ることになる。研究の力点は多くの場合「強度」にあった。プラスチックの三つの恵みとされる「強度」「安定性」「白さ」の中でも、筆頭に挙げられるのが「強度」だったのだ。(ドイツ語でこの三語は、Kraft, Standfestigkeit, Weißeとなる。並べてみると、まるでナチスのスローガンそのもののように見えるだろう。雨にぬれた壁にこれらの言葉が落書きされていたとして、どちらのスローガンだか区別がつくだろうか？ 向こうの通りでバスがギアの歯を擦らせ、路面電車は金属音を軋らせる、人びとは無言のまま通りすぎていく、あたりの空気がしだいにパイプの煙のテクスチャーを帯びていくかのような夕暮れ時、通りすぎる人の腕は袖を通さずコートの中ですくんでいる。小人をコートの中に隠し抱いているのか、それとも新しいナイロンよりももっと誘惑的な裏地の生地の感触にふけっているのか、時間割の世界からさまよい出て・・・)。このとき、研究者の中からラスロ・ヤンフを含む数人が、論理的かつ弁証法的な提案を行った。新たに形づくられた連鎖の、ポリアミドの部分をそれぞれ円環にしていって、その巨大な〃複素環〃をベンゼン環の列と交互につないでいったらいかがかと。この原理は、他の先駆的合成分子にも容易に応用された。分子量の大きなモノマーを設計通りに合成したら、グルリと曲げて複素環をつくり、それをより〃自然〃な芳香環と重合させて一本の鎖にしていく。〈ベンゼン環＝複素環ポ

が〈イミポレックスG〉という（創作された）ポリマー重合体。

2 カロザース（一八九六〜一九三七）についての解説からここまでは有機化学史の事実。

3 ポリマー（重合体）をつくる単位となる「単量体」。

CamScannerでスキャン

リアー」のできあがりである。ヤンフが大戦前夜に考えだした仮説上の鎖状構造が、後の修正を経て〈イーボレックスG〉となって誕生したのだ。

ヤンフは当時サイコケミーAG[4]というスイス企業に勤めていた。元はグレッスリ・ケミカル・コーポレーションといい、サンド社（小学生も知っている通り、かのホフマン博士が伝説的な発見を遂げたところ）[5]から分割してできた会社である。一九二〇年代の初頭、サンド、チバ、ガイギーの三社がスイス化学業界のカルテルを結成し、ヤンフのいたグレッスリもほどなくそこに吸収されたのだが、もとよりほとんどの契約はサンド社から得ていたようである。このスイスのカルテルとドイツのIGファルベンの間をつなぐ動きは、一九二六年の日頃での協定にさかのぼる。その二年後、ドイツがダミー会社IGケミーをスイスに設立したとき、グレッスリ株の大半はそこに売却され、グレッスリはサイコケミーAGとして再編成される。かくして〈イミポレックスG〉のパテントはIGとサイコケミー双方の登録となった。シェル石油がそのパテントに加わったのは、英国のインペリアル・ケミカル社との協定によってだが、これが一九三九年のことで、スロースロップが後に調べたところ、たいそう興味深いことに、ICIとIGとの間の協定の日付はすべてその年以前になっていた。この〈イミポレックスG〉協定によって、ICI[6]はこの新物質の英連邦内における市場開発を任される。それと引き替えにIG側からは一ポンドの対価に加え、高価な便宜がたんまり図られた。ふむふむ、これはいい、サイコケミーAGは今も存在し、同じスイスのチューリッヒのショコラーデ・シュトラッセ[7]の旧住所で営業を続けている。

スロースロップはちょっと興奮して、ズートスーツについた鎖をスイングさせた。今の

4　AGは「アクフィエンゲゼルシャフト」の略。英語の「コーポレーション」に相当する。

5　一九三八年、アルバート・ホフマンはここで「LSD」を合成している。「心の化学社」とでも訳すべき「サイコケミー社」は創作だが、他の会社はすべて実在。

6　原文のスペリングは、氷の眼（Icy Eye）と洒落ている。「インペリアル・ケミカル・インダストリーズ」は一九二六年に結成。三九年までにはIGファルベンに次ぐ勢力に成長していて、両グループ間で市場分割などの取り決めができていた。

情報からは、いくつかの点がすでに明らかである。パラノイアの症状が[illegible]
あえもしなかったことが、客観的事実として集まってくるとはすごい。「ダッチ・シェル」本社のビルの屋根についたトランスミッターの助けを借りて打ち上げられるロケットには、謎の「絶縁装置」がついていて、これが〈イミポレックスG〉という物質なのだが、そのマーケティングの権利をダッチ・シェルは共同で保有している。またこのロケットの推進システムは、ほぼ同時にブリティッシュ・シェルが開発したものと、不気味なほど酷似している。そして・・・オー、オー、今スロースロップの頭の中がパッと光った。これらロケットに関する情報はどこに集められるのか。ダンカン・サンズのところじゃないか。そうだよ、チャーチルの娘婿。彼が現在勤務している軍需省のオフィスといえば、まさにシェル・メックス・ハウス*8だぜ・・・

ここでスロースロップは、忠実なるプロートヘット・ワックスウィングをお供に、シェル・メックス・ハウスに巧妙なコマンド隊の襲撃をかける。ロンドンの〈ロケット〉支局の本部オフィスそのものにだ。重装備の防備軍をステン・ガン*9で撃ち倒しながら、悲鳴を上げるWRAC*10の、熟れた秘書たちを蹴散らして（それ以外に反応しようがないでしょ、たとえ演技でも）ファイルの束を荒々しく奪い取り、火炎瓶をほうり投げる。かくして「ズートスーツの道化師」はついに敵の最後の牙城に乱入。腋の下までズボンを引っぱりあげた恰好で、チリチリに焦げた髪と、飛び散る血の匂いをただよわせて——だがスロースロップらの義憤の前で恐怖に震えるダンカン・サンズの姿はない。窓も開いていないし、ジプシー逃走の形跡もない。タロットカードも散乱しておらず、一大資本合同の意思確認書すらもない——あるのはただ、おだやかに瞬く壁にそって事務機器が機能的に並んでい

7 [illegible]

8 ロンドンはストランドの（旧ホテル・セシルの敷地に建った）アール・デコ様式のビル。元来オランダのシェルとブリティッシュ・ペトロリアムとの合弁企業の建物。

9 英国製の軽量サブマシンガン。

10 英国陸軍婦人部隊＝Women's Royal Army Corps

CamScannerでスキャン

るありきたりの光景だ。ワイアに刺し貫かれたカードファイルは角砂糖の面のよう、爆撃後のドイツに支えもなく立つ最後の壁のように脆くみえる。高い壁の上方が捻れて、折れて空から崩れおちてきそうな気配、大気の煙を払拭する風の一拭きで今にも。・・・火器の匂いが空中にただようなかに、女性スタッフの姿も見えない。機械類はカチャカチャリンリン作動するばかり。帽子を目深にかぶり直そう。ひと暴れのあとのタバコを一服してから、どうやって逃げ出すかを考えるべきときだ・・・おい、どうやって入ってきたか憶えてるか？　憶えてねえな。見てもいなかったろ。どのドアだってエスケープに通じる可能性はある、だが充分な時間がない。

しかし、ダンカン・サンズとて単なるひとつの名前だ。ひとつの機能。「どこまで上があるんだろう」と尋ねてみても意味はない。なぜならこの組織図自体が、〈かれら〉の作成したものなのだから。地位も名前もすべては〈かれら〉が書きこんだ。なぜなら──〈パラノイドのための格言〉その3──こちらが的外れな質問をしているかぎり、彼らは回答に苦慮する必要はない。

気がついたら、スロースロップは青焼き文字の部品リストを前にしている。ここから疑問が始まったのだ。**どこまで上があるのか・・・**あ、そうかー。このトリッキーな質問は、人間のことではなくて、ハードウェアにとって「どこまで上にあがれるのか」ということなのだ！　眼を細め、上から下へ注意深く欄を指でたどって、絶縁装置（Vorrichtung für die Isolierung）からさらに一段踏み上がった組み立てレベルにある装置に行き当たる。

"S - Gerät, 11/0000"

これはいかにもロケットの通し番号らしくみえるが、実際そうだとしたら、特別のモデ

ルにちがいない——ゼロが五つも並ぶというのは、いや四つ並んだものも、スロースロップは聞いたことがなかった…それは〈S装置(ゲレート)〉にしても同じ。「Iゲレート」や「Jゲレート」なら手引書にものっているのだが〈Sゲレート〉というのはない…存在してはならない文書〈SG‐1〉には、きっと書かれているのだろう…

部屋を出る。行くあてはない。胃の周辺の筋肉がスローなドラムのビートを刻む——ダンダダ・ダダダ、シンジツ・アバけ、ヨーイは・イイカ。…カジノのレストラン。入室に際して感じる抵抗値(インピーダンス)はゼロ、気温低下も肌には感じられない。スロースロップが着席したテーブルには、誰が置いていったのか、ロンドンの『タイムズ』火曜版が置いてあった。フム、これは久しぶりだ。…ページをめくる、ダンダダ・ダダーダ、イェイ、戦争は終わらない、連合軍はベルリンへ東西から迫ってる、[11] 乾燥粉末卵一ダース、一シリング三ペンス、「戦没将校」、マグレガー、マッカ＝マフィック、ホワイト・ストリート、個人弔辞欄…『若草の頃』[12]（思いだすぜ、あそこで「ペニス・イン・ザ・ポプコーン・ボックス・ごっこ」して遊んだ子は、マデリンっていったっけ、やけに小さな——）タンティヴィだ…ゲッ、おい待てよ、待てって——

「真に魅力的…控え目な…強い忍耐力で…篤信のキリスト教徒としての清廉かつ善良なる…みんなに愛されていたオリヴァー…敢然として心優しい不屈の精神はわれわれみなに勇気を与えた…ドイツ軍の砲火で窮地に陥った部隊の仲間の救出のため決死隊を指揮して勇敢に突撃し、名誉の戦死を…」弔辞を書いているのは故人の無二の戦友…セオドア・ブロート少佐、少佐かよ、テディ・ブロートが昇進したもんだ——

窓の外を見つめるが、何も眼に入らない。テーブル・ナイフを握りしめる、手の骨が折

11 『タイムズ』四月二十四日火曜の一面見出しと合致する。ヴァイスマンらのロケット隊は、三月中に本国のリューネブルク・ハイデへと撤退を強いられた（『GRC』）。

12 ジュディ・ガーランド主演のミュージカル映画。原題 *Meet Me in St. Louis*（一九四四）。

CamScannerでスキャン

れてしまうくらいに。癩病ってのは、こんな感じらしい。脳へのフィードバックがうまくいかないんだと。自分でどのくらい激しく拳を握りしめているか知る手段がないんだと。そうなんだと、癩病を病むと・・・

十分後。部屋の中。ベッドに顔を埋めている。心がカラッポ。涙も出ない。何もできない・・・

かれらの仕業だ。タンティヴィのやつを死の罠に追いつめて、〝名誉の〟戦死を選ぶ自由を与えた・・・そうやって、彼のファイルを綴じた・・・

その後、スロースロップにこんな考えがわくだろう。これぜんぶ、作り話じゃないか。かれらにしてみりゃ、ロンドン『タイムズ』に嘘ネタを流すくらい屁でもない。あの新聞も、スロースロップに読ませるために置いていったんじゃないか？　しかし、その答えをつかんでしまったらもう、後戻りはできないな。

お昼どき、ヒラリー・バウンスが目をこすり、やけにニチャニチャ笑いながらやってきた。「きみは昨晩どうでした？　ぼくのほうは凄かったよ」

「そりゃよかった」スロースロップもニコニコ顔だ。アンタのこともチェックしてんだぜ、コノヤロウ。こうして笑っているのは、単調なアメリカン・ライフを生きてきた身としては辛いところだ。ふるまいの優美さ(グレイス)ってやつが要求される。そんなもの、おれには持ち合わせがないんじゃないかと思っていたのに、どうやらちゃんと演じられる。驚いた。と同時にありがたいという気持があふれる。もう少しで泣きだしそうなくらい。いや、バウンスが、おれの笑顔にだまされたってことじゃなく、この手を、またいつか使えそうだってことがうれしい・・・

というわけでスロースロップはなんとかニースへ脱走する。海岸縁のコルニッシュ[13]をすんなり抜けて、タイヤを軽く軋らせながら、日射しに暖められた渓谷脇を登っていく。車のオケツを海辺に向けて振りながら——まんまと敵を出し抜いたのだ。浜辺で出くわした背恰好の似ている男（アシスタント・シェフのクロード）に、新品の似非タヒチ風海水パンツを貸してあげて、やつらがみなクロードを監視しているその隙に、キーを差しこんだままの黒のシトロエンを失敬した。簡単よ、そんなの。白のズートにサングラス、シドニー・グリーンストリート風のパナマ・ハット[14]の縁を揺らせて市内の道へ入っていく。早くも夏服に衣替えした軍人さんやマドモワゼルの間に溶けこんで——というわけにはいかない姿だが、ガリバルディ広場から入った脇道に車を乗り捨て、ラ・ポルト・フォスの旧市街側に立つビストロへ入り、ロールパンとコーヒーで一息ついた。さてと、ワックスウィングが教えてくれた住所は……　探し当てたそこは古びた四階建てのホテルで、通路には明るいうちから酔いつぶれた連中が寝そべっている。その小さなパンの塊のような瞼に、沈む陽が最後のひと刷毛の上薬をかけた。灰褐色の光を通して、夏のほこりが壮麗な渦をなして拡がるのが見える。向こうは夏にくつろぐ街路だ。四月の夏、ヨーロッパからアジアの戦線へ、兵員移動の巨大な渦が通りすぎていく。もうしばらく南仏の静寂にしがみついていたい兵士を毎晩、マルセイユという排水孔にこんなに近いこの街に残して。ドイツから彼らを呼び戻した紙切れのサイクローン、その渦が抜けていくほんの一歩手前に。彼らは川の流れる谷をつたってやってきた、そのうちアントワープや北の港町からの一行も流れに加わり、経路が固定化するにつれて渦全体がくっきり締まってくるだろう。……この鋭利な一瞬、ここロッシーニ通り[15]で、異国の黄昏時に味わいうる最高のフィーリングが

13 「崖の道」という意味のフランス語で、カンヌから南西へ、ニースに至る海岸道は、その美しさから「黄金のコルニッシュ Corniche d'Or」と呼ばれる。

14 パナマ帽姿のグリーンストリートを、映画『マルタの鷹』（一九四一）のカスパー・ガットマン役でも、『カサブランカ』（一九四二）のシニョール・フェラーリ役でも、見ることができる。

15 ニース駅の南（海岸側）を東西に走る。

スロースロップに訪れる。天空の光と街路の電灯の光が均衡を保つ今このとき、一番星が瞬きはじめる直前にだ。原因もなく、驚きもないままに、ある出来事が起こりそうな予感。何かが起こる——彼の人生が過去に見いだしえたどの方向とも直交する方向から。

一番星が待ちきれないスロースロップはホテルの中へ入ってゆく。埃っぽいカーペット。アルコールと漂白剤の臭い。寄りそったり離れたりして通りすがるそぞろ歩きの船員と女たち。パラノイア全開のスロースロップは、情報がもたらされるべきドアを嗅ぎ回っている。頑強な木造の部屋の中でラジオが鳴っている。階段の吹きぬけは垂直でない。妙な角度に傾いでいる。壁についた電灯は土色か、さもなくば木の葉色でそれ以外の色はない。最上階まで上がっていくと、替えシーツを抱えたメイドがひとり、ちょうど部屋に入っていくところだ。老いた母親風の容貌——薄暗がりの中でシーツの白さが眩しい。

「なぜ抜けだしてきたのよ?」悲しげなささやき声は、まるでどこか遠くの受話器を通したかのよう。「みんなあんたの力になりたがっていたのに。悪いことなどするもんですか・・・」ジョージ・ワシントン風に全体をクルリと巻きあげた髪をして、斜め四五度に構えている。彼女の眼差しは公園ベンチのチェスプレイヤーのように忍耐強い、とても大きく優しい鷲鼻に、明るい瞳、澱粉質の体にがっしりした骨組み。革靴のかかとはわずかに反っている。極端な大足に赤白ストライプの靴下を履いたところは、お伽の国の住人を思わせる。この妖精は、睡眠中に靴を作ってくれるばかりか、掃除もすませ、眼がさめればポットの用意もしてあって、窓辺に花まで飾ってあるのか——

「いま何て言いました?」

「まだ時間はあるのさ」

「……有機な……、言わせてください、ぼくは彼らに友達を殺されてるんだ！」しかし証拠はあるのか。『タイムズ』紙に、きわめて一般的に掲載されていただけじゃないか……そのうちタンティサィ本人がひょいと店口に現われて、よう元気かいなと、照れた笑顔を見せないとも限らない……なんだよ、タンティサィ……サマエどこ行ってたんだよう。

「この僕くが、どこ行ってたかだって？　そりゃいいや」ふたたび時を照らすスマイル。世界を解き放つような笑み……

ワックスウィングがくれた名刺を見せつけたら、老女の口元が崩れ、驚くべき笑みに変わった。夜の新たな電界の下、頭蓋骨にまだ二本だけくっついている前歯が光る。そして親指で合図して彼を壇上に進めていくと、今度は指をVの字に開いて見せた。Vサインなのか、それとももっと遠くの国の、ミルクを腐らす魔物に向けての呪いなのか。いずれにせよ、老女は冷ややかな笑いをやめない。

壇上とは屋根の上だ。中央にペントハウスらしきものがある。アパッシュ風のもみあげを生やした若い男が三人、革で編んだ袋に鉛の詰め物をしている。若い女がひとり、入口の前にすわって細い煙草をふかしている。正体不明の匂いだ。「迷ったのね、モナミ（マイ・フレンド）」

「どうなんだろ」ここもワックスウィングの名刺の出番だ。

「アー、ビアン……」一同が脇にどいて、部屋に足を踏み入れたスロースロップは一瞬目が眩んだ。カナリア・イエローのボルサリーノ帽、足先が漫画みたいにプーッと膨れたコルク底の靴には、サドルステッチがワンサカあって、その配色がみな（ブルーとオレンジ、永遠に人気のマゼンタとグリーンという）補色関係になっている。葉巻きの煙幕に包まれた電話口の声にまざって、よく公衆便所から聞こえてくる、苦痛が緩和されたときのうめ

き声も、聞こえてくる。ワックスウィング本人はいないが、ひとりの同僚が彼の名刺に眼を留めて、騒々しい取り引きを中断させた。
「何が必要なんだ」
「身分証明書、チューリッヒまで行きたい。スイスへ」
「明日だな」
「寝場所もほしい」
男は階下の一室の鍵をわたす。「金はあるのか?」
「あまりない。いつとは約束できないが——」
数える。睨む。札の耳に指が走る。「ほらよ」
「これは・・・」
「心配するな、貸し付けじゃない。空から降ってくるんだ。いいな、表には出るな、酔っぱらうな、ここの女に手を出すな」
「おー・・・」
「あした会おう」と言って商売の話へ戻る。
安息のない一夜。十分と同じ姿勢で寝ていられない。虫どもが散開部隊を編成し、眠りの深さが一定値に達したところで、彼の体に突撃をかける。酔っ払いがドアを叩く。酔っぱらいと、死の国からの来訪者。
「ようタイロン、開けてくれ。ダンプスターだ、ダンプスター・ヴィラード[*16]だ」
「誰だって?」
「今夜はまたやけに冷えるなあ。すまん、押しかけたりしたくはないんだが、これ以上ひ

16　130ページで言及されたハーバード時代の友達。

と嫌に厄介かけたくない……でもな……寒いんだ……今までずっと遠くの……」
強烈なノック。「ダンプスター――」
「そうじゃねえ、マレー・スマイルだ。基礎訓練のクラスでとなり同士だったじゃねえか、第八四中隊だよ。忘れたか？　軍籍番号は二番しか違わなかったぞ」
「ダンプスターを泊めないといけないんだが……あいつ、どこ行ったんだ。おれ、眠ってたのか？」
「おれが来たってこと言うなよ。おまえは戻らなくていいと知らせにきたんだ」
「ほんとか？　戻らなくていいと言われたのか？」
「大丈夫だ」
「わかった、しかしかれらが言ったのか――大丈夫だと」沈黙。「おい、マレー」沈黙。強風が建物の鉄を鳴らす。下の街路で野菜の箱が転がっていく音。木の、空虚の、闇の音。今はきっと午前四時だろう。「帰らないと、やばい、遅れる……」
「ノー」単なるささやき声。……だが彼女の「ノー」は、彼の中から去っていかない。
「誰かいるな。ジェニーか？　ジェニーが言ったのか？」
「そうよ。ダーリン、うんと探してたんだから。うれしいわ」
「でもおれは……」彼と彼女が一緒にカジノで暮らすことを、〈かれら〉が許すなんてことがありえるだろうか……？
「だめ、できない」しかし、どうしてそんな声をしている？
「ジェニー、おまえの家の近くに落ちたって聞いてさ。正月の二日の日……ロケットが……すぐに行こうとしたんだ、おまえが心配でさ、しかし……行かなかった……そしたら

CamScannerでスキャン

〈かれら〉にカジノへ連れていかれて・・・」
「大丈夫よ」
「だめなの、彼らのところに戻っちゃだめ」
流れのどこかに、サカナが二匹隠れているはず。水の屈折率の関係で見えないだけだ。カッチェとタンティヴィ、訪ねてきてほしかった。ドア越しに届く声を「曲げて（ベンディング）」[17]みたらどうかと試みる。ブルース・ハープでやるように。だがうまくない。彼が望むものは、深くにありすぎるのか・・・
夜が明ける少し前、激しく、鉄のように硬いノックの音がする。このときはスロースロップも返事をするなどというバカはしない。
「おい、開けろ」
「MPだ、開けろ」
アメリカ人、田舎出の声だ。かん高く、情け容赦ない。ベッドの中で身を堅くする。スプリングの音ひとつで一巻の終わり。生まれて初めてかもしれない。アメリカ人でない人間にとって、アメリカ人の声がどう聞こえるのかを自分の耳で聞いたのは。何がそんなに驚きだったのか、あとになって思い浮かんだ。連中の狂信ぶり――単に力を頼みにして動くだけじゃない、計画通りに事を進める窮屈さ・・・これはずっと前にナチの性格として、あるいはとりわけジャップの性格として、教えられたものだ――われわれはつねにフェアプレイを演じると――しかし今ドアを叩いている二名は「BANZAI!」を叫ぶジョン・ウェインのクローズアップ〈映像のアングルは彼の目のつりあがり[18]を強調している、

17 微妙に音程を「曲げる」（特にフラットさせる）のは、黒人音楽でよく使われる感情表現法。

18 「つりあがった目」

ジョン・ウェインの目がこんなだったとは、ヘンだな、気づかなかった〉を見せられているみたいに気が滅入る。

「おいおい、レイ。あいつ、行ってしまうぞ――」

「ホッパー！　このアホウ、戻って来い――」

「拘束服なんかもう、二度とごめんだもーんねえぇ・・・」MPたちが後を追う、角を曲がったホッパーの声がうすれゆく。

スロースロップに夜明けが訪れる。文字通りの夜明けが。ここは〈外〉。その最初の日。初めての自由な朝。黄褐色のカーテンを通して、自由ってやつ、だろ？　彼は今やっと眠りに落ちる。戻る必要はない。正午近く、合鍵で入ってきた若い女が一式の書類を渡してくれる。これから彼は、イアン・スカッフリングという名のイギリス人従軍記者だ。

「チューリッヒにいる仲間の住所よ。ワックスウィングから幸運を祈る、ですって。それと、なんで今までかかったのかって」

「その質問に答えろってか？」

「自分で悩め、って言ってたわ」

「なあ、聞かせてくれ」今になってそのことに気づいた、「なんでみんなおれを助けてくれるのよ。無料奉仕でさ」

「とにかくパターンがあって、それをこなさないといけないの。今のあんたもパターンの中にいるわけよ」

「はん・・・」

だがもう女の姿はない。スロースロップは部屋を見回す。昼間の光で見ると特徴もなく

は日本兵の蔑視的ステレオタイプ。

CamScannerでスキャン

単にみすぼらしいだけだ。こんな部屋、ゴキブリも居心地悪く思うだろう。……この自分も、ルーレット盤に乗ったカッチェと同じく、カチカチカチと次から次へ部屋を変えていくことになるんだろうか。風が、あるいは絶望がたまったら次へ移動する。だが逆向きはありえない。ロッシーニ通りとなじみになる時間もない。窓の向こうは叫び声。料理のうまい店はどこよ、気の早い夏の日に、みんなが口笛を吹いていくあの歌の名前は何だ……

一週間のち、長い汽車旅を経てスロースロップはチューリッヒに到着。居心地よさそうに居すわった霧のなかを、孤独な金属の車体が、分子合成を真似て、切れたりつながったり、くっついてさらに長くなったりと連結ゲームを繰り返すあいだ、心はアルプスと霧の幻影、渓谷とトンネルの幻想を出たり入ったりの数日間だった。壮絶な勾配を骨を軋らせ登っていく機関車、暗闇にも朝の緑の岸辺にも聞こえるカウベル、湿った牧草地の匂い、どこかの線路の工事に出かける無精髭の一団、レールの筋がタマネギを縦切りにした断面のようになった操車場での長い待ち時間、グレイの荒涼とした場所、汽笛の夜、連結、衝突音、側線、暮れなずむ山腹で目をこらす牛たち、列車の通過を踏切りで待つ護送部隊。国の違いはさだかでなく、連合国か枢軸国かの違いすら曖昧で、ただ〈戦争〉に徴用された同じひとつの風景があるばかり。そこでは〝中立国スイス〟というのも、どこか口はばったく感じられる。〝フランスの解放〟とか〝全体主義のドイツ〟〝ファシストのスペイン〟というのと同じで、皮肉なしには使えない……

〈戦争〉は、おのれのイメージに合わせて時間も空間も再構築した。鉄道も以前とは別のネットワークをなす。一見破壊されたように見えて、実は別の目的に鉄道を再編する企て

が進行中だ。その中を初めて走りぬけたスロースロップはいま、大いなる意図の前翼を感じている……

チェックインしたホテル・ニンバスは、チューリッヒのキャバレーが集まったニーダードルフ地区の、名の知れない通りに面している。部屋は屋根裏で、昇降には梯子を使う。窓の外にも梯子があったので一応安心だ。夜になって街に出て、ワックスウィングのコネを探す。リマ川を上っていった橋の下、大小のスイス時計と高度計でごった返した部屋にその男はいた。セミヤヴィンというロシア人。窓から湖川に浮かぶ船の汽笛が聞こえてくる。上階からはつっかえ気味の、甘美な歌曲(リート)を練習するピアノの音。淹れたばかりのお茶にリンドウ根のブランデーが注がれる。「まず理解してほしいんだがね、ここではすべてが専門にわかれている。腕時計なら、こっちのカフェだし、女だったら別のところ。毛皮も黒テン、白テン、ミンク、その他、別々だ。ヤクにしても同じだよ。覚醒、鎮静、向精神。……あんたが欲しいのは何だね?」

「ええと、情報かな?」なんだよ、このお茶、モクシーみたいな味だ。

「あんたもその手合いかよ」不愉快そうな一瞥。「最初の大戦前は単純だった。あんたは知らないだろうがね。ドラッグとセックスと贅沢品を商ってりゃよかった。あの頃、紙幣関係はサイドでやってただけだし、〝産業スパイ〟なんて言葉もなかった。だがおれの生きてる間に変わった――たいへんな変わりようだ。ドイツのインフレが起こった時分に足を洗っときゃよかったんだろう。なにしろ、ゼロの数字がここからベルリンまで並ぶって感じだった。自分に向かって言ったもんだ、『なあセミヤヴィン、ほんのいっとき現実から逸れてしまっただけだ。小さなイッダッってやつよ、心配いらない。今までどおりにき

ちゃんと振る舞え——強いキャラクターで、精神衛生をしっかりして、勇気だ、セミヤヴィン——そのうちすべて正常に戻る』と。そしたらどっこい、何かきたと思うね、あんた」
「何だい」
悲痛なため息。「情報だ。ヤクやオンナのどこが不足なんだ？　世の中が狂うのも当たり前だな、情報なんてのだけがリアルな交換媒体になっちまうんだから」
「煙草がその役をしてると思ってたけど」
「おまえさん、夢を見てるんか」セミヤヴィンは市内のカッフェや会合場所のリストを取りだした。「諜報、産業関係[19]」の項目の下には三件の名があった。ウルトラ、リヒトシュピール、それにシュトレゲリ。リマ川の両岸にわたって、距離をおいて分散している。
「歩かせられるな」スロースロップはスーツ服の特大ポケットにリストをしまいこんだ。
「そのうちもっと楽になる。ぜんぶ機械がやってくれるわ。情報マシーンってな。あんたは未来のウェーブだよ」
三軒のカッフェを動き回るシャトル運動の日々が始まる。おのおのの店でコーヒーを注文して数時間。食事は日に一回、〈民衆食堂〉でチューリッヒ産のボローニャ・ソーセージとレスティ・ポテトを食らうだけ……しかし目にするのは紺のスーツを着込んだビジネスマンの群れと、何マイルもの氷河と雪上を直滑降してきたばかりの雪焼けスキーヤー、キャンペーンもポリティックスも耳に入れず、読むものといえば温度計と風向計だけの彼らにとって、雪崩と氷塊が恐怖であり、上質のパウダースノーを見いだすことが勝利である……油の沁みた革ジャケットやボロの作業衣をはおった外国人、出身は南米だろうか、毛皮のコートにくるまって陽ざしのもとで震えている者もいれば、大戦勃発時にどこかの温

19　これらの店のうち、三つめの Strägeli は『ドイツ神話学』に出てくるスイスの一種の悪戯霊の名。二つめの Lichtspiel が「光のたわむれ」だとすると、『Ultra』も可視光線に対する「外の光」のイメージか『GRC』。

泉地をぶらついていて捕らえられ、以来ずっとこの街にいる年配の心気症患者もいる。むっつり口を閉ざしたままの長い黒ドレスの女も、うす汚れたオーバーコートを着てニッコリする男も・・・そして狂人たち、彼らは週末の休暇をもらって高級な癲狂院から出てきたのだ――スイスの精神病患者さんにもスロースロップは知られている、薄暗がりの通りを行き交うひとつの顔として。無数のカラーに混ざって今日のスロースロップの召し物はすべて白だ。靴もズートも帽子も白、アルプスの雪の斜面の墓地みたいに真っ白。・・・しかも彼は〈町の新たな標的〉だ。彼にたかる産業スパイの第一波。みんなほとんど区別がつかない――癲狂院から暇をもらった狂人たちと同じに見える。

《街へ出てきたルーニーさん》

(コーラスラインは通常の男女別の列ではなく、看視人と狂人にわかれる。舞台上には看守・狂人/男・女を掛け合わせた四種が存在する恰好だ。ほとんどは白縁の黒メガネをかけているが、これはファッションではなく雪眼を病んでいること、施設の清潔さを歌い上げることに加えて、心の闇黒を表すことも意図されていると思われる。ただし、見かけはみんな楽しげで、リラックスし、堅苦しいところはない・・・抑圧の徴しは見えない。服装にも区別がないので、舞台袖から一斉にとび出してきて歌い踊る集団の中から看守と狂人を区別するのもむずかしい)

ほうら来た来た、ルーニー軍団
みなさん扮装して陰謀ですか
こっちはそりから笑いとヨダレをこぼすだけ

休日のコビトさんとおんなじだ
そうさ、オイラは（アタシは）…

施設を出てきたルーニーさん
心配するこた、なあんもない
脳をごしごし洗濯屋
魂は愉快な遊園地
ルーニーだって休暇をもらや
心の闇も吹っ飛ぶの
狂っていてもシャープなの
タップの切れを聞いてごらん
帽子まわすよ、投げとくれ
お代は涙か、仏頂面か
きみの心にとりついた
恐怖も一緒にいただいてこう
狂人の言うこたぁ、マチガイない
人生（ライフ）はとってもラッタッタ
ハグしてキスして、ラッタッタ
ラダダ、ヤッタヤタ、トラッタッタ…（次のセリフの最中もバックでハミングが続く）

最初の狂人（ナット）（あるいは看守（キーパー））：びっくりするような取引だぜ、あんたアメリカ人だよな、と思ったよ、顔を見りゃどこの出かはわかるって。ヘエーイ、いいスーツ着てるじゃんか。

20 路上でやっているイカサマ賭博。誘いこまれて、三枚のカードの一枚に賭けるときっと負け

その白さじゃ氷河の高いところへ登っちゃえば誰にも見えねえよな！　それでだ、あんたも、道ばたで物売りにいろいろ誘われるだろう。やだよな、そういうの。サイドウォークの「スリーカード・モンテ」[20]みてえなのはよ「ここでしばらく舞台上を行きつ戻りつ、一本立てた指を動かしながら、「スリーカード・モンテ、オン・ザ・サイドウォーク」と連呼する。繰り返し繰り返し、続けられるかぎりは、しつこい一本調子で歌いつづける」。ありゃおかしい。誰にもおかしいってすぐわかる。ない袖を振って、儲かるかのように話を仕組むんだから。そりゃいかん。世の技術者や科学者が口を揃えて反対してきたはずのことだろ、「声をひそめて」「永久運動」はありえない、と。うちらはそれを〈エントロピー・マネージメント〉と呼んでいるのさ——ほら、これがうちの名刺だ——たしかにね、彼らの言うことにも一理ある。少なくとも、いままではな[21]・・・

二番目のナットかキーパー：あんたも聞いたことあるでしょ、ガロン当たり二〇〇マイルも進めるキャブレター、永遠に切れ味の鋭いカミソリ刃、絶対減らない靴底、分泌線を傷めるどころか調子をよくする殺鮮の錠剤、砂の上も走れるエンジン、羽ばたき飛行機、ロボットのバップ奏者——こいつは鋼綿でつくったやぎひげを持ってる[22]——カッコウはいいし、それはいいんだが、これはちょっと一ひねり考えないとダメだ。いいか。ライトニング・ラッチ、あんた自身を開くドアっていうのはどうだ。

スロースロップ：おれ、一眠りしようかな・・・

三番目のナットまたはキーパー：二酸化炭素の大規模な還元[23]で、大気からダイヤモンドをつくりましょう。

る。

21　ガソリンエンジンなどの熱機関は熱エネルギーを運動エネルギーに変換するが、熱力学の第二法則によって、エントロピーが常に増大するため、一〇〇パーセントの変換効率はありえない。したがって永久機関は存在しない——なんとかエントロピーの増大を押さえ込まない限り。

22　バップ・ファンの間には、セロニアス・モンク風の「ゴーティgoatee」と呼ばれるあごひげが流行した。

23　化合物から酸素原子をとるのが「還元」。ダイヤモンドは炭素Cの結晶だが、CO_2の還元によって作ろうというのは狂人の夢にすぎない。

CamScannerでスキャン

もしスロースロップがこういうことに感じやすい男だったら、襲ってきたこの第一波を侮辱的だと思っただろう。なにしろジェスチャーたっぷり、当てこすりもたっぷり、絡みつくように通りすぎてゆくのだ。だがスロースロップはこの波を動じずにさばいてみせた。ややあって、次は本物がやってきた。最初はゆっくり、だが次々と、集まってくるわくるわ。合成ゴム、ガソリン、電子計算機、アニリン染料、アクリル、香水（サンプル・ケースの小鞄の中には盗んだエキスがはいっている）、百人委員会メンバーのさまざまな性的趣味も、工場のレイアウトも、コードブックも、コネも献金も——欲しいと言えばなんでも出てくるのだ。

そしてついに……ある日スロースロップがシュトレゲリで、朝から紙袋に入れてずっと持ち歩いていた焼きソーセージと厚切りパンを食べていると——どこからともなく、マリオ・シュヴァイツァーなる人物が出現する。フロッグ留めの緑のベストを着て、「アッホー、アッホー」と二時を告げるカッコー時計の中からでも現れたのか、果てのない廊下の暗がりを背に、スロースロップに運の転換をもたらすべく。「おい、ジョー」とマリオが呼ぶ。

「へイ、ミスター」

「人違いだろ」食べ物で口をいっぱいにしたスロースロップが答える。

「L、S、Dに興味はないか」

「ポンド、シリング、ペンスかい？　金融関係なら、来るカフェが違うだろ」

「違う国に来てしまったたか」シュヴァイツァーが少しばかり悲しそうな顔をした。「わたしは、サンドの者なんだが」

「そうか、サンド社かい！」スロースロップが声を張りあげ、椅子を引っぱりだして男を掛けさせる。

　実際シュヴァイターはサイコケミーAGに内通する男だった。〈カルテル〉内を自由に動き回って、トラブルをシュートする。日雇いで働きながら、サイドでスパイをしているわけだ。

「そうだな」とスロースロップ、「L・ヤンフについて知りたい。それと、〈イミポレックスG〉のこともだ。やつらが知ってることなら何でもいい」

「げえぇっ――」

「何だいその声は？」

「そんなもんに手を出したらイカンです。そもそも専門が違うって。インドール環[24]の専門家しかおらんところで、ポリマーを開発しようなんてムリでしょうが。われわれは北の巨大な親会社に、毎日最後通牒をつきつけられてるんですよ、ヤンキーさん。〈イミポレックスG〉というのが、社にとっての永遠のアルバトロスでね、呪うべき憑きものなの。日曜にヤンフの墓につばを吐きかける儀式の執行を専門にする副社長を置いてるくらいなんだから。おたく、インドール系の人たちを知らんでしょ。とんだエリート主義者ですよヤツラは。自分らのことを、ヨーロッパの弁証法的展開の末端に位置していると思ってる。つまり、彼らが扱う麦角(ばっかく)病で枯れた穀物[25]っていうのが、箒の柄にまたがった魔女から、村の乱痴気騒ぎ、アルプスの習曲に埋もれて過去五百年、幻覚をみない日はない州(カントン)――それらの長い伝統に連なるもんで、彼らは偉大な伝統の守り手として、自分たちを貴族のように思っとるんですわ」

24　LSDやシロシビンなど、向精神性のドラッグに共通する「基」で、ベンゼン環とピロール環がくっついた恰好をしている。

25　LSDの正式名は「リゼルギン酸ジエチルアミド」。このリゼルギン酸はライ麦などに麦角病をもたらすカビから得る。

CamScannerでスキャン

「待ってくれ・・・」ヤンフは死んだのか？「いまヤンフの墓と言わなかったか？」生きてるのと死んでるのとで、スロースロップにとっては大違い——かというと、実のところ、あの男を生きた人間と感じたことは一度もなかった——

「ユトリベルク[26]の山の上だぞ」

「あんたは——」

「なんだい」

「ヤンフには会ったの？」

「こっちはまだ若すぎた。しかしサンドのファイルにはヤンフ関連のデータが大量に整理してある。あんたの望みのものを仕入れるのは一仕事だった」

「で・・・」

「五百」

「五百何？」

スイス・フラン。五百なんて数のカネは、どの通貨でも持っていない（心配の種なら五百くらいはありそうだけどね）。ニースで手に入れた金もほとんど底をつきそうだ。彼はセミヤヴィンの家に向かう。ゲミューゼの橋を歩いて渡る。これからはどこへいくのも歩きだ。手にした白ソーセージにパクつくと、次にこいつにありつけるのはいつかと心細くなる。

「まずだな、質屋に行って、そいつをカタに何フランか調達したらどうだ」と、セミヤヴィンがズートスーツを指さす。冗談じゃない、こいつはダメだ。セミヤヴィンは奥の間へ行ってごそごそしていたかと思うと、仕事着をひとかかえ持って出てきた。「目立つ恰好

26 チューリッヒ市西方にあって市街を眺望できる山。

CamScannerでスキャン

はそろそろ控えたほうがいいんじゃないか。明日もう一度来いって。何かいいものを探しておくからさ」

白のズートを小脇にまるめて、今日は人目に立たぬイアン・スカッフリングのお出かけだ。ニーダードルフの中世の午後へ、落陽の射す石壁が、いま焼き上がりそうなパンに見える。まいったぜ、事の次第が見えてきた。タマラとイタロを巻きこんだ錯綜の渦におれも深く深く巻きこまれ、出られなくなっちゃうの……

ホテルの通りへ曲がろうとしたとき、影だまりに、黒のロールスがエンジンをふかして停まっているのが見えた。遮光性のウィンドーは夕方の薄暮の中では中の様子がまったく見えない。こんなカッコいい車を見るのは久しぶりだ。好奇心がうずく。ちょっと見に行くくらい……やっぱりまずい。というのも、

〈パラノイドのための格言〉その4――おまえは逃げる、彼らが捜す。

ズーン、ディリルン、ディリディッタッタッタ、ヤッタッタッタ　ウィリアム・テルの序曲がバックの暗がりに流れてきた。あのハーフミラーの窓からお兄さんがこっちを覗いてないことを願うだけ――ズイーン、ズイーン、疾走開始、角のところシュイッと曲がって横道を駆けぬける、追ってくる音は聞こえないが、しかしあのロールスってのは、キング・タイガー戦車以外で路上で一番静かなエンジンだというじゃないか……

ホテル・ニンバスも、もはやこれまでか。足がそろそろふらつきだした。ルイーゼン通り[27]にたどりつき、閉店間際の質屋に駆けこむ。ズートスーツを質入れし、わずかばかりのキャッシュを得る。一日か二日分のソーセージにはなるだろうか。あばよ、ズート。そのときなんとまあ店じまいの早い街であることか。今夜のねぐらはどうしたらいい。

27 チューリッヒ市街北西部、工業地帯方面の道路。

一瞬、楽天的な考えに誘われてレストランに飛びこみ、ホテル・ニンバスのデスクに電話をした。「アー！　イエース」とスロースロップはイギリス英語で、「ずっとロビーで待っていた英国人がいたと思うんだがね、今もまだいるかね…」

しばらくして電話口から、上品で遠慮がちの声が「アー・ユー・ゼア？」と言ってきた。その声はあまりに天使のようであって、怖じ気づいたスロースロップはたまらず電話を切ってしまった。その場につっ立ち、自分のほうを見ている食事中の客の目をひとりひとり見返す。――やっちまった、しくじった、これで〈かれら〉は、おれが気づいていることを確信しただろう。自分のパラノイアが手におえなくなっているだけだという可能性もありはするが、それにしては偶然の一致が頻繁すぎる。そのうえすでにスロースロップは、〈かれら〉の計算ずくの無垢の装い方が、耳で聞いてわかるのだ。それが〈かれら〉のスタイルで…

ふたたび街の中。精密な銀行、教会、ゴシック建築の入り口が、彼のわきを重々しく過ぎ去る。もうホテルには戻れない、あの三軒のカフェもアウトだ。…夕暮れ時の紺を着込んだ永遠のチューリッヒ市民が行き交う。たそがれる街の、深まる紺。…スパイもディーラーも、今はみんな屋内だろう。セミヤヴィンを訪ねてもいけない。ワックスウィングの仲間内にはあれだけ親切にしてもらったのだから、危険にさらしちゃ申しわけが立たない。この街で、よそから来た人間はどのくらいいるのか、その総重量はどのくらいか。リスクを冒して別のホテルに入ってみる価値があるか。おそらく、ない。寒くなった。風はすでに湖から吹いていている。

気がついたらカフェ・オデオンまで流れ着いていていた。偉大なワールド・カフェのひとつ

で、ここの「スペシャル」はどこにも書いていない——それを書きとめた者もいない。レーニン、トロツキー、ジェイムズ・ジョイス、アインシュタイン、みなここの店外のテーブルについた。この男たちにどんな共通点があったのか、ここに来ることにどんなメリットがあったのか……おそらくそれはなんらかの形で人民（ザ・ピープル）と、道行く人びとの可死性（モータリティ）とかかわることではなかったか。ここからは人びとの欠乏と絶望が慌ただしく交差するのが見える……ここでは弁証法もマトリクスも元型（アーキタイプ）も、ときどきは、すべてひとつに交わってプロレタリアートの血に還ることを必要としている。大衆の体臭へ、テーブルを挟んでの無意味な叫び合いに、その欺きの人生と最後の希望へ。そこへの回帰がなくてはすべては埃を被ったドラキュラ性に陥るほかはない、西欧の太古からの呪いから這い出られない……

コーヒー代くらいは払えそうだ。スロースロップは店内に入り、入り口に正対した席をとる。十五分後、早くも二つ先のテーブルからスパイの合図。緑のスーツを着た、色の浅黒い、カーリーヘアの異邦人だ。そいつも同じように入口に向かってすわっている。テーブルにはスペイン語とおぼしき古ぼけた新聞。その開いたページに、奇妙な政治風刺漫画が見える。ドレスを着てカツラをつけた中年の男たちが列をなして交番に押しかけている。中では警官が腕に何か白いものを……抱えているのはパンじゃなくて赤ん坊だ。おむつの上にLA REVOLUCIÓN 革命と、その子の名前が貼ってある……そうか、押しかけた政治家たちは、必死に子どもを取りもどそうとする母親のやかましさで、この「革命ちゃん」が大事なわが子であると主張しているのだ。で、この風刺画を使って人の反応をうかがっている緑のスーツを着た男、名をフランシスコ・エスクアリドーシというアルゼンチン人であることがわかった。漫画のキメの文句は行列の末尾にある。そこにアルゼンチンの大詩

人レオポルド・ルゴーネス*28がいて、こんなことを宣っている──「その子が〈原罪〉の汚物からどれだけ自由か、詩にしてうたってみようかね…」言及されているのは一九三〇年のウリブル革命*29──この新聞は十五年も前のものなのだ。これを見せてエスクアリドーシはスロースロップからどんな反応を期待したのか知らないが、得られたのは無知だけだった。だがそれで問題なし、このアルゼンチン人はたちまち打ちとけ、軽い調子で話しだした。彼には一ダースほどの仲間がいて、中には奇人ぶりで国際的に知られる女傑グラシエラ・イマゴ・ポルタレスも含まれる、数週間前にマル・デル・プラタ*30でUボートの中でも初期のヴィンテージ物をハイジャックし、それに乗って大西洋を渡ってきた、戦闘が終わったらさっそくドイツに政治亡命したい…

「ドイツだ？　あんた頭おかしいのと違うか。ドイツは今めっちゃくちゃだぞ」

「いやいや、俺たちが国に残してきたカオスに比べりゃ遠く及ばんね」と悲しそうにアルゼンチン男は返した。口もとに何本も長いシワが浮かぶ。このシワは、何千頭という馬と暮らして若馬の不幸に接し、リバダビア（真の〈南〉はここに始まるという町）の南に沈む太陽を見すぎたゆえのシワだ。…「軍の大佐らの政変が起きてからメチャクチャの混乱だ。いまはペロンがのし上がってきていて*31…我らの最後の望みはアクシオン・アルヘンティーナ*32だったが」こいつ何を言ってるんだ、おれは腹が減りすぎてる「…クーデターから一ヶ月して弾圧された…今はみんなが成り行きを見守っているときだ。デモには出るが、惰性だよ、希望なんかもってない。俺たちはペロンがもうひとつ大臣職を手に入れる前に動くことにきめた。おそらく戦時相に就任するだろう。ペロンはすでに、デスカミサドス*33を掌握している。これで軍を掌握したも同然だ…時間の問題だな…ウルグア

28　ジャーナリストとしても、政治活動家としても知られるモデルニスモの代表的文人。一九三八年に自殺している。

29　大不況下のアルゼンチンで起きたホセ・ウリブル将軍一派の軍事クーデター。

30　ブエノスアイレスの南三〇〇キロ、外洋に面した港町。

31　フアン・ペロンは一九四三年のラミレス将軍の政変で権力を得てから、人民の英雄というイメージで実力を顕在化。物語の現在（四五年春）まだ衝突は起きていないが、すでにラミレス大統領にとって替わった存在になっていた。

32　[illegible]

イへ出て様子見をするというやり方もあったが——アルゼンチンじゃよく使う手だ——だがやつの天下は長いこと続くだろうとも考えた。モンテビデオは亡命失敗者の挫折と失望でいっぱいだ・・・」
「それにしても、ドイツへ行くってのはないだろう」
「*Pero ché, no sós argentino*（ペローチェ・ノ・ソース・アルヘンティーノ）——アルゼンチンの人間じゃないオマエに何がわかる・・・」
そう言って、スイスの精密工学的な街路の傷跡の遠く向こうに目をやる。国に残してきた〈南〉を求めているのか。おっと、スロースロップ君、それはきみの知ってるアルゼンチンじゃないぞ——ボブ・エバリーが、どこのバーでも麗しのタンジェリンのために祝杯をあげてるようなのとは別の国だ。*34 ・・・エスクアリドーシの胸の中にはこんな思いがたぎっている——ヨーロッパという蒸溜器の、そのゴボゴボとモクモクした蒸気から生成された魔法の凝結物の中で、俺たちがいちばん希薄で、一番危険で、世俗的な目的への使い勝手は一番すぐれたやつらなのだ。・・・あんたらと同じで、俺たちも土着民を抹殺しようとした、つまり自分たちで好みの、閉鎖的な白い現実を作っていったんだが、その挙げ句、いつのまにか煤けたラビリンスができてしまった。真昼のバルコニーや、中庭と門を見りゃわかるだろう。濃密さの極致だろう、あれは。あの複雑怪奇さは、忘れようにも忘れさせてもらえない。・・・だが実際に口をついて出てきた言葉は、「あんた、腹がすいてるみたいだな。食ってないんだろ？　俺はこれから夕食だ。もしよかったら喜んで・・・」
クローネンハーレ*35の二階にふたりは空席を見つけた。夕食時の混雑はおさまりかけている。ソーセージとフォンデュ。スロースロップの腹が鳴る。
「ガウチョの時代、俺の国はまっさらの紙だった。想像力の及ぶかぎり無限の、囲いなき

タ集団。

33 文字通りには「シャツを着ていない」という意味の descamisados とは、アルゼンチンの最下層の人びとを指す。反ペロン派が、彼の支持層を侮蔑的にこう呼んだところから広まった言葉。

34 ミュージカル映画『艦隊入港 The Fleet's In』（一九四二）でボブ・エバリーが歌った「タンジェリン」の歌詞を踏まえている。

35 レー通りの由緒あるスイス料理店。

CamScannerでスキャン

パンパスが広がっていた。馬に乗ってガウチョが行けば、その土地は彼のものとなった。だが田舎の覇権をブエノスアイレスが握ろうとしてから、所有に関する神経症が盛りあがり、それが田舎を侵しはじめた。フェンスなんてものが建って、そのぶんガウチョの自由が侵害された。国家的悲劇だ。だだっ広い平原と空しかなかったところに、俺らは取り憑かれたように迷路(ラビリンス)を作っている。まっさらの紙にどんどん複雑な模様を描いていく競争さ。[36] 遮るもののないオープン状態に耐えられないんだな。広所恐怖症か。ボルヘスを見ろ。ブエノスアイレス郊外を見ろ。暴君だったファン・マヌエル・デ・ロサス[37]が死んで一世紀になるが、ロサス信仰は衰えちゃいない。街の通りの地下窟で、スラムのタコ部屋や暗い廊下で、フェンスの間の隘路や鉄道の網の目で、今や倒錯と罪悪感に苛まれたアルゼンチンのハートは、何も書きこまれていない原初の静けさを・・・パンパスと空とのアナーキックな一体性を求めているんだ・・・」

「そ、それでもさ、バラ線[38]てのは」口をフォンデュでいっぱいにしたスロースロップ、ひたすらモグモグやりながら「あれは進歩じゃないの。この先永遠に、ただ広々ってわけにもいかんだろ——進歩ってのは、妨害しようとしても、なかなかうまくいくもんじゃ——」この調子で三十分しゃべりかねない。神聖な〈所有〉の観念に捧げられたかのような、土曜午後の西部劇も引き合いに出してスロースロップはしゃべり続ける——それも食事をおごってくれている外国人相手にだ。

エスクアリドーシはそれを無作法とは受けとらない。こいつは少々頭がおかしいのだと、一、二度まばたきしただけだ。「平時には」と、この男は説明を試みる、「つねに中央が勝つ。中央集権は時とともに強くなる。それを逆行させるのはムリだ、通常のやり方じゃな。

36 フィクションと"現実"とが絡まり合う迷宮を描くホルヘ・ルイス・ボルヘスの最初の短編集 *Ficciones* の本国での出版は一九四四年。その英訳とは別に、英語圏で編集された作品集のタイトルは *Labyrinths*（一九六二）という。

37 一八二九から五二年までアルゼンチンの独裁的指導者だったロサスは、ガウチョをインディオの大量虐殺に駆り立て、これがホセ・エルナンデスの叙事詩『マルティン・フィエロ』の背景をなしている。

中央の権力を散らしてアナキズムにもっていくには、非常時が必要だ…今のこの〈戦争〉な――すごいよ、こいつの威力は、ドイツに千年にわたって繁茂してきた小国をきれいさっぱり拭いさってしまった。いまは完全にオープンだ」
「いつまでもつんだい」
「もたない。長いことはない。しかし二、三ヶ月は…まあ、秋が来るまでには終戦になるだろう――おっと失礼（ディスクルペ）、秋じゃなくて春だな、北半球にはなかなか慣れない――春のうちなら、短期間ではあっても…」
「うん、だがよ、何をするんだい。土地を抑えてキープしてようってか。彼らに簡単にはじきだされてしまうぜ」
「土地を所有するってことは、そのぶんフェンスを増やすということではないか。そうではなくオープンにしておきたいのだ。われわれの望みは土地が成長し変化するところにある。〈ジャーマン・ゾーン〉が開放されている間は、希望は無限だ」そう言って、突然額をぶつけたみたいに目玉を回し、入り口のドアではなく天井を見上げたのだ――「危険のほうも無限だけどな」
彼らのUボートは今スペイン沖を巡航していて、一日の大半は水面下を潜航し、夜になると浮かび上がってバッテリーを充電し、時々こっそり入港して燃料を補給する。誰からどうやって調達するかという話にエスクアリドーシは立ち入らないが、共和派の地下勢力との間に何年にも及ぶコネクションが――慈悲の共同体が、変わらぬ信念の贈与が――あるらしい。…エスクアリドーシはチューリッヒにいて、理由はともかく彼の「亡命アナキズム」を支援してくれるかもしれない複数の政府と連絡を取り続けている。で、明日ま

38 牛馬を命綱として開拓が進んだ南北アメリカで、バラ線（有刺鉄線）は所有と切り離せないものだった。

CamScannerでスキャン

でにジュネーヴまで伝言を届けなくてはならない。その先メッセージはスペインを経由して、潜水艦まで届けられるしくみだ。だがチューリッヒにもペロン勢力の密偵がいて見張っているので、ジュネーヴの相棒の名は明かされない。

「その手伝いならできそうだ」指を舐めながらスロースロップ、「だが先立つものが、今のところ足りていない——」

エスクアリドーシが口にしたのは、シュヴァイターへの支払をすませて、スロースロップを何ヶ月も空腹から救うに充分な額だった。

「前金で半分いただけりゃ、すぐにも出発するよ」

アルゼンチンの男は、メッセージと住所と金を差しだし、店の伝票にさっと手を伸ばした。三日後に、ここクローネンハーレで再会する約束をして——「無事を祈る」

「あんたの無事もな」

テーブルに独り残るエスクアリドーシの悲しげな最後の一瞥、掻き上げた前髪、光の薄れ。

それはオンボロのDC - 3型飛行機だった。これを選んだのは月光との折り合いのよさ、窓がつくる前面部の顔のやさしさ、内外両側の暗さが理由である。

スロースロップは、積み荷に包まれて丸くなっている。金属の闇黒、骨に伝わるエンジンの振動・・・進行方向前方の隔壁を通して微かに赤い光が入ってくる。小さな窓に這いよって見れば、外は月光を浴びたアルプスだ。思っていたより小さいもんだ、もっと壮大なのを想像していた、へえ。・・・かれはソフトな木の削りクズのベッドに今また身を沈め、エスクアリドーシがくれたコルク・フィルターの煙草に火をつけて考える。悪くないもん

[illegible]……ジュネーヴで[illegible]いけないのか。残念だな。どうせなら遠いところへ――スペインとか、いや、あそこはファシストだったな。南太平洋――は、ジャップとGIだらけか。[39]ならば暗黒大陸アフリカか、あそこは土人と象だらけだろ、それとスペンサー・トレイシー……

「行けるところはどこにもない、スロースロップ、どこにもだ」その人影は木枠に寄りかかってうずくまっていた。体を震わせている。弱い赤光のなか、眼をこらして透かし見ると、そこになんと、気ままな冒険家リチャード・ハリバートン[40]の、口絵でおなじみの姿があった。だが、妙な具合に変化している。両頬があばたになってその上から新たにひどい発疹が、左右対称に出ているのだ。医学の心得のある目には、ドラッグの作用と映ったことだろう。乗馬ズボンはひき裂かれ、汚れている。その明色の髪はネットリと垂れている。腰を屈めてしずかに嗚咽しているようだ。B級のアルプスを見下ろす嘆きの天使。はるか下方では夜のスキーヤーたちがゲレンデに出て、勤勉にスロープを行き交っている――アクション、アクション、行動あるのみという彼らのファシスト的理想を磨きあげ、完成に近づけているのだ。かつてはハリバートン自身がその理想を、みずからの輝ける存在理由としていた。今はその影もない。

スロースロップは体を伸ばし、床面で煙草をもみ消す。床は天使のように白い木の削りカスだ。これに火が点いたら、一瞬で火だるまになる。歪んだ形でガタガタ飛んでいる飛行機の中でおとなしく寝ているしかなさそうだ。そうだよ、トンマ野郎、あれだけだまされて、まただまされた。リチャード・ハリバートン、ローウェル・トーマス[41]、ローヴァー・ボーイズ、モーター・ボーイズ[42]、兄ホーガンの部屋に積んであった黄色い『ナショナ

39 一九三七年と三八年のアカデミー主演男優賞を連続受賞したトレイシーは、三九年『スタンレー探検記』で、行方不明のリヴィングストン博士を発見するスタンレー役を演じた。

40 一九三九年に北大西洋上の海難事故で死亡している冒険家・人気作家。

41 冒険家、作家、ブロードキャスター。アラビアのロレンスを有名にした男として知られる。

42 どちらの愛国的冒険物語シリーズも、世紀の変わり目から一九二〇年代にかけて二十タイトルほど出版されている。

ル・ジオグラフィック』——みんな嘘をついてたんだ。むかしは誰も——屋根裏部屋の植民地時代のゴーストさえも——嘘だとは教えてくれなかったけど・・・

衝撃、横滑り、旋回。不様な着陸を「パンケーキ・ランディング」というが、まったく、こいつの飛行技術では凧揚げ学校も落第しそうだ。スイスの夜明けの光が小さな窓からさし込んでいる。スロースロップの身体じゅうの関節と筋肉と骨が痛んだ。さてと、出勤の時間である。

無事飛行機から抜けだして、むっつり顔で欠伸をしている早朝の旅客と届け物のエージェントと空港労働者らの群れにまぎれる。早朝のコアントラン空港の一方には鮮やかなグリーンの丘が、もう一方には茶色の街並みが続く。舗道はなめらかに湿っている。悠然と雲が流れる。モンブランが「やっほー」といい、湖も「こんちは」とほほえんだ。スロースロップは煙草二十本と地元の新聞を買い込み、道順を訊くと、やって来た路面電車に乗りこむ。昇降口と窓から眠気をとばす冷気が入りこむ。電車は〈平和都市〉ジュネーヴへ。接触すべきアルゼンチン人と会うのは、路線からだいぶ離れたカフェ〈蝕〉だ。玉石舗装の道をたどっていって出た小さな広場には、ベージュの日よけの下に青果を並べた屋台が並び、周囲は各種のショップやカフェ、植木箱、きれいに散水した歩道が取り囲んでいる。路地から犬が走り出てきて、また駆けこんだ。スロースロップはコーヒー、クロワッサン、新聞を手にテーブルにつく。頭上を覆う靄がやがて晴れ、太陽が広場に投げかける影が、彼の近くまで届く。さっきからアンテナは張っているが、見られている気配はない。彼は待つ。影は縮む。日輪は昇り、落ち始める。ようやく男がやってくる。言われた通りの風貌だ。真昼のブエノスアイレスに見る黒のスーツ、口髭、金縁メガネ。口笛のナ

ンバーは、ファン・ダリエンソ[43]の古いタンゴ。スロースロップはあらゆるポケットを大げさに捜す。エスクアリドーシに使えといわれた札を出して、目を細め、立ちあがり、近づいていく。

コモ・ノ、セニョール、もちろんです、五十ペソ紙幣、くずれますよ――椅子をすすめ、貨幣、ノート、カードを取りだす。テーブルは紙切れでいっぱいになり、それが徐々に正しいポケットに収まって、しまいに男にエスクアリドーシからのメッセージが、スロースロップにはエスクアリドーシへの返信が、しっかり渡った。これでオーライ。

チューリッヒへ戻る午後の列車はほぼ眠りつづけ、真夜中、おそろしく暗い時刻にシューリーレンで下車する。中央駅で〈かれら〉が張っている気がしたからだ。ヒッチハイクで市内へ向かい、ザンクト・ペーター[44]ホフシュタット前で降りる。ひとけのない通りの一角。教会の大時計が彼の上にかぶさると、無言の悪意が読みとれた。記憶は、遠い青春時代のアイヴィ・リーグの中庭へと移行する。影が濃すぎていつも時刻が読めなかった時計台。ますます不分明になっていく時の暗がりへ身を委ねてしまいたくなる誘惑。名前のない時間（いや、名前はあるのか。それは……やめろ……ヤメロ……）の恐怖と巨大な胸を抱いてしまいたいという衝動が、かつてないほど強くなって。虚栄だったのだ。昔のピューリタンたちは、それを虚栄と知っていた。彼らは、骨から心臓から、この世の虚しさを意識していた。構内に流れるサクソフォンの柔らかな音も、白のブレザーの襟元についた口紅も、神経質にくゆるファティマの煙も、ジャンヌの影から蒸発していくカスティール石鹸も、〈ノー味のキス〉も、観の歯にぬれたカーネーションも、みな虚しい。その裏には〈空無〉しかない。無は眠っていた。身の振げる直前に、下の学年のノタブラ者らに目覚

43 懐しいタンゴ音楽の作曲、演奏によって「ビートの王様」と呼ばれたイタリア系アルゼンチン人。

44 「聖ペーター教会」は千年以上の歴史を持ち、その大時計は教会のものとしてはヨーロッパ最大の大きさ。

CamScannerでスキャン

しされ、ベッドから引きずり出され、やめろラインハート、戸外へ運ばれていった。秋の冷気と、影と、足下の落葉。そのとき疑念に襲われた。こいつらは本当は誰か別者ではないのか——今この瞬間までのことは何ひとつ現実ではなく、ただおれたちを欺くための手の込んだ見せかけでしかなかったのでは。いま、スクリーンの像は消えた。タイムアップ。エイジェントが、とうとうおまえに追いついたのだ。

空無(ヴァニタス)の再発見の場としてチューリッヒほど適した場所もあるまい。宗教改革の国、百科事典のしんがりに載っている Zwingli の街だ。[45] いたるところに建つ石碑が思い起こさせてくれる。スパイもビッグ・ビジネスも、この街なら快調に墓石の間を動きまわっていられる。安心しろ、スロースロップ、おまえの昔の学友もここに来ている。大学の中庭でよくすれちがった顔、ハーバードで〈ピューリタンの秘儀〉の仲間入りをした連中だ。支配者〈ヴァニタス〉すなわち〈空無(エンプティネス)〉を敬い、[46] それを信じて行動すると厳かに誓った級友・・・その彼らがしかるべき人生設計にしたがって、ここスイスにてアレン・ダレスとその〝情報収集〟ネットワークのための諜報活動を行っている。ダレスの組織は最近では「戦略事務局 Office of Strategic Services」というらしいが、[47] イニシエーションを受けた者にとってはその頭文字OSSも秘められた意味を持つ。危機が迫ったとき、彼らはマントラとして、心の中で oss・・・oss と唱えよとの導きを受けている・・・oss とは、後期の、崩れた、暗黒時代のラテン語で「骨」を意味する・・・

翌日、カフェ〈シュトレゲリ〉でマリオ・シュヴァイターと会い、請求の半額を手渡したときスロースロップは、ヤンフの墓のある場所を訊いてみた。ではこの取引はそこで終わらせるとしよう、と決まった。墓は山中にある。

45 フルドリッヒ・ツヴィングリ(一四八四〜一五三一)は、ルターと同世代。チューリッヒの要職にありながら、カトリックの体制と闘い聖書主義の運動を展開した。

46 ハーバード大は徽章に Veritas(真理)の文字を入れている。それを Vanitas(空無)ともじる学生っぽい、と同時にそら恐ろしいジョーク。

47 スイスを本拠地としてナチスに関する諜報を行っていたスパイ組織。

CamScannerでスキャン

エスクアドリーンは〈クローネンハーレ〉にも〈オデオン〉にも姿を見せない。以後数日、思いついた場所は覗いてみるが会えない。ここチューリッヒに失跡事件が起こらないわけではないが、スロースロップはあきらめず探しつづける。メッセージはスペイン語なので一、二語しかわからないが、誰かに託す場合もあるだろうから、これをしっかり持っていないといけない。それに、まあ、アナキストの信条というやつには惹かれるところがあるのだ。その昔、シェイズの反乱軍がマサチューセッツで挙兵して連邦政府と戦ったとき、反乱軍側に「スロースロップ統御隊（レギュレーターズ）」という隊が結成されて、パークシャーの警備に当たった。*48 連邦軍と間違われないよう帽子に毒人参の小枝を飾った。これに対し、連邦軍兵士が帽子に差したのは白い紙の切れ端だった。当時のスロースロップ家は、紙との関わりは薄く、大規模な木々の殺傷とも無縁だった。生きたグリーンと死んだホワイトとの対比でいえば、まだ前者にくみしていた。後のスロースロップ家では、過去にどちらの側で戦ったのかという認識自体を喪失した。売り渡した、と言ってもいい。で、タイロンも、この一件に関し、世間体のよい無知を保って継承している。

いま彼の後ろから、ヤンフが埋葬された地下を通して風が吹きぬける。このところ何泊かスロースロップはここで野営をしているのだ。持ち金もほとんど尽きて、シュヴァイターが持ってきてくれるはずの情報を待っている。風を避け、うまいことくすねてきたスイスの軍用品の毛布にもぐり込む。眠ることさえできた。「ミスター・イミポレックス」が永眠するその真上でだ。最初の晩はヤンフの霊の訪れを怖れて寝つけなかった。ドイツの科学の魂は、死して後、どんな冷酷無比な反射行動に走るのか。その魂はきっと、無言のニタニタ笑いを浮かべて横たわっている亡骸（シェル）にも嫌がられるだろう・・・ヤンフのイメージ

その長アレン・ダレスは、戦後OSSがCIAに改組されると、その長官に就任。

48 一七八六年から翌年にかけ、マサチューセッツ州中部と西部で続いた「シェイズの反乱」は、自分たちを苦しめる法律の撤去を求めての蜂起という点で、独立戦争と同じ構図を持つ。ダニエル・シェイズの率いる農民たちはスプリングフィールド市の兵器庫を占拠した。争点のひとつが紙幣の扱いにあったことと、反乱軍が木の枝を目印にしたことは事実通り。ピンチョン家の祖先（アメリカでの元祖ウィリアムから数えて六代目の）ウィリアム・ピンチョンは連邦軍側の少佐として、反乱の鎮圧に当たっている。

CamScannerでスキャン

のまわりで複数の声が月光とさえずっている。と、一歩一歩、彼が、〈ソレ〉が、〈抑圧されたもの〉が、近づいている。・・・ナンダコレは？　起き上がり、無防備な顔を異国の墓石に向ける・・・エッ、ナニに？　そしてふたたび眠りに落ち・・・ほとんどソレにふれそうになって跳ね起き・・・目覚め、また眠る、その繰り返しで宵の口が過ぎていく。

訪れはなかった。どうやらヤンフは単に死んだだけのことであるらしい。翌朝、腹を空かし涎の垂れたスロースロップの目覚めは、それなりに快適、というかここ数ヶ月なかったほど気分がいい。これでどうやら、テストは合格したようだ。他人に課されたテストじゃなくて、今度ばかりは自分で課したテストにパスした。

眼下の都市が部分的に、朝の光に染まり始める。教会の尖塔、風見鶏、城の天守の白い塔からなる死者の都市（ネクロポリス）、そのマンサード屋根のついた幅広の建物の千個の窓が光をちらつかせる。朝の山々は氷のような半透明感をたたえている。日が高くなるにつれ、青いサテン地の皺ができていくだろう。湖は鏡のように滑らかだが、湖面が映す山や家の輪郭は細雨のような細かな斜線でかき乱されて不思議にぼやけている――アトランティスの、ズッゲンタールの夢のせいで？[49]　おもちゃの村々、雪花石膏（アラバスター）に着色した生気なき町。・・・スロースロップは身を屈め、山道の冷えたカーブを下りてゆく。戯れに雪を固めて大きなロブを放つ。他にすることがない――それか、スイス中で最後の一服になるかもしれないラッキー・ストライクのシケモクを吸う以外に。

道の向こうから足音。雪靴の金具の金属音。小脇に大きな分厚い封筒が見える。マリオ・シュヴァイターの配達人だ。スロースロップは金を払って、煙草一本とマッチ数本をせびる。別れてから納骨所に戻ったスロースロップは、焚きつけと松の枝の山にもう一度

49　ニーベルンゲンの伝説（その一ヴァージョン）では、ズッゲンタールという町が、金の宝物を秘蔵したまま水没したと語られている。

火をつけて、手を暖めてからデータに眼を通しはじめる。ヤンフの不在が、なにか匂いのように、彼を取り巻いている。慣れ親しんでいるのに名指すことのできない匂いに、いつ暴れ出すとも知れない癇癪質のオーラに包まれているかのようだ。情報がここにある。欲しい情報のすべてではないが（おっと、どれだけ欲しいんだ？）現実的なヤンキーとして期待していた以上の情報だ。この先何週間か、彼には好きなだけ自分の過去に浸る贅沢がゆるされる瞬間も、ごくわずかだがあるだろう。何も読まずにいたほうがよかったと後悔する時間さえできるだろう。

白の日曜日[1]は海辺で過ごそうとポインツマン氏は決めていた。このごろ少し誇大妄想っぽいが、たいしたことではない。"白のおとずれ"の廊下を快速の足取りでとばしながら抱く印象が——みんな体が固まってしまったみたいで、これは明らかなパーキンソン病だな、頭も体も冴えているのは私だけだ、なんて思いにとらわれるくらいのこと。国は平和を取りもどした。戦勝祭の晩のトラファルガー広場は、鳩の入る隙間もないほどの人出で、"ホワイト・ヴィジテーション"でもみんな狂おしく酔っぱらい互いに抱き合いキスを浴びせていたのだが、心霊セクションのブラヴァツキー派だけは別で、この連中は「白蓮の日」の巡礼に、セント・ジョンズ・ウッド、アヴェニュー・ロード十九番地へ出かけていた。[2]

終戦で、休日の催しも復活、ポインツマンにも少々はリラックスする義務感のようなものが生まれもしたが〈危機〉は厳然と存在する。組織の危機にあって、リーダーは常に——たとえ休日気分に浸っていても——手綱を引きしめていなくてはならない。

軍課報部のヘマなやつらがチューリッヒで見失ってからというもの、スロースロップに

1 イースターから七週間後のペンテコストの祝日のイギリスでの呼び名。新たに洗礼を受けたクリスチャンは白いローブに身を包む。一九四五年は五月二十日だった。

2 ドイツが正式に降伏した五月八日のVEデイは（ピンチョンの誕生日であるだけでなく）、神智学の創唱者ブラヴァツキー夫人（一八三一～九一）の命日で「白蓮の日 White Lotus Day」と呼ばれる。この住所はブラヴァツキー最晩年のブラヴァツキー

関するニュースは一ヶ月近くも入っていない。〈社〉(ザ・ファーム)のやることにポインツマンは、もはやうんざりだ。あれほど巧妙に仕組んだことなのに、失敗するもんだろうか。クライヴ・モスムーンらと練った当初の計画は、鉄壁と見えた。スロースロップをカジノ・ヘルマン・ゲーリングから逃走させ、その後はPISCESでなくシークレット・サービスの監視下におく。経費削減策だ。このプロジェクトが始まって以来、監視にかかる費用の問題は、財政全体の荊冠(けいかん)の中でも、突出した苦痛をもたらすトゲだった。たかが経費のことで、偉大なキャリアが潰えていくというのか・・・その前に、スロースロップのことで正気を失わなければの話であるが。

ポインツマンは失策をおかしたのだ。テニスンの詩のように「誰かがしくじった」(サムワン・ハド・ブランダード)*3と言えればいいのだが。しかし、ハーヴェイ・スピードとフロイド・ペルドゥー*4の英・米人ペアに、スロースロップの性の冒険のランダムなサンプルを与え、その実地調査の権限を与えたのはポインツマン、彼以外の誰でもない。予算的にも問題なく、厄害の生じるはずもないことだった。英米混成のふたり組は、さながらオズの国のマンチキンのごとく、ほとんどスキップしながら、エロティックなポアソン分布の中へ跳ねていった。ドン・ジョヴァンニのヨーロッパ地図——イタリアで六四〇、ドイツで二三一、フランスで一〇〇、トルコで九一、スペインでは、それが、なんと、一〇〇三!*5——これがそのままスロースロップのロンドン地図だ。さてその愛欲の地に出かけていったふたりの密偵は、心なき(マインドレス・)快楽(プレジャーズ)の香りにすっかり感染してしまい、午後はひねもすレストランの庭園に腰を据え、菊の花のサラダやマトンのキャセロールをつっつ いたり、果物の並ぶ前で戯れあっている。——「おーら、スピード。カンタロープ! こいつにお目にかかるのは三期目*6以来だぜ

の住まいで、神智学協会ヨーロッパ支部局となっている。

3 引用は「軽騎兵旅団の突撃 The Charge of the Light Brigade」(一八五四)より。

4 Perdu は英語では「パードゥー」と読むのだろうが、監視人の名前が「見失った」を意味するフランス語に似ている点にも注目。

5 モーツァルトの歌劇『ドン・ジョヴァンニ』では、主人公の遍歴のようすが国別の女性の数で示される。

6 ローズヴェルト米大統領の三期目は、この年一九四五年の一月まで。

CamScannerでスキャン

――うおお、この匂い、嗅いでみな、こたえられんなあ！　カンタロープ一個どうだ、スピード？　おい、ほら」

「エクセレントだね、ベルドゥー、エクセレントだ」

「お、おー・・・おまえどれがいいんだ？　一個選べよ」

「一個？」

「そうさ。こいつ――」悪漢が怯えた少女の顔をつかんで手荒にねじ向けるようにして、メロンの顔を相棒に差し向ける。「こいつはおれが選んだ一個、だろ？」

「あれ？　ふたりで食べるのかと――」と、いまなおベルドゥーのメロンとは認めがたいそれに向けて弱々しく手振りする。メロンの凹彫の皺模様から（クレーターだらけの月面に女の顔が浮かぶみたいに）囚われの女の顔が現れてきた。伏し目の表情、上瞼はまるでベルシャの天井・・・

「いやいや、おれは、いつも――」ベルドゥーにとってはなんともバツの悪いことになった。リンゴを食べてしまったり、口の中にブドウを放りこんだ後で、その釈明を求められているみたいな。「そのさ、つまり、なんていうか、食べるのよ・・・まるごとさ」と、そういって、エヘへと（本人の期待するところでは）フレンドリーに笑ってみせる。このやりとり、どう見てもオカシイよと、やわらかく伝えられないかと願ってのこと――

――なのだが、スピードは相棒の笑い声を、情緒不安定さの表れと見てしまう。なにしろこのいささか反っ歯気味の骨張ったアメリカ人が、イギリスの家々をひょいひょい訪ねて回るさまは、風になびく街頭のあやつり人形のようなのだ。スピードは首を振りながら、結局自分のカンタロープ・メロン丸々一個を選ぶのだが、気がつけば支払い役が自分にな

CamScannerでスキャン

っていた。それも途方もない額だ。たちまちベルドゥーの後を追って駆けだした。ぴょんぴょん、トゥララ、ドタン——で埒があかない。

「ジェニーですか？　いいえ——ジェニーという名の子はいないわ」

「ジェニファーさんか、あるいはジュヌヴィエーヴさんは？」

「ジニー嬢？」（データの綴りが違っていたのかもしれないし）「ヴァージニア？」

「ねえ、お兄さんたち、お楽しみが欲しいんだったら」戸口の女はニタリとする、赤ら顔いっぱいの笑みから、〝まあオハヨー、すばらしくグッドなモーニングですわね〟の声が響き渡ってきそう。その笑顔の太さは、ふたりの男を包みこむに充分だ。ふたりとも口で笑って体で震えている。このご婦人は母親ほどの年齢——であるばかりか、ミセス・ベルドゥーとミセス・スピードの最悪の特徴を兼ね備えた合同の〈マザー〉たりうる存在なのだ。いや「たりうる」どころか、今ふたりの目前でその実物に変身した。難破の海には妖婦が多いというけれど、ここにも水気も色気もたんまりの誘惑女が現れた。ボカンとみつめるヘナチョコ捜査員が、彼女のオーラに引きこまれていく。人目をはばからないウィンク、ヘナで染めた髪の金属的な艶、レーヨン地に描かれた情熱の花——彼女の紫の眼の狂気にヨロヨロ屈しそうになる一歩手前で、彼らは罪の意識のノックに応えた。自分らはここに何をしに来たのかを思いだした。スロースロップの逸話ゾーン、毎週の遍歴の観察(Slothropean Episodic Zone, Weekly Historical Observations：略称 SEZ WHIO)の仕事にかからなくてはならない——その意識が、道化師の変装をして、頭の中から飛びでてきたのだ。下卑た、しまりのない道化師だ。無言のまま体液を話題にしたジョークをかませる。禿頭で、両方の鼻の穴から鼻毛の滝が落ちていて、それを三つ編みにし小さなアシッ

ジェグリーンの膝をヌタクタンで組んでいる　そいつが、サンドバッグの山をまたぎ、幕が降りる直前にドタバタと駆けこんできて、息が戻るひまもなく耳障りなかん高い声でふたりに名を列す。「ジェニーも、サリー・メイも、ジゼルも、アンジェラも、キャサリンも、ルーシーも、グレッチェンも、誰も見つけていないんだぞ。おまえら、いつになったらわかるんだ。いつになったら現実を見るんだ。えっ」

「ダーリーンもいない」。その報せが入ったのが昨日のこと。ふたりはクォード夫人の住居まで、その名をたどっていったのだが。この派手な身なりの若々しい未亡人は、「ダーリーン」などという名前を手快につける親がこの国にいるもんですか、とまで言い切った。「ご愁傷さま」とのことだ。このクォード夫人、ペディキュアもこってりとしたメイフェア地区に暮らす有閑マダムで、その一角から抜けだした密偵ふたりはほっと一息ついたのだった……

　いつになったらわかるんだい？　いや、ポインツマンにはすぐにワカルのだが。そのワカリ方というのがただならない。寝室に入った瞬間、誰かに飛びかかられるのがワカルときの感じ。天井の片隅に、フヌケな死の笑みを浮かべた巨大なウツボが潜んでいて、そいつが、こちらの無防備な喉めがけて飛びかかる。そいつの声は恐ろしいことに、引きのばされた人間の声。セックスに喘ぐ声だとわかるのだ……

　要するにポインツマンは、悪夢から眼をそむけるのと同じく反射的に問題を避けているのだ。しかしこれが空想ではなく、ゲンジツだったとしたら……

「まだデータが揃っていない」この点はすべての陳述において、まず強調しておかなくてはならない。「われわれは認めるにやぶさかでないが、初期のデータにおいては」いい

7　スロースロップが訪ねたイースト・エンドの家の病気持ちのおばさんのイメージとは明らかに異なる。

か、誠実さを振りまく、一スロースロップ中尉の地図に登場する名前か、彼のロンドンにおける行動としてわれわれが時系列上に確定しえた事実集合と一致を見ないケースが一定数存在する。もちろん、現時点において、だ。これらは、ほとんどすべてがファースト・ネームであって、いわばYのないX、縦軸のない横軸のようなものであるから、"きわめて遠い"といっても、どの程度遠いのか知るのはむずかしい。

もう一点。スロースロップの星印の多く――そのほとんどであってもいいのだが――いつか遠い将来において事実ではなく性的幻想を示しているにすぎないことが証明されたとしたらどうか。そうであっても、われわれのアプローチの有効性が脆弱化することはあるまい。ジークムント・フロイトにしても、初期のウィーン時代、よく似た蓋然性侵害の問題に行き当たった。"パパがあたしをレイプした"というような数多くのストーリーは、たとえ実証のレベルでは虚偽であろうとも、臨床のレベルでは間違いなく真実であろう。このことは明確にしておきたい――PISCESでわれわれがかかわっているのは、かなり厳密に定義された、臨床的真実である。それ以上に広義の作用因を求めることはしない」

ここまで、ポインツマンはひとりで重荷を背負ってきたのだ。フューラーの孤独。スロースロップという、共にスターダムへ上りつめるべき黒子の相棒から差す光線を感じるときには力がみなぎる……だがそれを他人とシェアすることは望んでいない。今は、まだ、だめだ……

彼のスタッフ・ミーティングはこのところ日を追ってひどく無意味なものになってきている。すでにドイツは「降伏」したのだから、「降伏促進のための……」というPISC

8 スピードとペル[…]ゥーについての回想を含め、この節で語られるポインツマンの想念には、精神病の症状が露わだ。

9 「リーダー」の意味で、ふつうヒトラーを指す。

ESの名は変えるべきだとか、レターヘッドはどうするとか、些末なことにばかり時間が割かれる。政府側を代表してシェル・メックス・ハウスから来ているデニス・ジョイントの意向は、このプログラムを〈SPOG〉[10]の傘下に収め、ロケットの部品回収を司る〈バックファイア作戦〉の付属機関として位置づけたいというものだ。それの本部はクックスハーフェンの沖合、北海の海上にある。二日に一度は、どこかしらからPISCESの統合、いや解散という話さえ舞いこんでくる。最近のポインツマンは、「朕は国家なり（レタ・セ・モア）」の精神モードに容易に落ちこむようになった——他に誰が何をしているというのだ。このワタシひとりが組織をまとめているではないか——しばしばワタシのむきだしの意志だけによって…

当然ながら、シェル・メックス・ハウスはスロースロップの失踪を知って大慌てだ。何しろA4について（のみならずA4について大英帝国がどこまで知っているかについて）知りうることのすべてを知っている男が、自由に泳ぎまわっているのだ。チューリッヒにはソヴィエトの課報員がうようよしている。スロースロップがすでに彼らの手に渡っていたら？ ソ連は春にペーネミュンデを占領した。ロケット製造の中心地ノルトハウゼンもソヴィエトの手に渡るということは、ヤルタでの取り引き[11]で決まっているらしい…少なくとも三つの機関——VIAM、TsAGI、NISO[12]——に加えて他の人民委員会（コミサリアート）出身の技術者たちが今も、東側へ連行すべき人間と機械のリストをもって活動している。SHAEF勢力圏内では、米陸軍の兵器部門と、対抗する無数の研究チームが目に入るかぎりのあらゆる物の収拾に余念がない。すでに[13]フォン・ブラウンをはじめとする五百名の身柄を確保し、ガルミッシュで拘束している。彼らの手にスロースロップが落ちたら、ど

10 「特殊発射体事業グループ Special Projectiles Operations Group」は、ドイツの科学技術を計画的・組織的に「回収」する目的で、米英共同の課報組織CIOSの傘下に、ちょうどこの頃誕生した。「バックファイア作戦 Operation Backfire」とは、V2の部品を回収してロケット打ち上げを目指すもので、この年十月には、クックスハーフェンから三機の打ち上げを成功させた。アメリカは「ヘルメス計画 Project Hermes」のもと、ニュー・メキシコ州の砂漠へ、部分的に組み立て終わった百機のロケットを持ち去った。

11 チャーチル、ローズヴェルト、スターリン

ういうことになるのか？
　危機に輪を掛けて、メンバー離脱の問題がある。ロッロ・グローストは心霊研究協会に戻っていったし、トリークルはクリニックを開業した。マイロン・グラントンもフルタイムのラジオ・パーソナリティに復帰。メキシコも離れつつある。カッチェ・ボルヘジアスは相変わらず〈夜の女王〉のお勧めを果たしているが、准将が健康を害したことで〈老いぼれめ、せっかく与えた抗生物質を飲み忘れたか。そんなことまでポインツマンが心配せねばいかんのか〉不安を募らせている。むろんゲザ・ロージャヴェルディはいる。狂信者。ロージャヴェルディはけっしてプロジェクトを離れることはないだろう。
　というなかで計画した海辺の休日。メンバーが、ポインツマン、メキシコ、メキシコの彼女、デニス・ジョイント、カッチェ・ボルヘジアスの五人になったのは、政治上の理由が大きい。縄底の靴をはき、戦前の山高帽（バウラーハット）をかぶったポインツマンは口元に稀有な笑みを浮かべている。天候は理想とはほど遠い。空は曇り、午後遅くには風も冷たくなりそうだ。遊歩道には、グレイの鉄のガード下から出てくる豆自動車（ドッジェム・カー）のオゾンの匂い[*14]が、行商人が売り回る手押し車のエビ・カニや、潮の香りと混じり合う。小石の浜辺は家族連れでにぎわっている。靴を脱いだ父親はラウンジスーツと白いハイカラー。母親は戦争中の樟脳の眠りから眼をさましたブラウスとスカートをまとい、子供たちは思い思いのサンスーツ、ナッピーズ、ロンパース、ショートパンツ、ニーソックス、イートンハットに頭や胴や尻や足を包んで駆けまわっている。アイスクリームとスイーツとコカ・コーラ、ザル貝（コックル）とオイスターとシュリンプには塩とソースがかかっている。熱狂した軍人たちと連れの女が覆いかぶさるピンボール・マシンが身をくねらせる。人間がボディ・ランゲイッジを投げつけ、

による連合三・国首脳会談は、この年二月に開かれた。

12 それぞれ「飛行体についての全連邦機関」「中央空気流体力学研究所」「航空機器のための科学研究所」。他のコミサリアートの技術者も、ロケットの科学技術の諜報に集中的に駆り出された。

13 ヴェルナー・フォン・ブラウンは五月二日、部下の研究スタッフ全員を連れ、自ら選んでアメリカ軍に投降した。ガルミッシュ・パルテンキルヒェンは、バイエルン州のアルプス山麓の町。

14 電気で走るバンパーカーは、モーター内で繰り返される火花によってオゾンを発生させる。

罵倒し、うめく一方で、光る鉄球は木製の障害コースをゴロゴロと転がり、カチャーン、ピカピカッ、フリッパーがダン・ダダン。ロバがヒーンといななないて糞をすると、子供はそれを踏みつけ、親が悲鳴を上げる。縞模様のキャンバス地の椅子に深々と沈みこんだ男たちのまわりでは、ビジネスとスポーツとセックスの話に花が咲くが、一番人気は政治の話題。オルガン弾きがロッシーニの『泥棒かささぎ』序曲を奏で（ちなみにこの曲は、後にベルリンでふれるように[15]、ひとつの音楽史的頂点をなすのだが、人びとはその事実を無視して、意志の伝達のレベル以上に深まることのないベートーヴェンの音楽を好むのだ）、今ここで小太鼓も金管楽器も響かないメロディはしっとりと希望にあふれ、ラベンダー色の夕暮れとステンレス鋼のパヴィリオンを約束する。あらゆる者に貴族の地位と、あらゆる種類の無償の愛を約束する・・・

今日は仕事の話をせずに、会話の自然な流れにまかせる。その中で、みんなが本心を漏らす瞬間を待つ——これが今日のポインツマンの作戦だ。だが、うちとけないのか、自制しているのか、集めた仲間の口は重い。会話はミニマル。デニス・ジョイントはスケベそうな薄笑いをカッチェに向け、ときどきロジャー・メキシコを疑り深そうに睨む。そのメキシコは、ジェシカと何かあったようで——この頃トラブルの頻度が増している——今日のふたりは互いに眼も合わせない。カッチェ・ボルヘジアスの視線は海の向こうへ行ったきりだ。この娘が何を考えているのか、一向に見えてこない。彼女にどれだけ人を動かす力があるのかは知らないが、それでもポインツマンは彼女に怖れを抱いている。いまも知らないことが多すぎるのだ。さしあたっての不安は、パイレート・プレンティスとの関係だろう。プレンティスは何度か〝ホワイト・ヴィジテーション〟にやってきて、カッチェ

15　下巻86ページからロッシーニ好きとベートーヴェン好きによる論争が始まる。

に関するかなり具体的な質問をしていった。最近、PISCESの新しい支局がロンドンにできてからは（すでに「〈第十二宮〉」というばかげた渾名がついたというが、あのサルガキのウェズリー・シルバーネイルか誰かの仕業だろう）、プレンティスはよく出没して付近をうろつき、秘書に色目を使ってはファイルをのぞき見ようとした。……何なのだろう、〈パイシーズ〉は、VEデイを乗りこえて、新たにどんな死後の生を見いだしたというのか？ プレンティスは何を求めて……何を賭けているのか？ このポルヘジアスに恋しているのかい？ この女も、恋に落ちることがありえるのか？ ラヴ？――聞いただけで叫びたくなるな。この女にとってラヴとはいったい……

「おい、ロジャー」若い統計専門家の胸をつかむ。

「そっか、魅惑されたいジャーナ」は、そわそわした背中にX字のストラップがかかる花模様のワンピースを着た、ちょっとしたリタ・ヘイワース的な美貌に目をやっていたのに。

「なあロジャー、わたしはいま幻覚に襲われている」

「そう、そう、幻覚ですか。いったい何が見えるんですか？」

「ロジャー、見えるんではない……そーーっ、だな……馬鹿を言うな、わたしには見えてはおらん。聞こえるんだ」

「いや、何が聞こえるんです」ロジャーの声はややむかつき気味。

『いや、何が聞こえるんです』というきみの言葉が聞こえる。それが気にいいいい……」

「ふーーーん、そうですか」

「ふーーーんでいいのか、そう。それはだな、わたしの幻覚がとれなければ不快だろう。きみの声を聞かなければならなくなったからだ」

16 双魚宮（ピイシーズ）は黄道十二星座の十二番め。

17 この時期、フレッド・アステアに続いてジーン・ケリーも共演『カバーガール』（一九四四）したリタ・ヘイワースは、戦場のピンナップ・ガールとしての人気もトップだった。

このふるまい、ただでさえ衆目を集めるだろう、それが通常はしいふるまいしかしないポインツマンなのだから。みんなの頭の中で回転していたパラノイアも一時停止を余儀なくされる。それはまるで「ホイール・オブ・フォーチュン」。そのスポークを通して景品が見える。ラッキー・ストライク、キューピー人形、キャンディ・バー。

「ほら、きみはどう思う？」若しいブロンド男のデニス・ジョイントが、膝はどきある肘でカチャカチャをつつく。職業柄、この男は瞬時のうちに交渉相手の値踏みをする。カッチェのことは、お楽しみが好きな愉快な子と思いこんだ。そう、リーダーになれる器。まちがいなく。「あの人、急にアタマがおかしくなったのかな」声をひそめ、スポーツマン風パラノイアのニヤリ笑いを偏屈なパヴロフ主義者の方向へ向ける——のだけど、直接ぶつけるわけではない。相手がこんな精神状態でいるときに、目と目を合わせてしまったら命取りだ……

いっぽう、ジェシカはお得意のフェイ・レイ[18]のポーズをとりはじめた。一種の防衛的麻痺というか、ウサギに天井から叫びかかられたときの反応に似ている。だがジェシカを襲おうというのは、巨大な類人猿の握りこぶしだ。安全で侵されえないと思っていたその部屋に侵入してくるニューヨークの電光……黒い剛毛、魂の必要が、悲劇の愛が動かす肘に対しての……

「そのなかでさえ、みなさん」映画評論家のミッチェル・プリサイプレイスが全十八巻の決定版『キング・コング研究』の中で述べている。「コングはその女を心から愛していた」から、そのテーマから出発して、プリサイプレイスは一滴の水も漏らさぬ分析を行った。カットされたシーンも含めたすべてのショットをくまなく調べて象徴性を探査し、エキスト

18 ジェシカが『キング・コング』の女優の演技を真似るのは二度目。一度目は114ページ。

ラから小道具係、果ては特殊効果技術班を含む関係者全員の履歴を掘りおこし・・・さらには〈キングコング・カルト団〉（このメンバーシップの条件が、作品視聴百回以上、プラス八時間に及ぶテストに合格すること）の会員たちとのインタヴューも入れた。・・・それでも充分ではないのだ。世に「マーフィーの法則」というものがある。そう、ゲーデルの不完全性定理[19]を、アイリッシュ・プロレタリアート流に無骨に言い換えたやつ。あらゆる点にチェックを入れて、万事順調、突発事故など起こりえない・・・というときにも、きっと何かが起こるという法則。ブディング准将の『ヨーロッパ政治において起こりうること』の一九三一年（といえばゲーデルの定理が出た年）の版では、あらゆる可能性の順列組み合わせを網羅したはずなのに、ヒトラーの登場に関してはまったくふれられなかった。いくら遺伝の法則を確立したといっても、突然変異は生じるのだ。A4ロケットのような決定論的な工学の産物から、〈Sゲレート〉のような、スロースロップが聖杯のように思って追い求めるものがひょっこり出てくるのも同様。さらにいえばニョッキリと世界一の高さに勃起したビルのてっぺんから堕天使ルシファーのごとく墜落した黒き「身代わり（スケープ）類人猿」が、時充ちて産みおとした子供たち、すなわち〈黒の軍団（シュヴァルツコマンド）〉の面々が、いまなおドイツ国内をかけめぐっているだろうとは、ミッチェル・プリティプレイスにしても予見できなかったであろう。

PISCESではこんな話が広く信じられている――〈シュヴァルツコマンド〉は、今はなき〈ブラックウィング作戦〉が、白日のもと、大地の上へ〝呼び出して〟しまった悪霊だ、と。心霊セクションの連中は、しばらく大笑いしただろう。黒人のロケット発射隊が実在したなんて。去年の敵を怖じ気づかせるために考案された架空の物語が、文字通

19　完全無欠と思える論理体系に必然的に穴がありうることを、クルト・ゲーデルが論理的に証明した定理。

りの真実だったなんて。出してしまった霊を、今から瓶に戻す方法はない。呪文の綴りを逆にして唱えようにも、誰一人その全体を知らない、チームワークというのはそういうものだ。…ともかく「黒い翼」にまつわる最高機密文書を捜してみよう、そうすればいったいどこで何が起きたのか、ぼんやりとでも想像がつくかもしれない、と、よくよく捜してみたところで、奇妙なことに、特に枢要な文書にかぎって紛失していたり、作戦終了時以降の日付で書きなおされているのがオチだろう。今となっては呪文の作りなおしは不可能だ。もちろん、エレガントでバッドな詩的推論が出てくるのは毎度のことだ。だが初期の推測さえ、虫食いまたは全面黒塗りになるにきまっている。たとえば、フロイト派のエドウィン・トリークルの一派（最終的には同じフロイト派でも少数派の心霊セクションの精神分析一派と仲たがいを始める）が提出した試論も、跡形なく消されるだろう。その研究は、死者に憑かれるというよくある現象の定量的把握の基盤を探る意図で始まった。しばらくして、転出願いが提出されたり、「最近ここはタヴィストック・インスティテュート[20]みたいだな」という悪口が地階ホールのそちこちでささやかれたり。クーデターの幻想がわき起こる。その多くは壮大で絢爛たるパラノイアで、錠前職人や溶接工が流入し、オフィス用品は謎の消失、加えて断水や暖房停止の事態も招いた…けれども、トリークル一派はフロイトの、さらにはユングの思考枠への執着をやめない。そんな彼らのもとに〈シュヴァルツコマンド〉が実在するという知らせが入ってきたのがVEデイの一週間前。ひき続き巻き起こった非難と怒号と神経衰弱の渦、および詳述すべからざる悪趣味な事態の中で、実際誰が誰に向かって何を言ったかという個々の記録は喪失したけれども、誰かの記憶によれば、ギャヴィン・トレフォイルが、クリシュナ神のような青い色の肌をして、[21]

20 第一次大戦直後に設立させた精神衛生研究所で、イギリスでのフロイト、ユング派分析医の牙城。

21 皮膚のピグメントを自在に調節できるキャラクターだが、283ページでは彼の能力について「オートクロマティズム」

装飾的に刈りこんだ樹木の間をスッパダカで駆けぬけ、その後を、斧を手にしたトリークルが追いかけてきたという――「巨大な類人猿といったな、だったら見せてやる、巨大エイプとはな……」と叫びながら。

実際、彼は人を選ばずそいつを見せようとする。われわれが見たいわけはないのに。純真なトリークルは、同じ部局で同じプロジェクトにかかわった者は、革命の同志のように、全員が白い批判にさらされるべきだと考えているのだ。相手の感情を害する意図があったわけではない。ただみんなに――みんな育ちのよい連中だから――示そうとしたのだ。黒さに対する自分らの思いは、糞便に対する感情と結びついていること。そして糞便への感情が腐敗と死への感情と一体化していること。彼自身にとってそれは明白な事実なのに……なぜ連中は耳を貸そうとしないのか？ なぜ彼らは認めようとしない。みずから抱えこんだ抑圧こそが魔法の力を呼び戻したのだと。ヨーロッパ文明が倒錯を突き進んで疲弊していく中で失った魔術を使って、現実に、生きた姿の人間たちを生みだしたのだと。それも《最精鋭の諜報によれば》本物の、生きた武器をもつ人間をだよ。ちょうど、ほら、ペネロピー、生前は一度も一緒に寝たことのない死んだタちゃんが、夜な夜なベッドにやってきて、きみの背中に体をすり寄せてくるみたいな……それとも流産した赤ちゃんが夜泣きをしてきみを起こし、幽霊の唇できみの乳房に吸い付くようだというべきか……そう、これらの連中は実在し、生きているんだ、きみが〈巨大類人猿の手〉の中で叫んでいる間にも……だが向こうを見やれば、ずっと適任なのがいる。運 命 の 輪の下を、クリーム色の肌をしたカッチャが、いまにも浜辺を駆けて、比較的穏やかなローラー・コースターの中へ消えようとしている。これはポインツマンの幻覚だ。彼は心の制御を失った。カッチ

という言葉が使われている。これは元来二十世紀初頭にリュミエール兄弟が開発したカラー写真技術、トレメイルの皮膚もRGB三色の色素を配合して「青」にも「赤」にもなれるのかもしれない。

ェを完全に手中において制御するはずの当人か。ならばカッチェはどうなる? 狂った制御に操られるままか。ひどい話だ。情味のあるプリッツェロ大尉の革鞭と苦痛の世界にいたときも、こんな恐怖を味わったことはなかった。

ロジャー・メキシコはこれを、自分への仕打ちととる。なんだよ、おれはあんたのために動いてるんに・・・

現実からのたがが外れたポインツマン氏は、この間ずっとある声を聞いていた。その妙になじみのある声の持ち主を、〈戦争〉報道によく出てくる顔と結びつけて想像したことがあった。

「いまおまえのなすべきことを伝える。メキシコを確保せよ。いまほど彼が必要なときはないぞ。歴史が終焉するというおまえの寒々しい懸念はすっかり癒され、過去の悪夢としておまえの伝記の一部となった。だがアクトン卿は常日頃なんと言っておったか。歴史の織物は、無垢な織手が織るのではない[*22]ということだな。そこにいるメキシコの恋人は、おまえの企画全体にとっての脅威だ。彼女と別れずにいるためなら、メキシコは何だってしかねない。いくら彼女が嫌な顔をし、ひどい言葉を吐いたとしても、結局、彼は後を追って消えてしまうだろう。軍職を去って市民の間に紛れてしまえばもう探せなくなる。いま動かないと大変だぞ、ポインツマン。〈バックファイア作戦〉がATSの女性陣を〈ザ・ゾーン〉へ送りこんでいる。ロケット・ガールズといってな、クックスハーフェンの試射場では秘書としてだけでなく、専門的な仕事の補佐もしている。このデニス・ジョイントに頼んで、SPOG本部に一言耳打ちしてもらうだけでいい。そうすりゃこの娘は、おまえの邪魔をしなくなる。メキシコは騒ぐだろうが、それも一時のこと、うまく導けばさび

22 「権力は腐敗しやすく、絶対的権力は絶対に腐敗する」という一文の後に続く、歴史家ジョン・アクトン卿の言葉。初出はクレイトン司教への手紙(一八八七)。

しさをガソリンにして〈滅私の精進〉をするだろう、違うかね？ サー・デニス・ネイランド・スミスは若い時分のアラン・スターリングに何と言ったか。アランのフィアンセが悪辣な黄色人種の手に落ちたときのことだ。憶えているか、『わしにも憶えがある、スターリング、身を焼かれるような痛みだろう。だが、火傷に一番よく効く軟膏は、職務への埋没なのだよ』と。わかるね、われわれにはわかる、だろう？ このネイランド・スミスの表すものが何であるか[23]」

「わかるぞ」ポインツマンが声を発した。「だがあんたにわかっているかどうかは疑問だな。なんとなれば、あんたが誰であるのかわからないからだ」

いきなり噴き出たこの言葉に、まわりの者は不安を隠せない。警戒の表情をあらわにして後ずさり。「医者を捜したほうがいい」とつぶやきながらデニス・ジョイントがカッチェに目配せする——まるで金髪でクルーカットのグルーチョ・マルクスみたいだ。ジェシカはさっきの不機嫌も忘れてロジャーの腕をとる。

「ほおら言った通りだ」声がまた始まった。「あの女、おまえに対して彼を守っている気だ。さあ、今こそ稀有な機会ではないか。東と西を一身に体験するチャンスなど、そうあるものではないぞ、ポインツマン。今おまえはネイランド・スミスとして職業倫理を説く立場と、フー・マンチューになって、若い女性を意のままに操るパワーを兼ね備えているのだよ。どうだね、ヒーローと敵の両方同時に体現するというのは。わたしならすぐに飛びつくね」

「しかしあんたはわたしじゃない」などと言いかえしそうになってポインツマンはかろうじて気づいた。まわり中、皿のような目で自分を見ていた。「いやあ、ハハハ」とごまか

23 東洋の悪の首領フー・マンチュー博士に対峙するロンドン警察の刑事が、ネイランド・スミス。言及されているのは *The Trail of Fu Manchu*（一九三四）で、刑事の友人の娘——その恋人がアメリカ人青年のアラン——がフー・マンチューの一味に掠われたという設定。

CamScannerでスキャン

して、「独り言を言ってしまった。ちと——なんというか——エキセントリックかな、ハハハ」

「陽（ヤン）と陰（イン）だよ」例の声がささやいている、「陰陽の巴（ともえ）なのだ・・・」

CamScannerでスキャン